



5
1630

1630

1630

温故日録卷第一

睦月ノ月六

三始トシノハジメ 歳始

三日始トシノハジメ 朝始

改年アラタシキトシ 荒五月

明年アラタシキトシ 新年

迎年ムカヒトシ 古年

去年クニトシ

唱星ウタヒシ

屠蕪ト 白散
藥子

温故日録卷第七

文月

初涼ハジメシズメ

殘暑ノゾクアツサ

身入ミミヤ 移香ウツリカ

冷ヒヤカ 酒終サケノハジメ

風カゼ ひやく

扇置アヒ 弃扇ウツリアヒ

七夕タチウチ

乞巧キウカウ 奠マシ
立庭タチニワ 微ヒコ

東條家藏書

東條家藏書

齒固ハカク 鏡ミタマ

氷ヒヨウ 樣ヤウ

腹赤ハラカ 鞆タン

國栖クニノ 奏ソウ
國栖クニノ 笛フエ

初鳥ハツトリ

筆試ヒツシ

曆用リキヨウ

門松カドマツ
門每立小松カドニヒトコノマツ

年越而トシヲスグ

若水ニギハヤヒ
包井ツミ 閑ヒラ

初夢ハツユメ

凍解コウゲ
氷ヒヨウ 流ナガ
氷ヒヨウ 隙ヒラ
氷消ヒヨウノク

東風コノカゼ

若菜ニギハヤヒ
七種ナナノカサ
芥カイ
薺ナツメ
蕨ワケ
菁アヲ
莖ヒラ
莖ヒラ

像ウツ 盥水ウツク 星ホシ
願絲ネガヒ

烏鵲橋カサガサノハシ
寄羽橋ヨリハシ

紅葉橋カキハハシ
天アマ 河カハ
梶カキ 兼書ニカキ 哥カ

年渡トシヲスグ
梶カキ 兼書ニカキ 哥カ
星合ホシノアヒ

秋去衣アキノキ
星祭ホシノマツル
星ホシ 手向テノムカ

星ホシ 笑ウツク
二フタ 星ホシ
妻メノ 迎舟ムカヒフネ

牽牛ヒメカサネ
妻メノ 越舟コシフネ
彦星ヒコホシ 妻メノ 喚舟コエフネ

妻メノ 送舟オクフネ
玉タマ 依可介祭ヨカノケノマツル

玉祭タマノマツル
相撲使ソウブキ
相撲ソウブ 競ケイ

新綿ニギハヤヒ

鵜坂祭ウエノサカノマツル
鵜坂杖ウエノサカノツヱ

三ミ 仇山祭サカヤマノマツル
御謝山狩ミヤノサカヤマノカゲ
穂屋作ホノヤノツクリ

初嵐ハツアラシ

露ツキ
波ナミ
袖スエビ
思オモヒ

詞コト
心ココロ
泪ナミダ

須須之呂

若菜駟

礮菜摘

朝菜々摘

惠具若立

蕙菜摘

小松引

子日遊

卯杖 御杖 卯杖

初卯杖

白馬節會

人目

菜摘

霧

結蝶堂柳

胸

心

海

色

立人

稻妻

律調

一葉 散 船

桐 落葉

柳散

衣 落

名木散

黃柳

揪 散

濱

柞 散

原

檀

女郎花

牽牛花

御齊會

踏歌 頭棒綿

御薪

賭弓

梅枝歌 青柳歌 大芥歌

落梅曲

霞 解 | 残 | 間 | 際 | 名 | 残

滴 | 消 | 消

冪 | 消 | 消 | 消 | 消 | 消

沫 | 消 | 消 | 消 | 消

消 | 消 | 消 | 消 | 消

毛 | 消 | 消 | 消

絶 | 流

霞 | 結 | 勢 | 橋 | 海

網 | 袖 | 衣

淚 | 霞 | 眉

水 | 尾 | 帶

長閑 麗

水 暖 | 清 | 水 | 暖 | 掬 | 清 | 水 | 暖

空 暖 | 風 暖

日 影 暖

温

河 廻

佐保 姬

春 宮

露 草 | 月 草 | 鷄 冠 草 | 花

男 郎 花

桔 梗

萩 | 濱 | 伊 勢 | 濱

芭 蕉 | 結 霜

水 懸 草

早 田 | 室 早 速 稻

鳩 吹

鳥 屋 出 鷹 鳥

初 鳥 狩 | 初 鷹 鳥

蝸 | 結 蟬

虫

松 虫 | 声 羨 良

鈴 虫

霞洞 カミノホラ

三冬盡春來共 ツキハルハクニトモ

春加氣氏 ハケケ

春麻氣氏 ハハケ

春丸礼 ハハレ

梅 ウメ
雪 | 壺
曆 | 此花

柳 ヤナギ
雪 | 青柳
柳絮 | 糸 | 髮
柳絮 | 縮 | 髮

松花 マツハナ
十迴花 トウカイハナ

松緑立 マツキナ
松若緑 マツワカキナ
松初緑 マツハジメキナ

松若葉 マツワカバ
松緑含 マツキナカ
松若松 マツワカマツ
松緑添 マツキナソ

木目 キメ

萌木陰 モウキカゲ

初草 ハジメクサ
新草 ニホクサ

萩若葉 ハギワカバ

蚕 ハチ
綴蝨虫 ツヅリカスムシ

促織 ハダカ
備織虫 ホウオリムシ

蠻虫 マンムシ

藻住虫音鳴聲 モニスム

養虫音鳴声 ヨウムシ

温故日録卷第八

葉月

北野祭

司召 シカウ

放生會

名月 ナツキ
月 月日影 ツキ ツキカゲ
眉 眉書 メイ メイカキ

晨明 アサアカ
朝 | 日夕 アサ ヨ
弓 弦 | ユミ

月 雙岳 ツキ
桂 花 ケイカ
桂 花 ケイカ

兔 玉兔 ウサギ
鼠 星 | 夜 ネズミ

下崩 霜雪 |

蔓

薺 蒿 摘

颯鳥 枯野 霜 |

百千鳥 鳥 十声 百声

柳衣

温故日録卷第二

衣更着

釋奠

獻酢

春日祭 三笠山神祭

率川祭

園 并 韓柳祭

大原野祭

孟光

都 友 袖 |

初塩

擣衣 碓

駒牽 駒迎 切原駒

甲斐駒牽

武藏駒牽

信濃望月駒牽

武藏立野駒牽

上野駒牽

野分

龍田姬

秋宮

宇治花園

出塩

朋 主 鏡 |

初手

蠶

柳年祭

佛別

去佛
二月別

朧月夜

鐘
朧夜
結月

蜻火燎

遊絲

蘗

蘆角組
真蘆
萩蕩等

若草
若草
若草
若葉

若紫

蕨

燒野

莖黑薄
燒野薄

草花
草初花
花野
野

薄
柳生
尾花

萩
鹿鳴草
殿
戸

蘭

荻萱

葛
玉真
花
紫色深

紫花

紫苑
鬼志許草

穗蓼
蓼花
蓼紅
蓼錦

蔦

萱
萱之軒端
萱菅

草色付
叢色
色種

守田
田庵
刈田

案山子
驚鹿
僧都
引田

萩燒原 萩下萌

畑燒 燒山 燒原

畑打 耕畑

耕田 田打

苗代

水口祭

種蒔 種下

麻蒔

土筆

烏芋

水葱摘

椿花 椿咲散

紅梅 八重梅

待花 花火燈 花催

鳴子 稻莖

稻舟 稻葉雲 稻葉

稻莖 稻穂波

落穂 小田初穂

粟刈

藍花 山藍花

畑紅葉

梅黃葉

雁 初田面 金寒 今般

燕歸 燕巢去

稻負鳥 鶴鴿

鷄

鳴

初花 花 紬 解

初櫻 初花櫻 糸櫻

歸鴈 獨搖極 樺櫻 別

北行 雁名殘 一結霞

鷺 渡

鳥巢 鳥古巢 子規巢

鷓鴣 外 鷹巢

鳥轉

顏鳥 良吉鳥

雲雀

雄子 狩場 聲 音 鳴

聞居鳥 朝鷹 鳥 狩 朝 狩

狩場 朝歸 宿 狩

鈴籠 指

泊山

白尾鷹 繼尾鷹

佐保姬鷹鳥 小山鶴

鷓 早 糞

小鳥渡 朝鳥渡 色鳥 色鳥

鷺

小陵

鶉

鶉

斷木

小鷹 一 狩 鶉 狩

鷓 鷓と云句朝と云字入

兄鷓

鷓 鷹 結 小鳥

雀 鷓

雀 鷓

鹿 紅葉鳥 槐

蝶

蛙カエシ

櫻衣

温故日録卷第三

弥生

奉御燈ホウゴトウ北ホク本ホン

曲水宴カマクラウケ

流觴リウサウ會カイ

巴字水ハジメミヅ

巴ハジメ稜リョウ

須磨御稜スロミゴトウ

踏青

桃

南祭

素子スソコ新ニホ桑カ摘ツク

杜父魚トコノサ

澀鮎シビ

落鮎オチノサ崩梁クズリ

鱸釣ルウツリ

鱸

下鮎シビ下梁シビ

鶉衣ウツクサ

忍摺

温故日録卷第九

長月

御灯ミトウ

野宮別

網代打ミツノ

重陽宴

菊花宴キクウケ菊盃キクウ

煖酒ヌルサケ

菊キク一ヒト着キ綿ワタ

翁草

殘菊

萍始生

鎮花祭

小弓彎

遲日 永日

弥生山

夏近 夏と隣

待夏

春過而

春多るぬ 春よあつや

春ぞ隔る

花

波

波

雲

雲

雪吹

雪

袖

袖

漆

衣裳之色 木

血

血

瓶

瓶

心

心

詞 茂

詞 姿

例幣

住吉市

後名月

二夜月 後今夜月

桂川 御楔

撰虫

露霜

露時雨 露霜寒

霰雨冷

時雨 結露

霧 結霜

露寒

將寒 夜寒

漸寒 朝寒

鷄皮

冷

鴛鴨亦冷と云詞結

長夜

冬近

欵冬

藤 | 壺

莖菜

茅花

菴蘆子摘

若和布

粟蔴

上梁

若鮎 小鮎

櫻鯛

櫻貝

花貝

喚子鳥

鳥歸 鳥入雲

山吹衣

晚縮

糴

霜刈田

草駟

菌

紅葉

結時雨霜

色朽川

水 | 且散

色乍散

露乍散

乱而

葉雨止降

庵 | 舟

初 | 薄

色葉 | 遲

云葉色

落葉色 朽葉色

木葉色 木葉紅

木葉錦

時雨染木葉

木々色 色替梢

色取木々

草木黃落

名木紅葉

裏山吹衣

櫻重

櫻薄様

温故日録卷第四

卯月

更衣

白襲

青簾 青葉簾

給扇

大神祭 三輪神祭

稻荷祭

山科祭

平野祭

松尾祭

雞冠 楓青 雞頭樹

檀

色替奴松

柾

木葉且散 為且落葉

柏散 柏且散 柏落

木實

推柴

落栗 栗

榎實

梨子

榲實

柿

胡桃

梅宮祭

廣瀬祭

龍田祭

灌佛

佛生湯

鷹入鳥屋

鷹鳥屋トヤ鷹トヤ鳥屋トヤ鷹トヤ

替毛鷹

日吉祭

賀茂祭

御形ミナタマ諸シロ導タビ

葵桂

葵

二葉草フタバ諸葉草シロハ

吉田祭

筑摩祭

三枝祭

神祭

齋刺

霜踏鹿

殘鴈

千鳥結鴈

結露ツル

木枯渡鷹鳥

衣擣袖霜

衾露

一重綿

温故日録卷第十

神無月

應鐘オウゼツ

小春

十月更衣トウジツカ

始氷

射場始

柗取

和清

卯花朽

短夜 明易夜
明安月

五月待

麥秋 秋風

麥一笛

牡丹 名取草

千代見草

杜若

葵

蓼

菘

箒

殘菊宴

木枯 色

時雨 月時雨 川音

松風 木葉

志卷

霜 消 初消 月 富士

初雪 消 見參

浮月 寒 月寒

夜寒 寒夜 今朝寒

炭竈 炭賣

埋火 火桶

櫓

綿

被

卯花 澁疏

若楓 青楓

若葉 一ノ花 一ノ紅葉

嬾葉

茂合林下葉衰 野山茂木下綱 青木立

常盤木 落葉

郭公 一ニ結鶯花藤霞 四手田長

時鳥

蝙蝠

夕花衣

蟬羽衣

温故日録卷第五

五月

久太羅野

枯野

名草枯 枯生薄 且々枯葛葉

紅葉散 紅葉散而物

紅葉散初

紅葉流 紅葉庭

木葉 月一落 一舟

落葉 朽葉

名木枯 柳枯

凍柳

網代 氷魚

柴漬

温故日録卷第十一

霜月

狩使 豊御狩

獻_ニ菖蒲_ヲ
膏_ニ菖蒲_ヲ
膏_ニ蓬_ヲ

菖蒲_ノ枕_ノ
五月_{ツキ}玉_ヲ

藥_ノ玉_ヲ
五月_{ツキ}玉_ヲ

騎_キ射_セ

藥_ク日_ヒ

競_キ駢_ガ

粽_ノ

左_サ右_ウ近_ニ馬_バ場_バ騎_キ射_セ

左_サ近_ニ荒_{アラ}手_テ結_{ツカヒ}

右_ウ近_ニ荒_{アラ}手_テ結_{ツカヒ}

左_サ近_ニ真_{マコ}手_テ結_{ツカヒ}

右_ウ近_ニ真_{マコ}手_テ結_{ツカヒ}

五月_{ツキ}鏡_ヲ

櫻_{ウツクシ}佩_ヒ

賀_カ茂_シ競_キ馬_バ

五月_{ツキ}雨_{アメ}
梅_{ウメ}雨_{アメ}

鎮_チ魂_ン祭_ヒ

新_ニ掌_ノ會_ノ

豐_{トヨ}明_ノ節_ノ會_ノ

豐_{トヨ}御_ノ杖_ノ

小_コ忌_ノ衣_ヲ

大_{オホ}忌_ノ衣_ヲ

小_コ忌_ノ袖_ヲ

山_{ヤマ}藍_ノ袖_ヲ

山_{ヤマ}藍_ノ衣_ヲ

日_ヒ吉_ノ臨_リ時_ノ祭_ヒ

北_{キタ}祭_ヒ

日_ヒ蔭_ノ絲_ヲ
日_ヒ蔭_ノ髮_ヲ曼_ヲ

神_{カミ}樂_ノ

里_{サト}柳_ノ幣_ヲ庭_ニ燎_ヒ

篠_{ササ}

折_マ劍_ノ

諸_{シロ}奉_ノ

葛_カ

韓_{カン}神_ノ

宮_{ミヤ}人_ノ

木_キ綿_ノ志_ヲ天_ノ

難_{タガ}波_ノ泻_ヲ

前_{マエ}張_ノ

階_カ香_ノ取_ヲ

井_イ奈_ノ野_ノ

脇_{ワキ}母_ノ古_ノ

薦_セ枕_ノ

閑_{ヒラ}野_ノ

小_コ菅_ノ

磯_{イソ}等_ノ崎_ノ

篠_{ササ}波_ノ

殖_{シク}槻_ノ

總_{ソウ}角_ノ

花ハナ落ノ栗クリ

紫野ムラサキ今宮イマミヤ祭マツル

蟬セミ始ハジメ鳴ネ

水草スイソウ花ハナ

萍ヒラキ花ハナ

花ハナ薦カサ

薦カサ刈カ

藻モ花ハナ

艾ア藻ソ

和布ワフ刈カ

水ミヅ葱ネギ花ハナ

百合ユリ

紫陽ムラサキ草クサ

末スエ摘ツク花ハナ

古奈伎我花コナギカガハナ

四比良花ヨヒラハナ

紅末咲花ベニスエサキハナ

大官オホミヤ

得トク錢ゼニ子コ

明アカリ星ホシ

湯ユ立タテ

其ソノ駒ウマ

東遊トウユウ求モトメ子コ

雪ユキ花ハナ

藤フジ小コ雪ユキ風カゼ

氣キ標ヒラ

山ヤマ

月ツキ霜シロ

六ムツ花ハナ

霰シラカシ消ク

霰シラカシ消ク

水ミヅ碎クズレ

薄ウス月ツキ行ユキ

露ツキ冰ヒヤ

紐ヒモ鏡カガミ

湊田ミナタ

木綿ウタマ作ツク

畫エ目メ

朝アサ藏クラ

竈カマド殿ノ歌ウタ

沫ウメ

雪吹ユキフク

波ナミ

富士フジ

月ツキ

下シタ妻ツメ

林ハヤシ

殘ノコ氣キ

薄ウス秋アキ

泪ナミダ

袖スエビ

帶オビ

轄カサ

露ツキ

忘草花

早苗

田歌 田植
田草取引

若苗
初苗

若早苗

初凡

若竹

竹若葉
竹若緑

今年生竹

橘

橘結橘
常世花

施花

施染

荊棘花

標 雲見草
一ノ雲

青梅

臘梅

水雞

水鳥巢

橋

鳥

氷柱
氷

凍蝶

水鳥

浮寝鳥
浮鳥

千鳥

月鳴

鴛

沓

鴨

魂海

鷄村鳥

秋沙

鷗

都鳥

鷹

著

狩

場雉
偷起鳥

鳥落草

教草

草取鷹

網懸

場鳥
慕鳥立

鴨子カウノコ

鳥替カサレ毛ウ

羽脫ハネ鳥トリ

鶺鴒セウリ河カ夜ヨ川カハ

鮎アサギ魚イサ梁ハシ打ウチ

螢ホタル殘ノコ斗ツ

蚊カ殘ノコ斗ツ

鶺鴒セウリ繩イト魚イサ梁ハシ

蝻カヒコノムコ爾ニ

鹿子カ鹿子カ声コエ

獸狩ケモノ火串ヒナ刺サシ照ト射モテ

標衣ヒシ

温故日録卷第六

水無月

林鐘リンシウ

草取鳥

煖鳥ヌル

温故日録卷第十二

師趨

唱佛名

被綿ヒキ

追儼オイヤラフ

年終玉祭

爲因見スル

荷前カキ

内侍所御神樂

年內立春

年木キ樵ユ

衣配キヌ

曆末コヨミ

曆卷コヨミ返カス

氷室 氷水 氷膳物

醴酒

月次祭

祇園會

祇園臨時祭

暑日 石踏茂暑川原

夕立 夕立雲 結箱妻蠅

曆右卷

春と隣 春近

待春

守歳

年籠

年終 行年 年歸 流年 年滿

歳暮 三冬盡

連舟此四季の景物の在る流布す所哉
挙てこれとあるもの也但出所此詳あり
ざらぬれはさし事もすさうす加之年
中行事乃まうりとなふも其季と
幾事のとおほひ事とよみ詩は
よの連舟は作例乃なれ用捨はれ
事れ先達のりこれ事と見とて
明弁を待而已大らこれ事と見とて
かりなり今爰は書のするも只朝夕
あり出所の多し作例のこれと
を誰くも耳ふま記すも
今更なるやうな其大率
て後学は蒙愚の事とけとある
さうなり但古人の糟粕をのりて流布の

温文亭

外と餘所ヨリより乃ハ見ルと辱シめんハ何と多めり
 ぬけり一徒ハ心ハれおるも何と多めり
 後ハいふ系ノのより今時ハり連哥師ハこ
 きたれよあひと其奥儀ハととつるハ新式ハか
 こと事ハハまらくありて一筋ハあらずと見ルて
 ととて春とりのつるの成一方ハは秋おどひく混
 乱也ハさまは流布ハ此外ノの四時ハ成ハつて定めぬ
 幾筑波山ハと吹キこす風ハれよすがふたてう
 きささるころりしてぞり爰ハ宗因法師ハ云ハあ
 る只昌程ハれ説ハと可シ守其家ハたれば不可シ也
 云ハ是先師ハ昌琢ハととつるも殊勝ハれをハ一也
 因ハ少ハ愚案ハウハくPハ取ハ皆程ハ相ハもつて定ハ也
 此趣也ハひとり爰ハ程ハれ説ハりて程ハ小
 ころりなる西ハととつるはゆふとす外ハはれ流布ハ乃

盤觴也ハこれ小延寶四年六月十八日ハかんじ抄
 ととつる一とつるぬれげととせありハ大ハとと風
 よゆれぬに補ハぎぬととつる此ハとつるれとと
 く成ハひふえはハとつる人ハととつる也
 仍故ハと温ハて目ハはとつる録ハ心ハとと温故ハ
 時録ハと名ハげととつる普通ハよとつるぬととつる
 乃ハぞりすこれとつるいふもととつる鳥ハのあり
 をりれ水ハよととつる魚ハれはり成ハつて終ハかめ江ハの玉
 がととつるふつりも何ハふ坂ハ山ハれ石清水ハととつる
 つととつるひたれぬありととつるばととつる又ととつる
 ととつる也ハ席ハよととつるなととつる此ハ外ハれ事ハも
 いでまんよと其座ハの好士ハれ定ハめありてととつる
 何ととつるやれ事ハ時ハれ宗匠ハ貴人ハととつる
 異見ハよととつる事ハ下道ハのありととつる

正月ハツキ之日より三冬ハツキ迄ハツキの公事オホヤケカトとけり
かく萬ヨソ此神佛天象地儀人倫草木生類
器等よりハツキまで其季ハツキ迄ハツキもこれ其外ハツキ
もあれハツキるものと十二月ハツキよりハツキして四季ハツキはハツキ
らるハツキ氣運ハツキとのべて心法ハツキなりハツキとハツキとハツキ
とハツキ中作者ハツキよりハツキ多ハツキ百韻ハツキは可ハツキ得ハツキ事ハツキもハツキ
一ハツキく千句ハツキをハツキとハツキハハツキ張ハツキとハツキハハツキ

温故日録卷第一

睦月



三始

歲始

日始

月始

正月ハツキ為ハツキ端月ハツキ其ハツキ下日ハツキ為ハツキ

上日ハツキ亦ハツキ云ハツキ三元ハツキ歲ハツキ之元ハツキ時ハツキ之元ハツキ月ハツキ之元ハツキ玉燭寶典

鮑宣ハツキ傳ハツキ云ハツキ三始ハツキ如淳ハツキ注ハツキ正月ハツキ下日ハツキ為ハツキ歲ハツキ之朝ハツキ月

之朝ハツキ日ハツキ之朝ハツキ少ハツキ人ハツキは三朝ハツキこハツキもハツキふハツキなりハツキ支ハツキ本ハツキ立

春ハツキ顯朝ハツキ卿ハツキ哥ハツキ云ハツキ

あハツキくハツキ玉ハツキ代ハツキ年ハツキもハツキ存ハツキりハツキもハツキ約ハツキらハツキるハツキ代ハツキもハツキ長ハツキまハツキハハツキ来ハツキよハツキきハツキり

改年

荒玉ハツキ月ハツキさハツキすハツキくハツキは三ハツキ年ハツキあハツキらハツキたハツキまハツキらハツキ約ハツキかハツキとハツキ
てもハツキ春ハツキ也ハツキ又ハツキ荒玉ハツキ此ハツキ月ハツキなハツキもハツキもハツキ萬葉ハツキなハツキをハツキ

あハツキまハツキくハツキこハツキらハツキりハツキ流布ハツキ年ハツキはハツキあハツキらハツキたハツキじハツキとハツキ云ハツキ字ハツキ也ハツキハハツキ三ハツキれ
當年ハツキ代ハツキ事ハツキよハツキなハツキらハツキりハツキてハツキ春ハツキ也ハツキ但ハツキ句ハツキ祈ハツキよハツキらハツキるハツキ

新年 年立 明年 迎年 古年 去辛

去辛コノトシニシテトシノミヤドモ
春也今年コノトシニシテハ雑也

唱星

朔日 四方拜此奉也 四方拜と云ふ事ハ元正の
寅の時ニシテ身属星と唱へ天地四方山陵
を拜しつゝ年災を拂ひ寶祚を祈り
涼殿東階ノ外ニ砌ノ外
ニ御屏風を置て其中ニ御座三所
置け其前ニ本此机を置て香花灯籠を
そまじりて清浄儀式ありじり殿上ノ
侍臣なども四方拜と志すや
御用大臣家なども外ハさる事も
始まるに仁和五年正月寅ノ刻ニ

天地四方属星山陵を拜しつゝ由宇多此御門の
御記のせりきこれ盤觴にけんとき皇
極天皇雨を祈りて南鄙北河上より奉きて
四方域を雨五日まてやりける一日
本紀小のせりきこれハ是なりや
其と属星儀一災難をりて趣天地瑞祥志と
し書ふに公事根源 雨雪之時於弓場殿
有此事猶江次第ニ委ニ条大岡御所此年中約
事哥合小云

すこれ星と云ふは此とよひのけき善ハさるり
と詠すは當年此命星と先七層ん
こまの事やとやおほい

屠菰 白散 藥子 是ハ元正此儀なり清殿を
とこなる主上晝御座よ出清なりて

方此清衣と云れつ孫の清を仰れと云かきひ免さふ
陪膳此典侍典藥頭も生氣の方此色と著す
此時先御厨子所此御齒固と供寸命婦茲人
使送して典侍次第は表ぬまのりもてく茶子とも
姉妹此いまさ嫁せさゆとともて是城用事事と
屠獲ハ女見よりの心と云本支のまは其為ハ女
女城撰てまののまじひるなと云け藥子鬼此間
くらすこてはけの几帳此と云んさぬふ女官
典藥頭りて清藥をりぬと一献し先屠獲
を酒小入く茶子よれまじ次は銀器よ入る藥
の頭よりてといひん不はま主上座と云せ給て
夜御殿此南の戸より入給く清ゆありあり東
乃かこれ戸よひくひくゆせ給ハ陪膳御蓋持て
まのりす是も屠獲を東北戸よ向てのじ由本文

まをりや次ハ女官小返りまハ是城後取より
きこくや一日ハ四位二日ハ五位三日ハ六位此藏人なり
清もこりれ日奉行此茲人交名をまのりゆに
まのりて殿とれすもれ柱よをすくさく二献よわ
神明白散を供とじりハさくれ城後取の人はゆふ
本も大根と云ふ女茲人ゆりて扇ふすく是
と云元日ハ人々精進のゆかりと江次第よんはり
三献ハ度瘴散城供も如此御藥此儀ハ三ヶ日
あり第三日ハ清まやくと云なる銀器よ入る
空名指小付て御額并清耳れうんはきくる
右此第四の指をわめてはくは是ハ藥師此
相しくゆりや此茶此儀式ハ五十二代嵯峨天皇
弘仁年中はけり一人是とのまぬまハ一家ハ
病なり一か小毛とのまぬまハ一里ハ病なりといふ目

かたは切能のりきけ年れはうの是とまらや
異朝来由城さけの紫花託云屠獲酒昔人居草
菴除夕遺里人薬令囊浸井中元日取水置
酒樽名屠獲飲之不瘦云年中約事哥合
年とにさふめ初る素子わえけえんきとらためとら

齒餅鏡

源氏初音れ巻よとごらめーてとらめ

齒固元三の日の事也齒ハよもひと一母を齒をかくじ
れ心也高器六本小折敷をす一其臺餅大根橘
を盛也此餅ハ近江れ火きりれ餅を常用たり是
より躰よの周れ鏡山の哥を詠る也花鳥餘情をく
小んくくく

あまのやがれ心とそとれハお孫てとらんゆらるふとをけ
此哥城よりしてかきふじり之河海抄ニ委略之此哥ハ

古今集よこれハ今とれ抄への河をれ哥云高器
と云とのハ丸き板れ上小鼓の胴乃くくわう柱と一尺
余よまん中よたてとけ丸き盆也盆れわたりて人程
也たてハ如此也火切と云在所ハ野洲れ下下益
也云里の内也今ハ延く田の名とぬくり又伊勢物
諸よとら成くつとらとらとら高杯真名本愚
見抄云高土器と書也土ふくはくまきり推清抄ニ云
ひりハ土りてはくふや今れをけ本りてはく鼓
此調のかりやうある物也今業云異朝れ祭する神
供との千とらものと遺豆とらふその豆とら物ガ日本の
高杯也抄へとけ御贄云後也めらりてとらとら
源よとらとらとら源氏ハおらんへもとら
堀川次郎百首ニ俊頼元日此哥云
そやうらわら成りらわれまうとらとらとらとらとら

夫木第卅二源中正元日の哥は

ふ代もそも教をぬきてあひいふふかたのらるる

氷様

朔日

氷様ハ宮内者よりなる去年氷様おさめり

公事根源云々

可く此様を今日節會に於てはあつては奏聞する厚

さ落さうられ寸法はゆるぎなく一節に奏し

其たゆみとしてを以て石ころれを延喜式

乃驗氷のあねハ凶年としてゆるぎハ氷此御祈と

大法秘法とゆりまじりや今日もゆるぎ氷てめてた

きりハ此あつてをもちたゆみとけすんごうあつてハ

乃ふんさいとしてゆるぎ氷池ハ氷をこめりん池

年中行事哥合の哥と事れとゆるぎ氷室此所よの記

腹赤贅

同日

腹赤ハ贅とて魚と筑紫よりあつて

昔ハ臆て席會とては信しきりハ腹赤

ハ食様とてはゆるぎとゆるぎ取渡してはゆるぎ

乃國字ハ郡長濱とて海人は是とゆるぎある其

後聖武天皇ハ御時天平十五年正月十四日大宰

府よりもと奉りゆるぎとて年毎ハ節會ハ

供つりり一安置ゆるぎ元日おさめりめられとて

と遅参なりとい七日とし奉りとて腹赤ハ

國栖奏

同日

國栖笛ハ國栖哥笛ハ奏すハ是

吉野ハ吉野乃言ハ行幸とて時國栖人參て一

夜酒とてゆるぎとてゆるぎけり人山のこ

と取てらひ又此の公尊て右とい毛満ごうのきそ
 味もそそらひきくこくや吉野れ川とよわそ嶺をい
 しく谷ゆりりきり所を是れ路れさうくゆり瓜
 の常小来朝らる事不叶とゆんやもる其後ハ老よ
 参て年魚つり乃地と獻きるとく今此國柄の養
 こそ哥代諺の笛とゆれりい吉野より年始よ
 参らるといふ之右のい此とも公事根原よえ日
 會れ所おろるは之取要記之其上つとれ節會ハ
 是は此とおろるゆりゆり抑此節會ハ天子紫宸
 殿小渡御ありて群臣百官酒とゆり宴會とゆり
 持統天皇四年正月よ公々と内宴よりしてとれ河
 つりすことわり宴會と書くいとゆれわくことわり
 大それるこれ名とゆり豊明節會ハかき
 一ハ神武天皇ハ御宇よと群臣はははとて酒行

初鳥
 元日ハ曉ハ鶏のこり
 音也 流布 夜分也

筆試

曆開

門松

門每立小松ともいふ 素盞鳥尊ハ南海へかよひゆり
 一時宿を巨且將來よかりゆひききともいふ
 ず蘇民將來をさけり奉る其後尊いりて
 巨且をさけり其家をあらがくる是を後の世よ

のちるしとらんとき巨且が墓のよま生たる松紙
年れ始よ門はまると此事情明が簾簾内傳小
あり委祇園會れ所可記是門松の縁也志
ハあれども一条冬良公此御説は松ハ千年をら
きり竹ハ万代成ちる物を従て年始れ祝事
よこまをそそゆるゆるし
畧記之は説を仰きゆると云次

年越而

若水

立春日隨季 拾芥抄 包井開 若水と云
事ハ去年御生氣此方井を點して云と
て人よくせむして春立日主水司内裏奉ま
朝餉して是成さしうすあま此春立日は成
奉まは若水と云や年中此邪氣成りくと

よ本文あまは孫文是を供す江帥匡房卿
次第よ若水成の時呪をとなす事あるとみ
えこり公事根源 是を供すと井ひくともあり
是立春日事也連哥よ元日といつる人あまも
之袖中抄よ云

うらなひききふら春れうまはあま井よひすひ
ワもそは立春の日ゆりけこのお母やきたなる水と
いふ也素肉志ぬ人元日よそまつるようやひ事
賀茂れ御しるるとそ朔日小なるともりあも中
あまを祝ハ立雲小なすともくくは事なり
堀河院の御時立春日朝は御前して今日此心
とよめと宜青ありきまは後頼朝臣の
十載第十六
老いといふ河をわ水よむすやら此初を
以上是頭昭れ説もわくのよあり又寶治二年百

首身... 時年内立春といふ事と爲

家ハある事

此年の内よとあるは... 立春の日は水... 立春は年々春と云ふは... 立春の日は...

初夢

立春の朝乃ゆめ之西行家集... 立春の朝と云ふは...

凍解

氷の融け

氷流

只流は氷をびすひくことなり... 立春の朝と云ふは...

氷消 氷隙

東風

月令ニ立春ニ東風解凍とあれハ立春此所ニ記之... 月令ニ立春ニ東風解凍とあれハ立春此所ニ記之

若菜

七種 内藏寮并ハ内膳司より正月上の子日は... 七種 内藏寮并ハ内膳司より正月上の子日は

寛平年中より始まる事... 延喜... 天曆四年二月廿九日女御安子乃御長若菜を供す又... 天曆四年二月廿九日女御安子乃御長若菜を供す又

若菜 菘 蕪 薺

芥 蕨 薺 葱 蓬 水蓼 水雲 松と云

之より此松の字此事白川院御時師遠ニ清尋あり... 上皇被御依成尋常ハ若菜ハ七種の物なり... 菘 蕪 薺 芥 薺

御形 須須之呂 佛座なり也 正月七日小七
 種此菜蓋菜と食され其入萬病なり又邪氣
 城のそ術よゆるといふことあり
 十二種 若菜ハ 若菜 菌 菘 蕨 薺 葵
 蓬 水蓼 水雲 菘 芥 あり七種ハ前
 と同ひ菁ハかふかと拾芥抄より又菁とよみ
 一や是今爰小書ハ皆連哥より打まゝとて春小
 版子色ありん註よ記之ラ事也其外を書付て
 ことう記のありともぬ其季は抄の四季よりたれ
 一他准之若菜ありん註よ記之ラ事也其外を書付て
 ても摘正月上子日又正月七具とれハ雲 正月七日
 爰白せんよわらふとす一或もや哥ありんハ七日
 此後小もおほくよりの連哥なりと平白よハ七日此事
 よそく想も又ありん 新式抄 或抄小

古今草下
 此の類の哥云但此哥ハ引哥よかなん然け
 年ハ注云わらふとす一或もや哥ありんハ七日
 そことなりたをよみ今とまゝとらりふ花またる
 一也心ハ光陰れを記しとてハ也
 若菜 馳 若菜 馳 藻塩草 菜摘 鳥春 新式 菜
 ひる事也 藻塩草 朝菜々摘
 磯菜摘 磯菜とらりハ雜之 海草と云つハ春之 朝菜々摘
 惠具若立 惠菜摘 考ふら山田代ハ惠具比し
 ちくそは 女茶こすてとてしりくこと同音なり
 花すりよさく草此水辺よあり或ハちくそハ芥と
 云と云儀ありと六指ハハ芥此ちり小別よちく城を

たり但ゆゑをさ文をさうりあきうりして物れ異名
ともあはさす名れうりてきは別ふつぎる事しあ
まを一定はあはれ後頼朝臣ハワレを仲實朝臣
とていひたる事としてよめる年

とていひたる事としてよめる年

今云此哥ハとていひたる事としてよめる年

月抱とあしつる童蒙抄云とていひたる事としてよめる年

とていひたる事としてよめる年

袖中抄 畧記之

新撰六帖其外代とて集よとていひたる事としてよめる年

初子日 小松引 子日松

子日遊

是ハ万葉集ハ家持御代哥ナク小ヤ此玉葉集ニハ書
ふ草よとていひたる小松を引く事としてよめる年

田舎代家は正月の初子の日こがひとていひたる事としてよめる年

事と袖中抄ハ委とていひたる公事根源ニ云ひ

人ノ遊ハとていひたる子日とていひたる事としてよめる年

圓融院三条院ナリノ御時は此遊とていひたる事としてよめる年

中よとていひたる圓融院の子日とていひたる事としてよめる年

月十三日此事也路代移ハ御車ニとていひたる事としてよめる年

く成て上皇ハ御馬ヨめされたり左右大臣以下皆直
衣して殿上人ハ布衣也握れ屋をまろけ慢とていひたる事としてよめる年

りつ小庭とていひたる事としてよめる年

其時代序者ハ平兼盛とていひたる清原元輔曾祿好忠
ナとていひたる哥人とていひたる事としてよめる年

時は献ずるに六足くくり精魅をさひ邪氣をとらふ事
もおちく次作物所細流云金銀細工の羽をさく

白馬節會

七日 此節會は幸ハ大方ハ元日たり
おちく一え目ハ水代様なるかの賀賀涉曆をこ

あふふりてそくそく諸司は葵こひたりきふは
兵部省より奉る御弓葵ともひ城内并も葵聞
すくもる御弓日はあふふも諸司葵と云一
卯杖は葵みきたりてそくそく御弓葵
候哉と御寸天竺代則多羅葉ハ其長七尺五寸
かりりれはけも七尺五寸なるをは是城く一六
りや白馬の節會をあふふいと青馬濃節會
ともりや其れハ馬ハ陽歎也青ハ春代色也是
より正月七日は青馬をまねハ年中ハ邪氣をの
くくこひ本支代也仁明の御門兼和元年正月は

豊樂院小おちく一とて青馬を見給同六年正
月ハ此紫震殿して涉染せりれこれハ此馬の事礼
記ハ春を東郊ハじく青馬七疋を用ふるあり
七ハ小陽の数正月ハ小陽ハ月也又十節記ハ白馬
を馬代性の本元天ハ白龍有地ハ白馬有又天の
彫ハ形也地ハ彫ハ馬也人の彫ハ亀也こり本
文もゆりや今ハ節會ハ三七廿一疋をひく
是ハ三ハ三亥ハかごとり 七ハ七日ハあつるより寛
平の御記ハのせりれなり 今日ハ毛代きの葵小も
皆あし毛ともりりは是白馬城をともりり儀式
かしくハ大いこえ日ハおちく一其といはれり事なりハ記
すも不球やうなりは書のでん天武天皇十年正月
七日ハ御門小女殿はたりりて宴會の儀を
是ヤ七日ハ節會ハ始るころん 公事根源

の如く... 先達は不習して... 行天皇代御宇武内宿禰と棟梁の臣はなるる是官職の... 官と被定... 武天皇大寶... 律令に定官位位階... 令外此官... 以前... 定て故あり... 諸司を肯と被任是は井中... 公事根源... 除目といはれ... 新昇進

踏歌

十四日、夜也 頭押綿 踏歌といふは正月十四日此男踏歌の事... 女踏歌也... 武天皇三年正月は大極殿... 皇代御時ハ漢人踏歌と云... 唐人踏哥

聖武天皇天平比ハ踏哥ノ儀モテ禄哉
給ニ仁義礼智信ハ五文字ヲ短尺母書ニ是

と云ハスルハ仁ノ字ハスルハ
礼ノ字ハ綿と云フ義ノ字ハ取當
布ヲ紡ハ綿と云フ智ノ字ハ布
ヲ紡ハ綿と云フ又おろハ沖時踏歌

ノ事ハ六位以下ノ人ハ琴ヲ引
續日本紀
延曆十四年ノ正月ハ詩法作
リテ今

更記ハ不及踏哥節會ハ常ノ事
ナレハ今
更記ハ不及踏哥節會ハ常ノ事
ナレハ今

ハ男踏哥ハ事ナレハ今ハ代
ハ男踏哥ハ事ナレハ今ハ代

河海抄ニ云踏哥ハ人以綿造花
冠額也号
高巾子云云孟津抄云綿を
西宮装束抄云高巾子之六位
以綿裏面云

云年中ハ事ナレハ今
云年中ハ事ナレハ今

十六日ハ女踏哥ト云ハ
十六日ハ女踏哥ト云ハ

ハ十四日ハあり殿地下ノ四位
巳下ノ輩
ハ十四日ハあり殿地下ノ四位
巳下ノ輩

正月十四日五日ハ京中ハ遊士
存ハ遊士存ハ遊士

催寸事ナレハ此等ハ餘風也
六十四代圓融院ノ
天元六年正月男踏哥あり
後ハ記録ナレハ

不見なり一其儀式ハ西宮抄ニ入レテ
万水一露ハ拍子ト云レテ哥ト云レテハ故ニ踏哥ト云ト云レテ

御薪

十五日 是ハ百官悉ク薪を奉テ宮内省ヨリ
御薪ト云レテ其数多ク延喜式ニ入レテ
公事根源

年中行事哥合注ニ云タトハ是レタノカコト
天武天皇白鳳二年正月十五日
百寮諸人薪を奉ル事あり是ヤ
百寮レノ儀ニ由ルニタレキコト
夫木卯杖哥云為家
ケル本ハ卯杖ト云キ不
春ノコト

賭弓

十八日 是ハ天子弓場殿
ニシテ弓を射
事ハ礼記ニ
仲春ノ弓を射
事ハ礼記ニ

衛四府レ舍人ニ
射レテ左右ノ大將
射手

勝ノ方ハ舞樂ヲ奏スル
近衛ノ官領トシテ

後大將射手トシテ
大將ハ左右ノ大將

内ニ事トシテ度
此賭弓トシテ修時
殿上ノ侍臣トモレ

觀二年正月十八日
河海抄
猶江次第ニ委

梅枝歌

梅ガ花ハ催馬樂ト
青柳歌 大芥歌

樂レハ
催馬

落梅曲

落梅ノ花ハ
梅ノ花ハ

丈木ニ大宰大貳高遠御哥也源氏梅枝ノ

心ありて風はとくく花の本とありぬもそきふよとさ
是と落梅の曲此心也抄

雪解 一 間 一 隙 残 一 一 名跡 一 滴

雪は残雪春也雪乃名跡言此冬なきも春
くもきより一閑傳一伝りあつあきとも近來人よび
く約きれば春あらずといり不審すこ一難決さるぬ

無言抄 雪は名残言此滴冬乃より一云人あきとも
より一雪の名跡と云も残雪の類也滴と云も雪

きれば氷と同し春也冬も雪は冬ハありこ一とと
大はまゆとて消ぬぬのぬ定つとこれハ滴も皆春也

そのぬハ雪のひすも言此消る事も冬は
消 雪き
おき皆春と定つと一疑とあつとらん

富士一消 沫一消 春也
きぬぬとふ故を利

消水 消滴 消烟 大宰大貳 高遠御家

集ノ朝日さる雪 一 毛消 無介 絶
ぞれけつちあはれり

流 各春 也

霞 三 解 一 霧 晨ハ霧をじとひても春也如此の類ニ
色乃ららまはれよれこよひきて其季よなる事 物

春も立也和漢とりふまよもつひなりり一竹り絶ん
かよとの方つよれよりて春よるる也他准之 無言抄

此文章の内かすみハ秋ハくすといへる所むり信用

ちびり秋よとよめり万葉第一目

秋の田代あめりまきりあふれすも流れはたにわるをまん
とつり夏もいつも同志つるぬる物よむし一に後成
いり七夕よも霞ふりよめり八雲御抄よかんり
其哥万葉才八よめり只霞よ勢をむすひくハ霞
のるはよあよよりて春也とむらりけり海り

かすひらと云詞 非霞字但詞乃けきやうふてり嫌
後物秋霞乃心よ可用者春の季

とつり春也 新式 かすひらと云詞春よたうすや
いとて宵柏の句よいづく物ひすひんるとまはれか

きはかやれ詞ハ女めひりらハたれ季よある也他准之
流布 びいこの物ひかすひんとあるハ幾重とふりて

一しとて春よ用らまき一是新式ハ文言よよく相か
なりゆりかやうあてて文をかきりすめ物をひひすひら

とて採れ字たれハ抄ひひさよもさるハす春よもあは
と知一と云言抄ハ文なりと書かすひらも春ことある

とて家ハ新式の昔よたふ秋但當時用る所 毒ハ
抄のこくとくんとくり新式抄物ハ春の季ハ時ハ

よ折越嫌也春の季よあはれとも霞の字ハ二句可
嫌也云又同抄ハ何とあひりらハす一てもかむひら

ハ春也とあり當流かくれとくともハとむげあわらめ
なる注こもあり時ハ宗匠よまらうす一

よ千るよむしひ 網 非水邊 新式 かすひら
ても春たかり あまよ似るこ云事也

し海 非水邊 同 一し色 一し衣 衣字可隔七
後物ハ 句但不可レ為

衣類 一し袖 涙 のかすひらも春也
新式 そひきもれ也流布 一し眉

水尾

これくすむわさるを水尾にて
海またととるを雲かたもよあり

一帯

ま木ニ侍従

春これ林葉のころに霞こぼり帯をばはるはるを侍従の中へ

長閑

三月

麗

是ものころの事長閑は折檻なり
和日ともすうらりれとむなむ詞

のこしてすうらりすうらり流布

水暖

清水暖 びすよ清水のゆるむなとも春をり云々
乃夏すすーかり清水のい春ゆるむと云事也

貫之袖ひらてびとひられとよめる身心して云々
空ゆるむ風暖かとも春也 惠慶法師家集

あきらすると謝乃海人誇ら浦尾ゆるむかすたをい
新千載よなゆて入らま木ニ南枝暖侍鸞と云と

源大宰大貳 高遠郷より

凡ゆるむ木のころに花咲ぬまはいつら宿れと云はれ
新撰六帖は日くけをゆるむと云もよあり

温

三月よととるあきらむも春也 新式は日れあきらむ
ハ可為春云云 只あきらむと云と云はる春と云説あり

只あきらむも春也

流布

新式は日れあきらむと云と云はる春と云説あり

春と定めゆる物也 志ゆる日となくとも空風水野山
なとれあきらむゆるむはまもゆるむ一人の寝ひりるを

この温ハ雜なる事 顯然也 但當流用所ハ
袖口もとれあきらむと云事も只在るのあきらむ

ゆるむ時分の心城さしていつと春よなる也と云り
是新式講尺の時兼お趣也たとと

あきらむけふもえゆる袖口あり

云向と當時ハ春も用なり

梅

但八雲は夏と冬とのせりもこれいふものも思管見
 ひろく重てしめぬ一朝さきも哥はあらぶわす
 と或書よはし是萬葉第三長哥又同第十五は長哥
 ハ久木よりさきものわれハ勿論初春也されども深山
 とよハ二月までしめぬやうはするも此ハ大發句帳
 宗祇の夜ハ春をうけは冬の梅さく深山ハ那
 深山ハ寒故ハ冬木ハ様よとびく嘆たり梅ハ雪成
 じすい 壺 華 舎と云涉教乃名たり梅成ハ
 壺 されはるふよりて名とん禁秘抄ニ云ク
 梅壺梅ハ西ハ白梅東ハ紅之由有清少納言カ記云云
 在飛香舎北 順和名 一説梅ハハ雜也といふハ非也
 春也藤はハ此所ハ委可記之
 或書梅衆木前花發故号ハ花云云
 梅と諸木ハ先よとつて梅曆といふなり

春

山家曆と有大發句帳 春まきてしゆくハ梅の曆ハ
 此花 といふハ木乃花と云説も異説也為家ハ明擬按
 もハ説もいへり 宗祇古今抄

柳

ハ雪成しすいハ春也
 未のまきまきもするもの
 うさ小あ柳ハ枝のいゆれり
 ハ似ハ八雲 稲庭の前ハ委可記
 揚花 も亦同訓柳の 眉ハ人の目ハ似り
 一ハ系 系ハ
 一ハ髪 髪ハ

青柳

一ハ稲庭 是ハ
 水乃

松花

十迴花 初春ハ物也 流布
 松ハ千年ハ

松緑立

松緑ハ雜也緑立
 若緑ハ春也 新式
 松初緑
 松若葉 御

十一日、御連哥よ生とよやきれ多葉のなほし松 昌隆

若松 松緑各春 松緑添も春こいつり或書曰云 新式抄物廿二

若松とては春とあれと道理ありんかみりてふと云ハ只緑の色れしく成とふ也立といハ何れもさるら此れ生する事也各別の事也不可信用云云好所よ志こふ一書次但昌程ハ春也といつり

相月 けいこちんげふたりこりめたる雨をとり

萌木陰 三智抄ハ春此部ハ入源氏若菜とよ色くのいとど記する花の本もよりつねるしきつげ云 同抄云云えききれけり葉のこさきしるさゆ也孟津抄云萌木いまま後縁なる本陰ハ藻塩草云と云木のつげハあをこころと云 説志き一為頼家集

是ハ新樹の芽也木の下圃クキハ夏なるゆたなれハ春の詞かやくるよめる芽たこハおり一仍尋其義只も春云云

初草 新草 ところりもよめり春也 小わりの草とわりのり

萩若葉 宗碩、藻塩草云 是ハ取分正月也

下萌 植物ハ新越垣 新式 或説二月こいつり但月令草木萌動 雨水節ノ末也霜雪乃下りえも春

蔓 俗用、莖立、二字、蔓菁、苗也 順倭名 拾遺ハ物名よめり万葉丈本等ハ物若あそもよめり也

三してたし又鶯と百舌鳥といつて一の名なりともいふ也
 此書よりふ鶯ともいひまろくれもともいひくこと成ま
 らぬらあや鶯といひるる言ハなる一世名抄よこ
 つてるる言ともいふと鶯といつるはいさきこれ地惣
 してれ言とつといふことゆき 以上袖中 畧記定八雲
 御抄鶯乃部入注云是ハ鶯ハかきくは是春
 百千鳥之囀也但鶯は詠有例云或説はいつても
 百千鳥ハ百子の名也鶯といふのうらうらうといふ但
 鶯はひびくとすといふこと也 且言抄は百子多鶯は不苦
 といふも鶯こと涉抄ありけゆといふといふもいりらる
 ちをきらふといふ或説云百千鳥と黄鶯の異名と
 てちとかゆるといふ説ひく事也不可用但拾玉集やよ
 慈鎮乃哥ハ鶯の題として百子多とよめりとかく
 やり代ありといひの事ハ正説傳受せぬ人ハ云々

柳衣

名は或ハ梅或ハ柳の花款なりとあまハ其まきあき

よりて大い是はいさのそきゆるりれく四季とも
 小同他准之まふ事阿ハ阿れ好士は訊一
 又挑花葉葉は具色くまて委可見之

温故目錄卷第二

衣更着

釋奠上訂日

是八年小二月八月ふありと
 此丁の日必をこなるり日蝕國忌祈年の祭
 なるにあつても中丁あり大學寮にてをこるハ
 此孔子たるひは十哲此影をまつると少年納
 言かしくまゝりて廟拜よみ宴穩の座はく文章
 博士題をすす孝經禮記毛詩尚書論語周易
 左傳よりよめりてりらあるあつる自志やくらん此昨ま
 づとも差人まらして朝餉のみまよすむくく又一人沙
 手水の間のかられすのこしてあまはたふ抄のものと
 ふ差人らしてゆんやのほをれをさる昨日れん

の酢よりこりてをちりくひくなくさけりしして蓋の
 中より出たこの人てん文武天皇大寶元年よりける
 礼記の玉爵は菜を釋幣を奠て先師を礼す
 ことこのおみえんといふ也後漢明帝ハ孔子宅に
 幸して仲尼を祀りて七十二才子を祠と見えたり又
 先聖とし孔子をといひ先師といふ顔回をといひ一は
 周公成先聖といひ孔子を先師といひを唐太宗
 貞觀二年改て先聖先師といひ孔子顔回とせしめ
 たり又神護景雲二年孔宣父を改て文宣王とせ
 由弘仁格よりん今大學寮よおさめたる孔子十
 哲の影ハ異國より渡て我朝累代の物として傳へ
 らる一公事根源 猶延喜式江次第委訓より
 ときまらりたりしころや兩度あるれども正事
 春日祭此所より可記之年中行事哥合

獻酢

必釋奠乃次の日あり庚日は當り同春秋
 二季より也一釋奠延まハ獻酢も同中庚
 より少く酢を献すは昨日此釋奠乃供具成
 大學寮より内裏へ奉り也年中行事哥合秋哥
 まはりせ八月のしをとりて考ふるをふりりき
 といは神食にかきりやなると神供なり也

春日祭

上申日 二月二十一日より先未の日使
 近衛の中少將は心萬賀茂此祭の
 府官人摺袴着て舞人といはるひ毎名門の人
 多参りて事此由を奏し舞人といはるひ毎名門の人
 人といはるひ毎名門の人といはるひ毎名門の人
 じふ五人出車奉り上り并もねりて清和天
 皇貞觀元年十一月九日此祭ハより春日四所

童蒙より引哥西少に記之

率河祭

上酉日 此祭ハ春日祭のゆゑ日とこなり神祇
令よのち三枝祭に同しからくハ四月とて

藤氏南家の口傳ハ率川社ハ右大臣是公の建立
といふりくりハ又三枝祭の取よのちハ
十一月とあるなり
公事根源

園

并ニ韓神祭

上巳日 二社ハ宮内者より
延曆遷都の時造宮他所より

とてよりんをせしむる御門をまわりて
まうんや託宣を奉延喜式ハ園神一座韓神一
座とのせり祭礼ハ年々二月と十一月ともり
とて内侍より儀式をの委事ハ西宮北山江次第
や此書よれせり 公事根源 若有三世之時用中

世日組春日祭後世云云 見延喜御記

大原野祭

上卯日 是も十一月と年々二月とハ社
后宮のものせりんハ春日日本社

よて都より記ありしりもふされハ大原野行啓を
り近衛の使ハ春日祭小ねりく上内侍
をくひふ 公事根源 當日使立 拾芥抄

初午

初乃午の日 稻荷よまきつる事ハ顯仲朝臣初午
とて先記平 堀河後百首

稲荷のち此杖をさるのよてあまのく人のまんをり
新撰六帖 光俊朝臣

蠶

二月やふ初午れちしていかりの杖ハもろもろ
六百番哥合判よかひや下の義よはきてハ蠶
養此室をハ蠶室とてり是すなり 俊頼朝臣

此書てけり物よもむらき此事といつる所は春初子日
 玉ころもさとりて蠶室をかきつひ祝ひをひるこ
 つるおりのそ蠶養此法ハ正月初子日午祭せせ
 る女子をうひ姫と稱して蠶室をかきつひ祝ひを
 ひる也次ハ二月午の日しりて蠶此胤をかして
 暖日よあそりて三月午の日しりて来よけて四五
 月城まひりて時寸云云とる春のころの此きふのむらさ
 此事ハ吾名抄袖中抄ハ雲御抄ホは委す也ハ夏ハ
 祈年祭 四日 是ハ大神宮以下三千一百廿二座の神
 とまつてせこまふ其取たけつたるもるもる
 くよをめぐ幣をけりて諸國よも年ふひのま
 けりてゆふし周礼ハ祈年ハ豊年とともひるこ
 とてしり神祇官とてとなつる弁かひてしり諸國
 の物也

天武天皇四年二月はけりて此祭をたつて祈年
 の祭月次兩度新嘗祭をハ四ヶ此祭とて國の大事
 ことす也 公事根源 拾遺 愚草 貞外上

あま此年此のそとひり物此をひきり或二月のそ
 年中の事并合よ
 けりてふし此をたつて代を三をせりて神やん

佛別 去佛 二月別

三月はけりておりのそと云詞春よあま月夜
 といひてハ春とて 流布 霞ハ朧二勺嫌新式

鐘朧 朧夜をともま也但二つともよ

嫌詞に吾言抄より

蜻火燎 陽焔をよ青陽ハ氣の煙のやふふ見ゆと
 しかきりふのともゆる春日こよゆる是也

八雲御抄

遊絲ユイシ 春ありて夏ハゆいられざるもの也

林希逸リンキイ 莊子シヤウジ の義ガキニ云、野馬ノバ遊糸ユイシ也水氣也

杜子羨トシケン 所謂落花遊糸シヤクハユイシ 白日静シヤク云又莊子ニ云

其急似野馬之走シヤクニシ云言心ハ春ノ空ニ糸乃シヤクマ

たるとのりかやさけ心事野シヤクニ斯馬シヤク此走シヤクや

まゝハ遊絲ユイシと野馬ノバと云えひらふ陽燄ヤウエン之名シヤクけ

らり又春の日シヤクのうらうらシヤクを

蘂ヒタヒ

草木シヤクよりふいに算糸サンシ要シヤクニ
云斬キツク而復キツク生スル曰蘂ヒタヒ

蘆角組

草シヤク此シヤクのくじ皆春也シヤク芦シヤクよかきくん真蘆シヤク荻シヤク篠シヤク
為シヤクたるとはれくじとふ春也シヤク

詞花集

春風シヤクのうらうらシヤクをシヤクくシヤクとシヤクひシヤクわシヤクるシヤクはシヤクれシヤクはシヤクじシヤク荻シヤクのシヤクりシヤク未シヤクもシヤクあシヤクらシヤクはシヤク
なシヤクのシヤクくシヤクくシヤクひシヤクしシヤク十五番哥シヤク合シヤクよシヤク小竹シヤクはシヤク等シヤク

若草

草シヤク若シヤク緑シヤク 草シヤク若シヤク葉シヤク

木シヤクのシヤクくシヤク葉シヤクハ夏也シヤク葛シヤク乃シヤク
若葉シヤク菊シヤクれシヤクるシヤク葉シヤク秋シヤク乃シヤク

若葉シヤクたると秋夏シヤクの季シヤクとあり草シヤク

若草シヤク 萬葉

もつ葉シヤクとすれハ是れ春也シヤク 流布

後拾遺シヤク 如シヤクくシヤクもシヤクれシヤクもシヤクやシヤクよシヤクハシヤク月シヤクのシヤクころシヤクるシヤクまシヤクをシヤクまシヤクさシヤクうシヤクらシヤクれシヤクさシヤクらシヤクつシヤクまシヤク

さシヤクわシヤクくシヤクつシヤクまシヤクはシヤク草シヤクの名也シヤク今葉シヤクハ若草シヤクと可シヤク云シヤク欽

綺語抄シヤク云シヤクさシヤクわシヤクくシヤクつシヤクまシヤクとシヤクハシヤクわシヤクくシヤクあシヤクひシヤクるシヤク草シヤク此シヤク名也シヤク 袖中抄

芳草

新式シヤク若草シヤク此シヤク
事也シヤク 流布

若此糸

春也シヤクくシヤクくシヤクひシヤクくシヤクさシヤクらシヤクとシヤクらシヤクハ
雜也シヤク花シヤクとシヤクじシヤクとシヤクひシヤクくシヤクハ秋也シヤク

蕨

詩シヤク 蕨シヤク毛シヤク

焼野

莖黒薄

後拾遺
あはれをすくろれすはつたのりたをらからせぬといふ
すくろのすくろは春のやきぬすくろこれすくろのく
ろれとありと略してすくろとすくろ人云すくろハ
とくまれあはれくすくろすくろのすくろすくろや
てくろをれすくろすくろ

それらつたのくすくろ 袖中抄 採要

焼野薄

萩焼原

後撰
きよらハ萩のやきろかたはてはきよらとよき焼と
萩原とやきそれらけりきよらと云く萩の下崩も

畑焼

心を焼原を焼草とやく
あはれ焼つたもまきなり

畑打

耕畑

耕田

ハ正月赤より
三月まで也

田打

畑打可准之秋春
田の哥小あり

苗代

植物ニ可嫌打越
之非水邊新式

水口祭

田神よぬさ叩く
くすくろ事也

種蒔

植物よ打越嫌新式
いほれまの事あり

種下

堀川百首

穢れ男の苗代地をあせをば今とあそぶ小種あり
秋よりじられと種を思ひてまそこれわよ種はり
假令ハわき回わて乃種ありす
あはれ云わも春あり

麻蒔

土筆 丈夫^ニ為家

土筆は此の筆かとも見るはけしきも此の春にきく

烏芋

春也堀河百首よ

春也堀河百首よ

水葱摘

春也水葱が花ハ夏也
秋云説ハ非也 昌程説

椿花

只椿ハ雜也花はけしきハ春也 流布 假令花ハ字
なても咲教白椿かろてハ春也但白椿言抄嫌詞也

紅梅

嫌詞也

八重梅

丈夫よの字あり
てもよめるあり

遅梅

咲よよ色のは梅 初梅 宗砌 東坡

詩二月驚梅 晚幽香此 地無

待花

花茗

合はかめり 八雲 梅乃ちりり 藻塩

花催

花火燈 花灯

初花

花紐解

事ハ二月も三月

いもりい事也

初櫻

初花櫻

糸櫻

獨揺櫻

同上 丈夫ニ俊 頼哥よ

あじとえんちり梅枝おむし柳の糸いひすりふききり

樺櫻

古今物名よかりは梅とある是也 和名集よハ朱梅
とすりす紅花をす 細流 各かろくの梅

いりしやふききり

二月の部よ記之

歸鴈

乃れ名砂 別 北行 鴈よかろん城むしりも春也

鶯

一渡

一巢

春也吉日をとりて 巢とくふ物とあり

鳥巢

諸鳥の巢大なる春也
水鳥此巢ハ夏なり

鳥古巢

子規巢

式し三
月の部

よのする本あきこと
今こみ巢此次てよ記之

鷓鴣

萬葉よ當れこれ
なうんやうまこと

トヨリ下略、此をよもましく當の巢トリ時鳥の日お
成る事阿るといり父ハ郭公也母ハ當之父トリは
似て母よし

鷹巢

新式抄物なくは春とあり
雜といふ一説あり非也尋其

義、春也大發句帳春部、周桂句

け、鷹の巢山や、井庭の松諸鳥の巢これ春と
あきし是等あきくたる母とよとこの郭公ハ巢に

ても夏又鷹の巢ハ雜といふ説あるゆへに記也

鳥轉

諸鳥此轉皆春也三月より水鳥も之は
いり若年此時神田天神にて連哥此轉ハ

其座此人同水鳥此は春なりや予云源氏
権姫の池のちもごもれと申うらつものか
つるやあきくあきくここのは口果

顔鳥

春也かやよ鳥は春也 流布
音羽山なるは片戀するものといりよ

多しと云ふといり萬葉第十

容鳥此はく、數鳴春此野の草根の志を記悉しす

源氏物語よも是其鳥と定款但定家不知之

と云推之、只つらき多款但未決之 八雲抄抄

第三下河海抄花鳥餘情藻塩草を記し

此説ありといふハ雲抄抄よ云ふ花鳥より定家

卿不弁但其花鳥となくつらき花鳥也とか

行幸乃御侍の齋古山とわらひ初く氣色あり
きれハ源政頼上此尾ニきりて白き尾にて継ぎり其
心も憂ふものなるれとつ白尾と跡書とんくまきとま
ましく深之ゆふ心ありくくえんものくくも御門
涉不審乃時政頼哥

まがら半 白尾二月此尾とれ書はちう絲ふ心まきとるひてせゆを

とけりをらこけ心より白尾と表継也同百首此哥よ

物あをれうすもれくらのをを角りある尾は子八おけさより

け哥よけり或新式抄物よ春ハかきとれえうくあふ

ゆよなるれおれ二三お白きおけりけりもいり也とれ

猶鷹飼代口傳ハ跡書此心也と深塩草もいり

仇保姫鷹

松えや梅ふけきうくさ海非れより歌えてかてくく人
さ海ひウをるとハ春の齋代惣名也 定家 三百首

春の齋代注よりんくく

二三月よあらくと小山うりもいり也 同注

或ハさゆひウをるとハまのふをり

蝶

春さよりくれおのくくく秋おのちう中その物なると

八雲御抄梅ちりてあるとつと詩ハ下生不得近梅花

とつり但只梅の時分を之 深塩草

たつひまるとるおれおも白くくれ梅乃くく乃初様

壬二集中ニ家隆郷哥也拾遺愚草上ニ定家郷哥云

菊れてさいふ蝶れえぬれされちる花やあをれをりきり

初らうらうらつあめれくもくハ雲御抄よかてくくハかう

蛙

題るくの外ハさす但後撰哥よかてくくハかう

櫻衣

表白裏赤花 梅花御説 桃花葉葉衣色異説云

表白裏紫かてくく 三月と云云

温故日録卷第三

彌生

奉御燈北斗

三日

是ハ天子北斗ノ灯明とあり

峯小火とありて北辰ノ供也云々

御記云々

今ハ清灯此義ハ

五年ハ

延暦十

曲水宴

同日

流觴

巡水宴會

曲水宴乃

詩成作て講せられ

去也周代は周公昭云一人浴邑と一ウて曲水
宴と始りて一也後幾霜と一其後幾
れ一ウて經多ると云也年城ハ星霜といへ也

己月後 上巳 河海抄云漢代三月上巳日百官
東流水上禊飲自翹以後用三月三日不

用上巳鄭國俗桃花水
上以上巳後除不祥猶委

須磨御 稜 上巳日 是ハ光源氏須磨れ浦は左近
の時三月一日よ一てとくる己の日陰陽師

りてとくるとせの舟よとくる一或人ごことのせて
かろす事なく彼物くるとよとくる

踏青 唐は上巳の日曲江乃かるとりて都の人とくる一
酒たとのもつ青草とふを遊戯する事なり

歳時記圓機活法なとよとくる事文類聚よは

三月三日。上踏青鞋履よりあり又圓機活法の
一説はハ蜀人正月人今日キ女遊戯謂之ヲ踏青云

桃 二月末よりさくりのなれとも三月三日
と宗とすとも或ハ三月三日よかき次

南祭 中午ノ日 石清水臨時祭也まらつ二月比より
奉行ハ差人使舞人をりさると心申れ辰の日

試樂乃事とてハ試樂ハちハとともなれぬや
代のよりめはハ必あり一試樂も調樂もいつらまら

音樂とてのころろひんご當日ハ御櫻あり庭
座は使舞人けく大臣以下かさハ花使舞人

人乃冠よさハ三献とてハ五献とてくかさ孫がけを
の事とて天曆五年四月廿七日より一りてハ臨時ハ

祭ハありさこれとるも一年將門ウ乱逆ハ事を
一時新ヤこれとるハ幡大菩薩とてハかの門

う首とまきり給ひきるとぬん其報賽乃々り小臨時
の祭ともいふ其時の使ハ播磨守冠明の朝臣
兼人々々人々あつて十人云

初らるやうに其文の右清乃乃末と成くはらうん
是ハ其ゆりれ舞よなんゆりきるあつたに天禄二年
三月より毎年此事ハ成ゆり之次の日ハ還立の
儀を南祭ハ御前よゆきん弓場殿として勸盃を
くたしたまふ 公事 根源中畧 江次第六云有ニ

午時用下午ノ昔ハ南祭ハ還立なくて賀茂し
りよき一由雲圖抄よりを代とこまりし由茨
第ちにもえくころ 堀川次郎百首ニ石清水臨時
祭哥云俊頼

南祭とするハ常の事也 男山きふふくひれ祭して
いふえひすれぬ乃乃末と云ふはけけり

素子

三月午ノ月よりめて素よ
けり事ノ前よとつり

新桑摘

萍始生

月令ニ穀雨節ハ氣候
也本朝として春なり

鎮花祭

是大神狹井の二祭といふと神祇令よのせ
つてま花の死ふころを疫神分散して人を

かやまするれよかまはえづらん為ふけ祭ハまどかや神
祇官として行りる 公事 根源 新拾遺 第十六 南白前
左大臣哥云

小弓會

丈夫第世ニ慈鎮哥

秋の稲のおさゆきとせれはけりまのあまひのまり小弓

連日

とつふ事ハとそく暮る事也也
事れとそれハあらん 新式抄

永日

弥生山

名取よあらん 流布只
まのふとふ事也

夏近

夏を隣

待夏

春過而

春あぬ 春よありや 春を隣
四季よふおなり 其季よ一 流布

花

一 波一 瀧一 雲

上三ハ新式ヨ可分別一物れ可
おせらたよりりむつ一 春詞

いりよとち従ん何乃むつ一 新式
今更ハ異説と厚ありて 委細明一 記一 花れは

それと事なるをれハ不記之 其上季はとら物もその
事と第一とする物なるは去嫌乃事ハ注するに不

及四時他准之但事よよと委の千事もあり

一 雪 植物可嫌之 降物不
可嫌之 新式

一 雪 吹 全
一 衣

一 袖一 袂

花衣正花也植物よ打越嫌一 衣類
乃一 本也然と花の袖も 同前

一 流布 花

衣裳之色 花木

不可為植物但依
其色可有其季

新式 是ハ衣裳よ山吹色花染をくハ季はハ物
植物よあらんといふ儀之 無言抄云一 乃のふはと

とも草木よふその色それよ季とあゆは打紙
過一 山吹色花をわたりと新式

入給ふわく草本此下よの櫻と繪よ幸ハ春也紅紫
とわくハ秋も有り然と季は成りつゆえよの扱よ打張廻
と云説不謂把扱よあらずと奥山ニクサキのりききくらし首
尾相遠しして難決すてよを代の宗匠宗養句よ
折越よしりさふとをきて心吹色此衣を付く色はれ
ハくつるかつとくごんごん又新式よ忍摺植物ふ
何くすとあり是よてさるる色ハ然ハ新式の旨は
守へよその也を代折越廻こつふと新式の文意よた
ふ欲但時ハ宗匠よ志さるるふ一ハ際めして不可
論猶ふつひく當流よまろする事これよかきつべ

一四 正花也そのれ檜ハ常の事也式よ其
時節しく此花依もむろるも此有り流布

一籠 一芭檜はむ竹の花こそまろよめり僧ハ檜と入
とよこれも時しく此草木の花とつろこれよ勿論

正花也植物也花
又机の脚よ花よをたし紙あり
机流氏棟 鈴虫あり花よこすゆり机也

一机 又机の脚よ花よをたし紙あり
机勿論正
花也春

一席 花の座也又花のちり
春也
新式

一心 詞
難の部よ未女可記

一姿 植物也正花也但句押よよろ
姿此花も春とつり
顔同前

一面 同後撰よ花のありてハ
顔カサ

一眉 一友 一都
正花よなこれ
説あしを代

櫻

〜一〜それたてりて筆と〜し〜び〜ら〜も其ま
ち〜も〜師説と〜す〜れ〜れ
が〜開〜也又後生後此童蒙のたまけ〜又ハ花月巻
の詞の去廻よた〜も〜自余此事を〜す〜
可爲植物 新式 春也 催馬樂の〜
〜人 花人な〜云心こ〜やひ〜
人と藥〜詞也新式抄物〜
あ〜も〜人とも桜人〜
〜ひ物〜
〜と〜系
〜と〜
〜と〜
〜と〜
〜と〜
〜と〜

櫻回〜と〜のち〜と〜
是ハ宗碩の宗祇宗の同同〜
〜と〜一本ハ生生〜
〜と〜也回回〜七旬嫌櫻二本ハ新式抄

一戸

〜ハ桜ハ本〜
〜の戸の移移の戸の松松の戸の〜
〜の方の可可嫌嫌〜と〜植物居一所と小嫌也
〜抄抄也 每言抄
〜一 駈

〜と〜ハ桜とと〜
〜と〜ハ今今〜素性

〜哥哥此詞此上上〜小小僧正僧遍昭遍と〜
〜と〜ハ松ハ〜
〜抄略抄記記之之抄抄

正説正ある有〜唯唯桜桜〜
〜可可定定之之

〜抄抄猶猶袖袖中中抄抄季季
〜遅遅〜
〜春春也 流布流 晚晚櫻櫻〜
〜春春也 流布流 晚晚櫻櫻〜

梨花

木也 新式羊誤食之躑躅
而死故以名之 順倭名

馬醉木花 馬食此葉則醉故云馬醉木 堀河百首

後頼

しらけかけ玉回横断とふち約けししくけよあせと花と
なしくらももるんやりせと花との字なても新

撰六帖云光俊

柿とさすもこれのりせと花も心たけさききあり耶

本花

万葉集 園のすしれ花のまはまらるるこれのまのさくら 花 似由たり

杏花

今法

里人やまの紫花しんははりくも今ハ花のれまきり
信實

先後

孫やいぬとのまはさつり紫とのちて人ありとく
新撰六帖の哥也堀河次即百首後頼哥又能回

家集なるふしりる哥もく宗因

云云三月くらけ景物として可然と也

桐花

文集ニ云答桐花詩 此葉青々月令清明

節桐始華 云本朝ハ四月比咲くは

款冬

實方比物也後拾遺

七重八重花はさけしは心次のとれひしふなすそかめ
あんりきり白もあかしのゆもをれかきけいかり

藤

草也新式惣別

かつら草は用也

壺

飛香舎在弘徽殿北
倭名 云言抄云藤壺

(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)

温故日録卷第四

卯月

更衣

朔日 きよハ衣ガシメ 乃宮中祈_ス此_レ浄_テ衣_ヲ着_ル

掃部 寮_ニあ_リて心_ヲ御殿_ニ此_レ浄_テ帳_ヲめ_テひ_つお_りてす

一胡粉_ヲて繪_トか_ハ壁代_ニえ_テつ_とと浄_テて_ハな_して

つゞきとゑさうふ 公事根源 下略禁秘抄ニ云ル帳

白襲

更衣_ノ時_ノ衣也表裏_ニあ_リき_ニさ_ぬの重也桃花云

惟夏_ハ生衣_ニ以_テ胡粉_ヲ畫_シ葺_ク雀_ノ冬_ハ朽木_ノ形_ニ云

青簾

著寸或_ハ表裏_ニ只_ニ張_ル四月十月更衣_ノ外_ニハ暑月_ニ著_ル之

青紫_ニす_レれ_{ども}翡翠_ノす_レれ_て四月 一日新_ニ浄_テ簾_ヲ以_テ浄_テ殿_ニめ_テお_り云

孟文長口

女と云ふはまゝありてはるる 河多系をまはるる
穴よりまはつゝく節渡山吉野山とて三室山
こゝまらまらひは時をめぐりて大物主神と云ふなり
そは系をめぐりてはるる三輪山とて
Pもる瘡事本記に及たりやうにおわゆる
は祭ハ貞観の比はりけりまらまらるるや 公事根源
年中行事 哥合よ

りまはれまらるるのふおほはれ神のまらりなり
は三輪の明神ハ社もたてて祭れ日ハ茅輪と三輪
つゝく岩の上よまらてそまらまらるる社のおいせお
やーこて里れまらるるおわけなりてはるるまらるる
鳥百十いてまらてまらるるやうまらるるまらるる
まらるるまらるるゆれまらるるまらるる其後神れらるる
まらるるまらるる奥儀抄 岩ハ二此鳥井の内よ
まらるるの神れらるる其所まらるる堀河次郎首首よ兼昌
哥云

東はまらるるまらるるまらるる三輪社
但神代卷上四十一枚云吾ハ日本国三諸山よ住
思心故よ即宮と彼處よ宮就居る此大三輪
神也云云略記之この説の如きまらるる三輪ハ社ありと
兄也 詞林採葉抄ニ云太神宮 祢宜部 廣
成撰まらるる古語拾遺ニ曰大己貴 神大和国城
上郡大三輪神是也云云
新後撰集ニ後成哥云
まらるる三輪社にまらるる杖をたつるまらるるのまらるる

稲荷祭 同日ハ神社建立れ縁起又まらるる此盤鶴の
和銅年中まらるる伊景利山よあつたれまらるる

きりこや或ハ弘法大師の東寺此門前より稲
あひくる老翁はあひのひききと東寺此鎮守は
勸請よりされしと云り説もゆる也さていなるとは
稲と荷とをさしと云り 公事根源 延喜式神
名帳云々稲荷神社三座下社大山祇中社倉
稲麩上社土祖神この神ハ百穀を播
みふれよ稲荷と云り由卜部の記よりなり

山科祭

上巳日 比叡一ツハ宮道氏此祖神也寛
平十年より祭ハしりま 公事根源 當日
使立 拾芥抄 十一月二度あり

平野祭

上申日 延暦は神社とハ造立ありて
貞観よりの祭礼とハ始りてふと云り
侍じふ近衛のマシひひく見参を取て内ま
りて葵寸臨時の祭あり五位殿上人使と云
ひを備此祭人々さしり使あり傍幣をく賀祝の臨

時の祭のこし此臨時の祭ハ寛和元年四月十日
はしりし其時使ハ左衛門權佐藤原惟成なり
とて絶しし才一御殿ハ源氏才二ハ平氏才三ハ高
階氏才四ハ大江氏才五ハ姓の祖神と云り
公事根源 十一月二度あり年中行
事哥合小

松尾祭

同日今ハ酉日 此祭ハ貞観年中より
大寶元年ハ祭の都理こふと云り
神殿と建立しりや大山祇神の傍事也
比叡山此神と同躰と云り 公事根源
十一月二度あり年中行事哥合
二葉さす川のあひあひまつよかりてきやあつん

臺盤所よりついでさるれと差人よりて殿上の臺盤
 所のふまをくと達部けつゆ勢れふれげくこと持
 て御殿のかけりともある白木の机はあきく次
 第小座よりく浄抄の浄抄の僧よりて不参れ
 人のふまの差人をく浄導師の僧よりてのりて
 佛前此作法よりく鉢の水をこりてあきく
 先浄導師よりて仏す公卿次第よりてあきく
 きり膝行していさるて水を汲て灌佛して
 後礼佛寸導師ふまのくちりて此佛生會は
 推古天皇よりてあきく釈迦如來此俱毘藍城より
 けられぬいさるて天竺下て水をこりてあきく
 せまり事とりて公事根源 国史仁明 兼和七年
 四月八日請律師傳燈大法師位静安於清凉

殿始行の灌佛よりて諸寺よりてあきく佛生會
 ハ推古天皇よりてあきく灌佛にて内裏并り
 親王大臣家までをこりてあきく兼和七年より始也
 灌佛の布施は昔ハ錢を用ゆる中比より紙
 になされぬりふまづこと名けりて花多の情 布施の後
 の負救河海は委新續古今ニ前大僧正慈鎮哥
 百段れあきくあきく内は仏の力をもたれす
 拾玉集才四
 けまきりく印舟の七のりてあきくこれに仏生れたし

雁鳥入鳥屋 同日 雁鳥鳥屋籠 鳥屋雁鳥 七夏也奪
 のるは雜

也向祈よ 替毛鷹 或ハ五 月

目吉祭 中申日 此社ハ松尾乃社ニ同祈也とよるり
 長久四年六月八日よりて廿二社の内

よき延久四年四月廿三日は祭
公事根源 十一月三日を

賀茂祭

中酒日 御形 葵桂 諸鬘

未乃日先上陣は着て六府とめて警
固れしと仰寸當日は使ハ近衛の中少將はむ
昔夢れはをりしより人あつた桂は蕩と
賀茂松尾の社司は此日よりあつたとき
欽明天皇の御宇よりは祭ハけし
下鴨御祖上賀茂別雷二の神祭也此御祖
の神と玉依姫と寸賀茂建角身命は
とめ也あつた世は小川のやちよあつた河
とら丹隆矢一とらあつた玉依姫は矢と
して我家の御子とさしては
あつた酒とては
とてかんちつ父よさせとては
さとの虚空よちけて家ハを
神の御子とて天とさしては
此命是也いま丹隆矢ハ松尾ハ大明神と後ハ
はれぬふりやおほし神事ハ大祀中祀小祀
ハ幸あり一月の神事とハ大祀とハ大嘗會と
三日のとも中祀とハ今此賀茂祭なく也一日の神
事とハ小祀とハ寸松尾平野以下諸社乃祭なり
公事根源 只祭といふは祭の事也藻塩草
よとらつたは葵と桂と葵とらハか
云

あつたは
新撰六帖は信實朝臣哥也

葵

一向よみわれ此の物也 八雲

二葉草

葵と二葉草 諸葉草 葵と二葉草 諸葉草

系生々々 源流の目此神 賀茂乃神山を 賀茂乃神山を 賀茂乃神山を

雑上賀茂經久哥 引哥よ

諸葉草

引哥よ

吉田祭

中子日 此社ハ中納言山蔭郷貞觀の法 一條院永延元年

て官幣をとめてまつせ給ふ春日の社と同躰あり 奈良の京此時ハ春日社長岡京の時ハ大原野

今平安城此時ハ吉田社なりこれ帝都らしむるは 御門とすなり

の法成寺ニ吉田社と云ふあり 拾芥 十一月ニ二度あり 年中初事哥合兼盃

百を依りや字之れ此祭云々

筑摩祭

初午日 伊勢物語

愚見抄 後成恩寺 兼良公作 云拾遺第十九上句いつか

けくまれ 逢ふる男此教を 堀をいひてきて女のよ

取也今業云近江國湖の東北濱邊 且妻云云 名所乃南十余町 追て筑摩此

神此まつりハ四月半此日也 此村の女も我ガ男志 する教やど土堀を地りて板を

神罰をかりしをよは是すまら罪障さんげり
うたふらひ神れが便しきとをじり婦婦らり
てあまを男とせし事とらて大なる堀ひらり
つてまきつて男れ教やど小堀とけらりて大堀よ入る
して人め成りて神慮よりひきてこらびり
おろれ小堀のくづきいでて血をくらきるとかん中比
よハ常れ鍋をよごさそとらりてを代この比ハを
も終そそ神祭もかたがごとくこらりかり取の
ちくまそそ哥よハけまそつち筑れ字筑紫筑前
こ云がどくちとけと五音相通也ハ雲御抄よつ
神にあり清輔集よ寄社戀
六帖
又源氏玉ころれ巻の引弁よ

あふ事ハけまの神よりのそそたて此故よいまそ
十五番番哥合内大臣哥の哥花後教

三枝祭

撰吉見 け三枝祭ハ率川祭をよ由神祇
合よのせり三枝の花をかりて酒樽とさる

故よ三枝れ祭とはり也これ祭り二月の率川の
祭とおゆりつるそそる神祇合よ孟夏の祭の
くひのせり先其そそ四月の雨よりゆるを
率川祭ハ左大臣是公此建立と口傳伝事とた
けつたれ事也此故ハ合と書淡海公れえり
もそそ養老年年中よ奏覧つれ是公此大臣ハ
淡海公れ曾孫とすよ合よ率川社と竹をれん
是公れとて建立ハはそ一わらるるそそ養老以前

よもたやまをさる神社也是公此再真一をさるを建立
と尸故らんいとおやつるあ三枝と事てこよの三
これ祭こよひ一 公事根源 年中行事 哥合よ
きふれあ三枝の花をたひけてや神れおまよは酒をあ
祭大さる神事ハ四月よぬきれをかく
りとい名をさるまつりハ可隨其季

齋刺

金兼 かつるまや丹のふさあて志りいあれれれん
神祇也神まつりなとほふまつりゆんこと松竹柳
をさるさす事也 流布 夏ある一 師説

神取

賢木取ハハはまは祭のふあもけりこ
也只神ハ非夏神こころふの冬をり
竹よしてとやてさ守云 藻塩草
樹るる卯月よをれハ神ハなれんハもつるは
賢茂れ祭なるとあさるハ再清供をもさる又

和清

白氏文集十九 樂天句四形 天氣 神且 瀧緑 槐
陰合 沙堤 平 源氏胡蝶 けて又さる一は是

卯花朽

抄物ハ五月雨ハ異名也卯花をふ存あり
らるる心也云 今按 普通ハ四月ハ雨ハ
八雲清 説ハ一向ハ四月ハ物也云 但堀河百首ハ
基後 哥小

千載ハ 賤ハ庵乃ふせさハ卯の花さるハ月ぬとる

又月清集二 後京極殿 哥小

ふ里ハ卯の花さるハ月ぬ小垣ハこゆるハ川ハち
なると云哥も物さるハ五月ハ卯花あるふこ也 萬葉
集第十ハ春ハさるハ哥あり

春ハ卯の花さるハ吾越一妹ハ垣ハあまよさるハ
哥ハハかやハよもあも只連哥ハハ四月ハ月の

短夜

明易夜
明安月

五月待

五月まらば卯月
宗祇注

麥

四月の名也百穀之なる生ずる時或春より其
穀熟する時或秋とする是麦ハ四月に熟する故四

月と秋とするは存合ふるなり又本第八
を以て不辨れ初志ゆらも今もと麦秋と云らる

麦秋風

俊頼家集よ

夫木前大納言隆房卿哥

大杯を以て本下麦秋風と云て凡そ秋あるは
麦秋風と云らる

麥

夏に
一苗
夫木前世五西行哥云

牡丹

或ハ廿日草とも和訓
とハ雲浄抄あり小入るなり仍号廿日草也

詞花集牡丹と云る哥
牡丹句廿日ありと云
牡丹句廿日ありと云
牡丹句廿日ありと云

詩經の点より云
云新式抄物ハ廿日草云
ハ芍薬也牡丹とも云一草二名又二草一名歟

云其外異名ハ名取草
千代見草を云する事
近代用捨寸
無言抄
但可依作者宗養句

おひさねや
牡丹哥題
雖兩説
依景物少夏入之
新式

杜若

杜若牡丹哥題
雖兩説
依景物少夏入之
新式

葵

細流云葵ハ必日
日向物也衛足
として身とたかりたる
物也河海抄云葵ハ日
よじつひく紫と云る

紅葉

嘸葉 夏葉と出りてあつて成る也
つり萬葉は病葉ともす

茂 草木にもよる夏也三月より成る也
うなすなきて成るなり野に成るも夏也一物も打越

茂合林下葉 流布 木下闇 非夜

青木立 無言抄嫌詞に出たり六百番哥合に季經に
秋原すしに夏花を本をさるりても竹ちりすなり

常盤木落葉

郭公 鶯花藤霞をくむも夏也杜鵑ハ跡生の
未つこころのこころ五月もとももつてはすこ

四行田長時鳥 千五百番哥合に家長哥云

夫木第八前大納言忠良也

明月 五月のさるりたるの切りもあはれあひし時のをれ
あふもさるりたるの切りもあはれあひし時のをれ
なすこころと不好事也但作者よるなり

蝙蝠 夜分也又源氏紅葉賀よりつりたるえたりと云

魚乃さるりたる扇也共は夏也新撰六帖に衣笠内大
臣哥云

日々れれ物も死ふふりたるあはれの風もすこりかりたり
和泉式部家集よ

人ものなくもあまのついでにいばりたりも君もさるもの
くさくさくもふえぬついでに伏翼そらけりたり
右三首ハ只蝙蝠乃哥也拾玉集第三カウウも
よめり
ついでにいばりたりも君もさるもの

夕花ノ衣

表白
裏青

蟬ノ羽衣

裏乃なれす一此惣名之桃花葉葉小あり
或ハ表檜皮色として裏ハ青き由と異説あり
まろそら首夏乃哥
なまらあまのついでに

温故日録巻第五

五月

献葛蒲

三日 昔月葛蒲 四日也

昔月蓬 同

左右乃边衛兵衛衛門ハ六府あやみ興と
南殿ハ階乃東西よりまきこつ乃花紙抄とておま
くさく四日ハあまのついでに庭は是をい
寮あまのついでに天平十九年五月より詔あり
百官諸人悉く葛蒲ハ薄をわく一
宮中ハ入るるついでに弘仁式も葛蒲より
さ花なりと三日ハ早且ハ南殿ハ前よりとあり公
事根源 雲圖抄ハ圖あり拾遺愚負外上
まといつて艾ハ紫よりまきこつ乃花紙抄とておま

願昭云陸奥の菖蒲なり五月五日はくわいといふは
こころをせんうとといひきく之を扱えろといふは
こころを云也かやれ此の各も扱えろといひくわい
伊勢の河をいはずいおとといふはこころは陸奥よこ
を扱えろといふはくわいといふはこころは彼國よりハ
とていふはくわいといふはこころは彼國よりハ
ひー菖蒲のありきくわいといふはこころは彼國よりハ
中抄の委拾玉集才ニ慈鎮の哥小
東海や聖沃のろをきくわいといふはこころは彼國よりハ

菖蒲

ハ五月五日
よかきくわい

枕

夜分
なり

薬玉

五日 五月玉 是ふ群臣の薬玉はたふふふは
系とりてひらぬくまハ悪鬼をとりぬこり本
文ゆふや 公事 内侍茶玉は太子以下は

徳記云内裏の糸取より薬玉を獻ず去年
九月九日は御帳乃左右は茶更此囊をけけ
小菖蒲を置いとて撤去して薬玉は取く九月ま
てこき置置也夜御殿乃御帳の東北柱は付之
云糸取ハ宋女町北はけり今世母ハ皇子以下
小児乃付たり袖は繫取為扱悪鬼也五色乃糸よ
ていふはこころは彼國よりハ
歳時記風俗通一名長命縷一名續命縷一名辟
兵縷なるといふは此事也延命乃祝也其外は
く小いといふは薬玉を玉ぬきあやめといふは哥といふ
郭公あやさ月の玉うけといふは是をいひ
きくわいといふは玉といふは

左右近馬場騎射 五月三日ハ左近ハ荒手結也四日ハ
右近ハ荒手結也五日ハ左近ハ

真手結也六日ハ右近ハ真手結也 袖中抄昔ハ

射手ナリトハ大將ナリトシテ事也 公事

根源 俊頼朝臣法性寺入道殿トシテ五月五日の
心法詠テキル

ナリハ孫モ花ノ衣トシテ云々トシテ事也 公事

真手結乃日トシテ云々トシテ事也 公事

引折テ着テ事也 故ハ引折日トシテ云々トシテ事也 公事

歌ハ一難義トシテ秘ナリトシテ事也 公事

此近衛ハ二度馬ノリトシテ事也 實澄云

ハ権色ノ狩衣ノリトシテ事也 引折テ

日裾毛布也トシテ事也 夷狄早賤

抄云是ハ左右近乃馬場トシテ近衛ハ舍人トシテ

異也 肖聞云一条大宮トシテ東ハ左近西ハ右近也

卷 河海云左近馬場ハ一条西洞院右近馬場ハ

一条大宮也云花鳥餘情云左右近馬場乃
比殿屋ハ騎射の時ハ中少將着座スルナリ猶

袖中抄委新撰六帖衣笠内大臣

梓弓中もハ等あそまてはひあはれ秘入引きて

五月鏡

揚州乃長吏船よりりて揚子江に浮て五

月五日日午にあたる時揚州に銅を百鍊

鍊て舟中波りとりて一に鏡を鑄也是を百鍊

鏡と云也事文類聚鏡門詳也玉葉集云後堀

川院御時五月五日こいふ事と云の如こりふ

ふもせ紗をくまはりまつらるる為家

み兒ちえ玉に此波のまはるるをふりけやうとあは

伊予國として樂府哥百練鏡能日法師

六月あよこるまをいといふてつる白よえゆまを

仁安二年八月經成て家哥合月祝部成仲

てし月を波のうへてえり河をすすめいさるる

は哥判者清輔朝臣云右百練鏡乃心や波の

江ははるく舟れ中よてむりて色えりくめ月のうら

此哥も百練鑑乃心也藻塩草

標葉拾芥抄云證類本草云五月五日俗人取

標葉佩之避惡清少納言枕双紙も標

此事をよは必五月五日にあふおりのこり今

をかの田舎は端午は標葉をわにかえ

事あり俗はせんむんれ事といふりれ

賀茂競馬競れまをささくふこいし朔日は馬乃足と

着し左右ははがひく駒くくする事あり勝負乃

木こて馬場此左は楓の本あり是よりうらよて落

るること案とくまはるる派負とてしハ大内武徳

殿よりて五月六日此競馬騎射乃事ありて五位

以上走馬とせしむるより延喜式よりさうさり花鳥餘情云五月五日此節天皇ちやめりつづきとけのて武徳殿へ行幸りて内弁外弁等とら之の宮内者菅蒲と献寸内侍女茲人續命縷と群臣より三献とりて六府騎射の事あり五日ハ五位以上此人此もする馬よ兼六日ハ寮乃沛馬よ兼て競馬ハ事あり云云今賀茂とて朔日ありとら五日ハ競馬とていみし氏騎射競馬の儀式多しとてや下學集ハ擬て本邦競渡とて悦目抄よ

らちの内まうらる約分らまけハのまらあははらのあききとひる此ははと我とあてかもしとふ世とてあはれん丈木源仲正哥也同集祭主輔親

五月雨 梅雨

この五月雨と云梅れききとて熟して落つ時つぎハ梅雨と云也本草綱目ハ梅雨或ハ作ハ徹雨猶委文集十六衣濕黄梅雨裡行をいり初學記云梅熟雨江東呼曰黄梅雨といり

吾言抄云梅雨近來この中々詞也むいハおり夢庵乃ちなしたるいり石好とあまハさ月次但發句はとて云云又を代もてり山集の百韻なした宗養句よとて

花落栗

紫野今宮祭

九日 今十廿日也公事根源云是ハ疫癘乃神也正曆五年長保二年天下とらつちあさりこの神はさつ藤氏長能二首と詠して奉りまるとりやその哥後拾遺よと

そ水鏡 藤原長能

白妙れとよみくく成るりらしていひそ神は家よりぞ
今よりハあゝあゝ心ゆきまな花の都は神りりきこり
此年一或人云よの中さつりりりりりハ船恩の心よ今
宮さふ神を祝ておわやきも神馬より行と多ん云信るると記す
月今よハ夏至節ニありと天慶二年二月貫
之家哥合初夏れ哥よよよよありと

蟬始鳴

水草ノ花 夏也

萍ノ花 夏也

花薦 能目ガ哥枕ニ云くるとハこり成
よふこもれ花と花ろくとこり

薦川

夏也只真薦こりり
ハ雜こりり 流布

藻花

塩海れ藻のハあゝ河上れ
いつもの花こりり 雲御抄

艾藻

和布川 夏也若和布ハ春也 和布ハ雜也 新式
かやりの事其月くり部より引こきてり

水葱花

古余伎我花

百合

新撰六帖よ野へのゆり花とつり万葉よ
さゆり花 源氏辨よさゆり花をともつり

紫陽草

四比良れ花こも螢たくと合より拾遺愚草上
あざさいの下紫よすくと螢とよひり此敷のそつと

未摘花

紅花ハ未とりさけハヤリてすとつりはじされ未摘
花とよめり題註蜜勘新撰六帖紅の未と死らつり

忘草花

花なくハ雜也流布住吉代景物也八雲御抄
わとれ草普通ハ軒ヨあり住吉乃岸ヨ生

忘草也云毛詩伯翳謔草乃注ハ通釈
曰謔草人志憂云云又誓康養生論云合歡

蠲念謔草忘憂こつり注ハ萱草也云云又河

海抄ニ云毛詩ニ北堂栽萱草能忘憂ハ少ハ小
萱草と忘草ニ云也住吉代岸乃忘草ハ萱草

也今ハ神供とハ草ヨて供ズ云云花鳥
餘情ヨ忘草ハ忍草乃一名也又萱草と忘憂ハ

草とのハハはきて忘草ともつりハはきも相違
あたり猶奥儀抄袖中抄なると

早苗

ハスル也

田歌

田植

植物折
越と嫌

田草取

引とも藻塩草ハ六月とハ云
とも又月也よと合とる多

若苗

若早苗

初苗

かやれ事ハさる事ヨ不足注するたよりハあたる
ハ初也或ハ初若引刈ハと云字乃ハ

初苗ハ初也或ハ初若引刈ハと云字乃ハ
初也其月ヨあきさるもの季ヨとるハ或ハ

松虫七月の部ヨあつハ松虫ハ初也
或ハ初時雨若芥菖蒲引薄刈ハハ初
類とらる事ト也自余准之ハ之ハ麻ハ六月

乃とるハ初也六月也かやれりの自然只ハ夏ト
刈ハ秋ヨなる初也別ヨあきとハ初ハ初也

乃とるハ初也初若乃詞ハ未ヨハハハ初ハ
但三月ヨハ初ハ初若乃詞ハ未ヨハハハ初ハ

三月よきころものハ大く初月よきころもり但先例よ
まらせて中此月よのする事とあむぐー其中よ初と
不詞なるといふをむとれをだ始月よ別よ又あきとる
部立んげんをぶー但花のつがと初花をとハ二月よ
ー只花ハ三月よあきとる連哥よハさやうれま
りたる事ハしてあきとるのこましく只時節くの
相遠らとさやうよえとれバさうたるるるー
これいふー童蒙代たのこるる人さうさー

初氏 内膳司供早凡ハ此月の四日よ
山城國御園二所供也と拾芥抄あり

若竹 竹若葉 竹若緑
今年生竹

橘 ハ正月と本こもつー云
櫻といすいしくも夏也
常世花 後鳥羽院乃

柳哥よ一かつるこもれ花のつあれやなしくもあむハ橘よ
あきとる春此花也鷹乃くるあきとるこもつー

施花 くらりぬ
毎言抄 施こをくらハ雜也

荆棘花 木也花はじこい
てハ雜也 流布

棟 音ハ練歳時記云凡一年中花信風二十四番始
于梅花终于棟花曰日本俗作棟或名曰雲平

見草ト也
梅と風はくして白く棟哉 宗祇

青梅 不好詞
也云

濃梅 金葉集よ

紫くればはけりと思てけくもけくこころも梅よわらよさうさ

一ノ雲

水雞 声れ扣戸ノ如し似
こゝろ也 八雲

水鳥巢 大形
夏也

鴨子 鴨の子とわらるる子ともわらるる子共なり
ハ五音相通也花鳥餘情あり此注あり

鳥替毛 諸鳥ノ毛と
わらるるこゝろ夏也

羽脱鳥 夏も凡そ脱ぐれぬを脱ぐりしともわらるる力なり
新撰六帖為家哥也雜といふ一説あり尋其

義非也夏也同集ヨ水鳥此哥知家
今ハまゝにわらるる力なり此立あつたりハカとハカ
すゝハカ多きれども殊よりのなるハ大井桂

鶉河 宇治鶉河等也 八雲御抄河とあり

藻塩草 夜川 鶉飼 也但

鶉飼 鶉飼 鶉飼

鶉飼 鶉飼 鶉飼

魚梁打 夏也 流布 紹巴千句
乃自注ハ春也

魚梁 魚梁 魚梁

螢 夏也 秋といふ説ありハ理よく尋め流布
ハ卯月の未だるる秋七月までハ殘熠燿といへり

蚊 夏也 秋といふ説ありハ理よく尋め流布
ハ卯月の未だるる秋七月までハ殘熠燿といへり

蠶繭カヒコノニユ

俗為カヒコノ

鹿子

新式抄物子鹿の子乃声なりとせは秋も
かゝるさかといひり但師説は夏なり

獸狩

かのこも
認狩カヒコノ 獸也事也夏也 新式同上
式抄云鹿子なり取事夜分也

照射

夏乃射るるをたがうといふ物小火とて
夏心あるふいもハ鹿其火は目と見えハするは
ういといてういハ雲河抄云矢は火と指具して
とらるる也云云

火串刺

夏の類
夏也 流布

標衣

温故目録卷第六

水無月

林鐘

鐘或作鐘六月律なり妄言抄は嫌詞
そとより但やハ此録の訓所出味タ詳

氷室

主水司モトミツノシ四月一日より九月盡まで是と奠
とんたれども六月一日と肝要之用也延喜主

水司ミヅノシ式曰凡供御水者起四月朔日盡九月晦日

其四九月日別一駄イハ准下石イハ五八月二駄四イハ六

七月三駄又曰凡供中宮氷者五八月日四イハ六七月

六イハ願今案六七月乃あつて河ハ加増して主水司モトミツノシよ

又是とせし也 花鳥餘情

又木ニ為相哥よ

まらえたるきつらなればひめさめしきはそなたよ公存まてよ
題ハ四月一日奏冰冰とつり公事 根源ニ云ッ昔仁徳天皇
乃の御宇六十二年五月日額田大中彦皇子鬪鶏
野と云取よ狩しよ出給て山より野中せとて
至給しハ菴を仰りて様あるある人せ給りて
見せ給小窟也とリ其時かのふれあつりよゆ人
ゆしとてとせ給ふよ氷室なりとリ皇子のい
その氷をばはら給うとてかさめけるめ答て云土
法一文ゆまり堀てくまばそのふ小窟て茅萱
なす厚取敷てとつりをさめ給ふ小氷ていさや
ある大旱よもいけど是を取て熱月よりなる
とわん其時皇子は氷と仁徳此聖乃御門よ奉せ
給ききハかのあつりハ穀感と一由でまて文なり
よとのせとて是氷とせ給始其後季冬とよ是と

おさめて周くあつり氷室と置き給也

堀川百首よ氷室此哥云仲實

此をみ給ふ大いさあつり氷室を今もたせさつり
氷室乃在取ハ清輔初学抄をよんて夫木ニ中勢親王
いみハ此をみ給ふとつり氷室此法膳にてとつり

しり ちとて 氷膳物 熱月なれハ法膳よ氷
も夏也 と用ふ法ひのおれと

堀河百首氷室哥後頼

皇れとこれまれとてハ氷室よおりの多川ある
すまこれ代の水此法膳よふとつりおひそらつり
夫木ニ少給内侍哥也同集ニ為總と哥云

とらさの氷此おれとつりとつりよかすふとつり
氷水 涼氏 市夏此巻よ氷水ゆす事つり細流云
ひや 流 流も也枕双流よ云いとつりあつり書中

いゝあゝわゝ成てんと扇れ風もゆるし 氷水はあまひと
してわくさり
杜子羨納涼詩

公子調氷水
佳人雪藕絲

醴酒 朔日 一匙さけはきふけきおとを供するあり
一匙さけはらる竹葉の酒なれと一匙さけとやしまし
こまけも式乃文はゆり昔ハ口中は米を嚼て宿と

この酒は造酒司をふり七月廿
日申て日毎もちりなり應神 天皇乃御時より
くくゆる酒ははらる事もい時は百済の
人わりてけりけりけり是よりさき酒と
ふゆりこり人ゆきと神代は素盞鳥尊稻田姫
乃くゆる大蛇とこりさき一斗ハやちの酒と化
ゆる事日本紀に見たり酒といふ事神
代よりとつたよき也 公事根源 但御物忌不供之拾
抄

年中行事哥合よ

解次祭 十一日 是ハ先神今食以前と神祇官此
北門より東の掖よ着て供神物具否と

ぬ次ハ廳ははして事と終ぬ神祇官掌祝詞は
ト祝師祝の座はけく本官人とも木綿とけり
るりとの壇下此薦座よとけく清巫幣物と
此儀ありと是ハ六月十二月よ二度諸社へ御幣
出たりと此ハ事也弘仁年中よは事とゆる
公事根源 年中行事哥合よ

夏は是幸此とあり月よのからゆるけりこの幣帛
七月十四日兩日 此祭ハ禁中よハことちり
祇園會 事あり馬長なとかりけりけりハさるる

神覽ハナリ一祇園此社ハ貞觀十一年ニ託宣ノこと
 あり一山城國ハ一ツ一ツヤ素盞鳥尊
 此童部一ツ牛頭天皇共武塔天神一ツ也
 昔武塔天神南海ノ女子とよひみりおま子四ノ
 日暮テ路此をり宿をかり給ふかの所小蘓
 民將來巨且將來と云二人此ものあり兄才一ツ
 あり一ツ兄ハまゝ一ツ才ハ二終り一ツ母天神やと
 才の所末のかり給ふまゆ一ツをり一ツ兄此蘓民
 一ツらたふ一ツ則一ツなる粟がらと座う一ツ粟此飯
 となる其後八年と云武塔天神ハ一ツらの御
 子と引うてかれ兄の蘓民の家よ一ツら給て一夜の
 宿をうつる事と悦むと給て恩と非んとして蘓民ハ
 茅輪をほく一ツこのまふその夜より疫癘天下よと
 一ツりて人民死する事教と云一ツこの時ハ蘓民を
 一ツりて後ハ武塔天神我ハ速須佐尊神をりて
 のたまふ今一ツ後疫病天下よおろん時ハ蘓民
 將來此子孫也一ツ一ツ茅輪をけハ此災難との
 きんこの一ツまひや一ツ又祇園の縁起よのせて
 一ツ一ツ天竺より北ハ國あり九相とたづ一ツ其國ハ
 中ハ國あり吉祥一ツ一ツ其國ハ中ハ城あり城
 一ツ王あり牛頭天皇こたづ一ツ又武塔天神このま
 一ツ娑竭羅龍王此女と后一ツ一ツハ王子と一ツあり
 八万四千六百五十四神ハ眷屬ありとい一ツ御
 一ツ會此時四条京極一ツて粟此御飯と云なる
 一ツ蘓民將來此由緒と云承一ツ公事根源
 一ツかたさすやまら此瓦のまら日ハかたそのときまら
 一ツ末ハ祇園民部
 一ツ一ツ為家此一ツをり

温故考

廿六

祇園臨時祭

十五日 御禊まゝの儀大なる平野

おのり使殿上代五位東遊とまじり宣命

天治元年六月よりゆる又きふ走馬勅樂

なかりあり天延三年北東遊の奇よひ

神代乃八坂此より今日よりそまろ千年ハかそ

八坂此里とこいれ祇園也山城國愛宕郡八坂郷

とよふは神社と地これら

公事根源

暑日

石踏茂暑川原

夏行歩也 藻塩

夕立

夕立暮此字二句嫌 新式立の字と小二

句嫌也夕は五句嫌 無言抄 夕時分小二句

新式抄 或抄云 白雨と書奉ハ山谷グ詩ありて

正字もれも夕此字立の字は二句可嫌義なり新式

は其沙汰るをれハ立此字よも五句可去也云不用

立此字よハ二句よ嫌云々

夕は云々

ハ今云々ありても詮たり

夕立此事ぬり又夕立不可有降物ハ打越可嫌

秋夕の字立此字共よ式よ可嫌之暮此字イ

夕時分よも五句可嫌夕らにり清也夕ら風も

これありて 無言抄 朝時分よ二句嫌新式抄物よ

も夕ら川をり他は打越嫌とあれハ依句神夏

よかろ云々かやに去端の事ハても云々ハ夕ら

云々ありても夏も云々云々云々云々云々云々

云々ハ云々か云々云々云々 風雅夏哥為兼

松原云々風云々云々云々云々云々云々云々

夕立 稲妻とじとじくも夏也夕立 小蝸と

ふじとじくおひく夏の奇よひ ひとひ

ても夏ありと云言抄あり一説ハ秋也案す小夕

立ハ七月初ころまでして、中法中とて、新式抄、足し
 ぬり尾花などふり合ふ事、舟も竹り万葉第十
 夕立れぬ^{或は赤}あつこと、表は、尾花^{或は赤}と此は、露おとあ
 又堀河次郎百首、ハ夕立と秋の題、よるなり
 蝸ハ二十一代集、ハ夏、此部、ハもあつこと、よるなり
 丈夫なるとも、蝸と夏の題、よるなり、仍ハ、此部、ハも
 きこと、定じ、よるなり、と、其義、哥乃部、立ハ、撰者の
 種、く、習ひ、あつ事、よるなり、連、哥、ハ、是と、用、事、と
 あり、又、用、ひ、よるなり、事、も、あつ事、但、二十一代、ハ、夕立
 の、年、秋、よるなり、孫ハ、五言抄の、説、と、其、事、く、可、用、之
 次、云、新古今、夏、部、よるなり、
 又、法、ハ、よるなり、や、庵の、集、ハ、よるなり、よるなり、よるなり、の、事
 あり、よるなり、

節抄

元日 節抄、此命、婦、竹、とりて、参、下、海、なり

あり、よるなり、つて、而、此、寸法、と、り、果、て、宮、よるなり、
 あつ、よるなり、て、抄、よるなり、と、け、と、ひ、よるなり、よるなり、よるなり、と、二
 度、あり、二、度、を、て、祿、と、竹、娘、節、抄、よるなり、よるなり、よるなり、
 きて、よるなり、抄、よるなり、此、寸法、と、り、て、其、程、ハ、折、あり、よるなり、
 公事、根源、儀式、ハ、事、お、り、た、少、ハ、略、記、之、雲、圖
 抄、ハ、圖、あり、と、年、中、行、事、哥、合、注、云、是、神、代、り、
 あり、あり、あり、神、賑、の、心、と、り、よるなり、千、五、百、番、哥、合、土、御、門
 一、月、月、れ、を、よるなり、行、の、よるなり、よるなり、よるなり、よるなり、
 十二月、二、度、あり、年、中、行、事、哥、合、よ、冬、此、年、
 表、よるなり、竹、此、紫、風、ハ、あり、よるなり、よるなり、よるなり、よるなり、
 御、板、御、板、抄、板、名、越、板、と、り、六、月、板、よるなり、よるなり、
 萬、葉、よ、和、籙、板、よ、本、り、下、学、集、云、六、月、尽、
 也、夏、秋、交、代、之、時、候、也、而、夏、火、秋、金、火、与、金、相、剋、

御板

御板、御板、抄、板、名、越、板、と、り、六、月、板、よるなり、よるなり、

萬葉よ、和籙板よ、本り下学集云六月尽也、夏秋交代之時候也、而夏火秋金火与金相剋

故越夏之名攘相剋之災故云名越之菟也八雲御抄云邪神とつひをこじむ菟史よなること此之河辺より一とて麻此紫をくすするをら夕又起す事也後撰よ

かといはれんをこすしては月とゆきてえんやなりと云題ハみさ月と云しは河原よりなりては月乃ありは

とこそといひちるると六月菟晦日也也二十しては月如何と云ふ一云不定家卿此注云これ月乃明

月之由人疑之古人六月之比必此川原臨菟又綱家及絲竹之遊及詩歌之興恒例也不限晦日

是稱皆月菟長元比或人記御倉小舎人來可參皆月菟之由催之件菟六月十三日也藻塩草云云

らハ月もゆあり歟

明題

これ月の月とんとてやありしは月乃明と定むるを

大菟ハ晦日也公事根源云大りへこひハ百官しりく朱雀門よりありて菟とゆく六月十二月二

も天武天皇此御時よりは解除ハ觸穢との内もろ神事とゆ時ハ臨時よも常よもあき

ともこの大菟ハ百官一同よありて菟とすく

拾遺 此れ月乃をうけりてははらとせ此のらのつとみたり

後拾遺 此哥と云ふとそやけりて然る法性寺用白記ハ

思ふ事とれはさひとてあき此紫と云ふよきりてもの

日大菟此祝詞とるすくはなり今ト部此家ハ中臣菟とゆは大同ありて首末此云葉小異也六月は国月ありは菟ハ川と云ふ人やとふは後乃六月より一と云ふ事東鑑よりしは麻の紫

とこりてぬさしうすすの麻城もくささぬ
こり年中の事并合よ

及引れあきの大ぬささるるも此ははた伊弉諾の
官川より引やふ回れり人草 宗柳

茅輪 是牛頭天皇蘇民將來の教へりる遺法
也疫病もやらん時蘇民將來の子孫也こひ

て茅此輪とけりハ災難とるるもこのあつるゆへ
よ今と被よ茅此輪と越れ也

新千載入道前太政大臣哥也支木為家
伊弉川をんられりあきもあくるる月此ちりりり

年毎よるるちのこれこり川あられてもやくめりあつる
形代 人形也被する人形をけりて身此災難と

伊弉川より伊弉諾伊弉美伊弉諾人へん用そあひりす
拾遺愚草上 定家の事也源氏東屋よ

みくこのころあつる方よさくあつるはさるるもあつる
見よ伊弉川あつるあきられひとんちりあつるれりりり

千五百番并合よ小竹長身也けあ支木よあつる
あり大原千句よし那きとをり捨てる草此原と云

はくこの末よかたかろろ 紹巴句也

小蠅成神 天照大神御孫皇孫命欲為

豊葦原中国主彼國よハ密火れかやく神及蠅聲

邪鬼かりこへり假令夏の蚊のごとく乱ふ悪神
のよ也是とるるたこひとて六月被ハす也云

衆蚊成雷と云ハひり事也さりハちいされるも支木
権僧正云朝哥云

芦原やわらわのややく神をもひらきしるるすくすく

河社

奥儀抄云二や一うれ事さあくよやめきことこれ
い事也是ハ夏神樂也神樂ハ冬すす事

とをのつらぬら那事して夏たすす時ハさし
川乃わらわしてすも也川乃ぬみ神四本とさくされ
と柱してまの竹と棚よつれとそれハ神供とハる
ふる是とかか屋一りといふこと庭火よ

新古今云
うらみは志のふかりを夜いつにかせもあぬひさん
といふ事とさくすくは作法夏神樂也譜よんてしり
神樂此家ハ秘す事也是多忠方ガ説云云 下畧

猶神中抄よさあく此事あり夏
神樂非夜分水辺なり 師説

陶淵明四時詩云春水涵四澤夏雲多奇峯

雲峯

秋彤揚明輝冬嶺秀孤松と古文前集よ

六月照日此時分よ白雲此空よかさをりて高比
峯れやうなるはつふ也丈木第廿一衣笠内大臣哥二
水音月よたわらぬとんて大をよわや一さ峯れやうのちや
い評判者光俊朝臣云夏雲多奇峯といふ詩ハお
とひよまらふや 略記之

薰風

六月よあく涼風也薰風自南來と古文前集か
とふら孔子家語曰昔者舜彈五絃之琴操

南風之詩註云南風之薰今
可三以解吾民之愠今云云

涼

涼と云詞清き事よひひをりてハ夏よあつすと
い詞証詮をり一只納涼よをりてなをらりよ可利 流布

月

露

網代

死鳥鴨

かやう乃冬のも
乃小と涼きと

云詞をくはじとひくハ夏をり自余准之

泉 泉殿也夏也流布

清水掬 清水用也夏也流布

仇良之井 堀河院百首俊賴泉哥

定家水色納涼云題よめり奇

又紀伊國曝井云名灰もあつたれハ
雜也哥ハ萬葉第十又支木よめり

扇 玉篇 作扇 諭月 季

簾 織篋為席 暑月鋪之 順倭名 床上卷收青竹簾

汗 五言抄ハ夏ハ部ハ出ワルハ或ハ説ハ常ハ人ハれをん
と乃ハなとていふハ今業とていふハ夏ハあつたといふ

連哥よハさやハれ差別つぬハ只納涼
乃ハ心用て夏をり昌程ハ相尋也

來奴秋 待秋

秋隣 秋近 秋遠

秋遠 秋を記といふ
同心ハ其也

夏泉 也

懼凌 白ひくハ冬をけハ常夏といひ 顯註密劫 萬葉
六三三ハあつた四時羨こり夏秋ハ哥ハ春

冬ハ未ハす 八雲御抄 但冬ハ後撰集第
十四云源多ハわさつた月ハ十月ハ

してきて侍をれと

冬をれとある地が小さくはぬきいじへとある母こひりかじをり
春ハ又と又拾遺愚草上ニ冬ノ哥云定家
花とゆへに此の冬枯一花にけるをゆとわすて一と

石竹 萬葉よ石竹の二字はやま
かて一と又只るて一とも点なり

夕顔 一宿 植物也 新式花とわけても夏
飄花 かりたぐりのむむる宿なり

丈木第卅六 俊頼
ひさし花さけるや一まにともわするもれはげらるるも

凡

麻 櫻下 花は梅に似るも之頭昭云さくらあさどげ麻乃
あされゆるとそれと櫻麻のハ云綺語抄云さくらあさど

以上袖中抄 不載異説ヲ取要記之
あさどの中は様も一とあるあさど云之奥儀抄同之

玉卷草 葛れろくたものやみすたすも色ハつと 奥儀
抄 六月也 藻塩草 或説四月にたり

射于 一名ハ烏扇 本草 西行家集
よのふハさう事かれや庭の向ようすあきけあそ志

藍刈 夏也花ハ秋也 藍干 衣笠内大臣哥云
あわとともらも

くらゆらる饒磨此里よわとあれつとあひのちよあへれ
よりすれれあふよはらあわとさけいあさうれこまあそん
なうとよらり同集よ信實哥かり

蓮 一系

海松 しんじゆ 是れかきくも夏也 流布 土佐日記 貫之
おひらりれをふらひ日あまめりうらうら成ふひさし地を
是れ見ゆ也 大帖 下うと松をこねひくへりきれこあり
源氏源遷
はるまじつやこねるもを死をふわく何れあやめいふは
び哥ハ細流云海邊り松なりと一ひるるはたけり一不
變代枕詞也あやめハ菖蒲よとせり云
ひかおひくともり并らうとねん成えはは

菱花

此哥なり千載集ハ夏ハ部ハ入又
ま本かふふ菱こころ夏ハ題ハあまり
こころも夏也いつきも尋流其義と乃之ま木才
澤浮 八夏哥寂甚

陸奥田中井とに目されておひらり成るひく風

是ハ風雅集ハ春ハ部ハいまり哥ハ杜若歌意の
題ハこころ也すくかやれ證哥こころありふ
て其季ハ定むらふハあは證哥ハふ及也
四季准之西と引用ハ哥ハゆありて載之

蟬

一し時雨 嫌詞也 流布 声
時雨ハ似

火取出

世俗ハ玉虫ハ火取出りてこころんまよあくんこ
頭註密勘 拾玉集第一

腐草為螢

月令ハ六月也 但和哥ハ六月ハかき
六月ハ小暑ハ我宿ハ草の園ハ螢ハひふ
六月ハ小暑ハ我宿ハ草の園ハ螢ハひふ

あつとよらうと二首より小堀河百首の序にくらぬわりの
いづらあきことさうよ 志草ははわふ管とありしせて 心敬
いけくよゆをけい管宛らんと云ふよ

いさじよふたあし朽てふもあ 宗祇 引むさひ一人づ
よゆをけい其みらさハ朽て管宛らんと云ふこと

練雲雀

河内カハチかき引れ糸の移りいより一より移らぬありせて
移りいよりい毛をわつと移ると手引テビキの糸
こつハ経緒ツヅミ代事也定家三百首此注よるより

鷓鴣鷹ヒバキ

六月ムツキ代孝もゆらぬ雲雀ヒバキ鳴るゆすふも口餌わさつ
いむりよあをせずして只すありとて移らぬ暑有れあせ
たりりて其後はふし暑よハ鷹鳥ヒバキれわあくこなり同

温故日録卷第七

文月

初涼

新式月令立秋涼風至云云 新拾遺秋上
早涼知秋ハヤヒヤシといふ事と

残暑

秋とわとわりのいとおの秋より始すすー 蝦エビのいとも

身入

いけり香れ方あしむかとも秋也 流布 初秋也但
初中後よき用事あり身よ志シぬも秋也

令ヒツカ

と云詞初秋也暮秋ハ時分いりといり 流布 洎終ヒツカ
あつともいり堀河次郎百首ハ風ひやうたつと
もよらり

扇置

為秋事可依句也 新式如此あまも只秋也 師説
下流布也と云字又句中にあまハ秋也

弁扇

扇と指こまも秋也言白筑州へ御下向の
餞別は宗養して百韻と言侍り

扇只思ひすつてもかきもいとあそんさきさう秋のり

神代より七月七日夕と契て牽牛と織女とあふ

七夕

かり星あひた月わりてほといつる説ありハ雲下略

乞巧奠

立庭徽 像盥水星 願絲
先七日なれハ益人遊てととりハ拭取ふ

入して乞巧奠あり御殿の庭はほくえ四きやくとそ

と灯臺九本とあつく灯あり机の上は色くの物す

より筍此こしらとそ是とをくけくえの上と火とり

は取ととくたくとたれをれありむらひ母も取入と

大とくは星成ははととらふ三代様ありつひハ盤しき

調半品半律 あまれあふなり果ハ秘事とそつり

あふくすお 觸穢乃とれを猶約りる天平勝寶

七年よとらとるむらむそきハ牽牛織女と川のり

ハれあひたふれハ鳥鵲あまれ河よとそとりてはとそ

乃ハ橋となりて織女成とそとそより 在南子と尸書

はとそとら又續齋諧記よ云桂陽城乃武丁とつひ

ハ人仙道とそ第よかとりていつく七月七日は織女

河とつとる事とそとそとつとるあハ渡地とつひ

をれハ織女とらとら牽牛は諸すところとそ是と織

女牽牛乃とほく取也と世人ハ侍あそ乞巧といふ

事とらとら事おれつ七夕祭とも云也 香花と

そと人供具とそとつて庭とよゆと成をささる乃

とハ母あそと系とかきと一事といのらん三年れ也

は必叶といりとのゆハ乞巧と也 郝隆ハ腹中乃

書とくく阮咸ハ竿上レ此禪と手向一たウもゆる
公事根源 胡詠 竹竿ノ頭上願絲多こわり或

ハ衣とり一灯と手向此酒淡筆硯針線をく
けく孫或ハ兒童ハ裁詩女郎ハ呈巧列拜寸是を
乞巧と云り一夢花録をたにんくくり萬此ゆ成り

たじきく暇日蜘蛛網則以爲得巧荆楚歲時記
んくぬり大形星ハ願事風土記曰ク乞富乞壽無
子者乞子唯得乞一不得兼求三年乃得 取要記之

喬七夕事支支類聚二委

烏鵲橋

古文前集七夕歌云河東義人天帝子機
杼年年勞玉指織成雲霧務此系綃衣辛

苦無歡容不理帝憐レ獨居無與娛河西嫁與牽
牛夫自從嫁後廢織絳緑髮鬢雲髮朝暮梳合貝歡

不歸天帝怒責歸却踏來時路但令一歲一相見
七月七日橋邊渡別多會少知 時天河よか

さきこつふもれささりて橋となりて織女とりて
事つるこ是とかさこ此橋とわかされれりこの橋と

といり又詩も鳥鵲橋連浪往來とけくきり又河が
まけ舟とてささるんともわさこ舟よハりあり

紅葉橋 鵲此橋ハ二星乃別とをりて紅涙と落す
ゆハ知のるはよそく紅葉此橋もつと

たりけ儀不可用古今集小
天乃川紅葉此橋もささるや七夕はれ秋と一もすら

こよめささり紅葉のけりといふ事とよめと和語ささ
すは秋とれささりをれハ紅葉はささるふささる

いり紅葉のささるとてあつたささるささりけ哥ハ紅葉
はささるささるやとささるささるささるささる

たささるささるまの紅葉此橋とつとれあさる

よめるし紅紫流橋よ舟よなるとし本文ありし舟とて
くくとも詠一 流布

天河

天河のあふ瀬なると又舟はむとひくも非水邊
也夜分よ五つ也又天河とんくハ二星れんたを

きは白よしり名取也水邊也雜也河洲よあり逢瀬を
と女も星れありしあふハ勿論秋也 流布

年渡

一年よ二度銀河とて心なり後撰秋上よ
むろつめお細くわたりしハ一衣の

ちりきん云の紫今ハ一とれりよよりわくを

梶葉書哥

是ハ此國ハ凡俗よ七夕此哥とて子句よ羊
此紫の露と硯よ滴て梶よわくわたり

後拾遺

天の河とてつる舟れらの紫よおし事とておれけら
新古今 七夕れとわつる舟のしられあふく秋かき川露の玉はさ
草れらの露とると鈴の玉はけ斬れけらハ

梶やち草れ露とると新式 宗祇

秋去衣

七夕れ具也

新式

万葉十赤人哥云

七夕のいそとてつる舟れらの紫よおし事とておれけら

神代よ今天棚機姫神織神衣所謂和衣古語拾遺

よとてつる朗詠去衣曳浪霞應濕行燭浸流月

欲消をよつる作する是也詩のいハ上句去衣とハ七夕此去

時れ衣也天川よかどるんれむれひけらハ七夕乃もとて

引かともつる下句行燭とて道行とてつるもす火なり

續松なると天河よすめる月流ると是ハ七夕此續松

乃流水ふひつりて消とて云也火よなるとは八月欲消

と云也雙浪浸流ハ河と渡意也

星合 星祭 星手向 星契 二星

よこ糸 同注 ことらげのひれ字使也番めあらずかりおど
れへは小取番。相撲番の書ハ相撲とけふ事たり
そまハ母とてけがひぬけり清濁
也藻塩草ヨこころはくそひもへり

新綿

新撰六帖為家哥也めあらずハ七月十六日也内裏のこ
川きり綿也 藻塩草 但本説
不詳或ハ九月也 可隨 巫好 秋

鶺鴒坂祭

廿三日 鶺鴒坂杖

俊頼抄云是ハ越中國鶺鴒坂明神乃祭乃日龍眼
木乃答として女れ男志とて敷みあつてひく女と敷平をり
其のハ孫とて不醫とゆせて黙禱宜杖と持て敷み
と多りて女耻てわいどは忽神罰をかりつるといひ
この祭ハ志とてつらの祭とゆへは世古哥の足

三枕山祭

泳布

穂屋

作ルニ事藻塩草ヨ信濃御謝山乃まはりハ薄
程は皆すつたの穂とつた也云云玉葉集ニ金判
盛久哥

尾花少ややれ免とら乃二ひと母志リ里あつあはりここと
丈木ニ為相哥云

初嵐

秋也初
嵐ハ難也

十あつちやれ初をれひとかたあひは針のさるゝとん

露 三月よりさるすく四季は用る
物なれども秋はうけかたり

波 | 袖 |

泪 | 思 | 泪此 心 | 詞 |

霧 三月母りる蝶をじりくも雲と
じりくも秋の柳をじりくも同前

胸 | 秋也と云
三物ふ

折越と云 心 | 秋 | 香 | 秋 | 流布

式は嫌香此煙云説いりまら母も香ある也 流布 霧
不断焼香と詩よも地をりハ只以れのみら乃事也

海 非水邊 | 色 | 祈居取母打越嫌なり

立人 今いそはれをいれ方置れもきり立人といふ

稻妻 秋かり夜分也 稻光ハ雜也 夜分
よそあすかりなりと嫌也 流布

律調 又らと云

一葉 一葉散只一葉と云ら云てハ初秋乃事なり七月十六日
日すそハつらつらと云ら云てハ初秋乃事なり七月十六日

流布 一葉ハ桐也書 | 船 | 衣

桐 桐此落葉只桐も秋也 新式 淮南子梧桐下葉落天
下知秋といふ立秋乃目より云ら云てハ

柳散 初秋也先柳桐をくよりちりちりしるもの 流布
すく名木散いつとも秋なりそれ母を速ちり

黄柳 秋の柳也

流布

楸

こまくりも秋也 新式
秋也 飛布 初秋は用也 新式抄

瀆

万葉第 十一小

波島よりえゆらうしは瀆久本久一なりぬ意ふあつて
こつり今葉云は哥拾遺第十四も後ひさ記とあり
下句是よあつてこ入あり伊勢物語には後ひさ
とあり又下句もあひこして入あり八雲御抄
よひさこ云非説なり云云瀆母ある楸たり瀆荻
たしく云うと一は物語としてひさこいつる時惟清抄
云瀆ひさの愚見抄の瀆はある家とよべ一昔
鹿板鹿たご云がと一 定家卿 庭上 冬菊と
云題 一とく

新式の南の海のもゆびさう久一とある秋はあつて
は哥ハ瀆比家の心あり孫ハ題乃庭の文字落題よ
かす也云云師説ハあつた瀆のあつたのうけをさう

の哥ハは物抄本哥とせり又ハ物語のともひさ
と後ひさ記とまゝなる中ありとあまつたしりて共本
哥ぬらうとさへさふあひさくをあひさねと云詞也
今葉云瀆びさの愚見抄ハ二説ありといひ一説ハ
汀をた砂の塩はひれくせぬと記ありれく家の
ひされやうも高を砂乃とさされうをかきさうも家ハ
鹿のこくたれハ瀆鹿と云也又一説ハ昔鹿板鹿を
とやん海即の家居乃瀆はえゆらうとよこたり拾遺
色草ハ定家卿後鳥羽院慈野清事乃清伴
よまらりて新宮三首ハ哥乃中ハ庭上久の菊と云
題ハてくもさる哥ハ如惟清抄ハこまけ物語ハ哥板
本哥とせりれはゆある鹿の事とよめるとよめハ兩
説人の好むとんりて用ゆといひ宗祇乃注ハ定家の

平あまは家此家と用也一とつらびとつらびの
漢此定家とつらびは家居の事とせし
まらりと見る祇注もこれ好むをたれは汗乃砂の
説ハ今ハ用いざとせしや藤原基輔

新古今

これとい物流の哥よりいづるまのりや
新式云漢庇 有説云依句 可嫌打越物所也

言言抄云彼乃とせしるまのりひさし母の
ももて後よりる小家とせしふたりやふも

者居取打越嫌ゆり但由れとてゆりて
可嫌とせし説有之定家卿の哥霜をうぬ南乃

海のとゆいさしといふ哥といふ居所はふり也

と武抄物といふ云云新式増抄云大略居所はふり

たり但とゆれ洲乃下崩てし

いハ抄越なりと云

と也或抄云と云居取打越と嫌今ハ五句也云云

楸の幸ハさてをたれやなふ幸とあつさんハかの

傍題とるえんれあふひまきと以次はあふぬ

ちと秋と秋とちと此也 師説 惣

しととあふぬ紫ハうすた事といひあふせり

りととと只抄のあふれ

可といつとあふれなり

諸木とらとらと

とらとらとらと

花如蒸栗也萬葉集ニ女

倍芝をく本日本文未詳

是ハ曉ひきて朝日と志ゆく萬葉朝景

書と葉とハ別也葉ハ真韻云木程とわ

是ハ

柞

櫛

女郎花

牽牛花

長安

已レ禮レ文レ韻レ曰レ朝レ華也又レ字レ書レ曰レ槿者薺也毛詩有レ
 女同車其顏如薺花愚謂薺朝榮夕衰花也故毛詩倭訓呼薺曰朝顏亦不妨也由是日本俗
 以為與槿薺共牽牛花蓋以倭訓共同是大誤也宋人詩曰槿花當下點秋事早有牽牛上竹末以此詩意見則槿薺與牽牛各
 別也牽牛花此出於甲舎九人取之牽牛易藥故以為之又或故人詩曰君子芳桂性春濃秋更繁小人槿花心朝在夕不存云云
 露草日草也或此花八秋三月中八日と記さる之
 云云袖中抄第三云月草八六月七月かんこと云記さる之袖中代説とりて
 七月の部とる云
 雞冠草花

別郎花

茶とり草れ事と袖中抄よおほられる云云
 品て花のちらさこれおほられる云云万葉才た家持哥云
 秋の野ふ今も也ゆめものよれおととをかれ花也ゆいふ

桔梗

古今拾遺なんん物名よいらぬ物の名外殊見

萩

字亦作道順倭名三月よりる云
 濱一殊也流布いせれ淡萩ハ蘆乃
 幸ちれハ雜也穂乃字色
 るいまハ勿論秋也又萩といふ名はなから秋也師説

芭蕉

霜をといひしくも秋也流布他准之也

水け草

秋也天河よおりくらり説さり一ハ水影草一母ハ水懸草也是ハ緇ちり云云万葉十赤人天漢水影草金風靡見者時來之よきり後在今秋上
 頭昭云水け草ハ多のけらおつる草を云詞と

畧し多しといふはあまれ河よ草おやう幸わうくも
 あくくといふあまれ河の河よななくくもくくといふ
 或本云河のを草とい苗と云也其故水とわくは天
 河の水とわくといふその水といふは河よりわくくも雨ら
 されは天河水け草と云はあまれ河の水といふは今業は水
 とわくくといふはあまれ河の水といふは今業は水
 け草といふ水影といふ水懸といふは水影といふは
 中より万葉の書様いふは水影といふは水影といふは
 ようにわくくといふは水影といふは水影といふは
 草といふは水影といふは水影といふは
 以上袖中抄略記 此草あまれ河の連歌は
 八只秋又龍尾草の異名也聖霊水水向心もど
 云説あまれ河所出味詳殊更連歌のやまはくくく説
 名所あまれ河 流布 室と云ん

鳩吹

ぬまのりふ也わくは中よもやくくのりふと云
 まくくといふは秋のときとていふはくくといふは
 まくくといふは秋のときとていふはくくといふは
 をて手とわくくといふは秋のときとていふはくく
 の麻まらぬ人といふは秋のときとていふはくく
 と思ふといふは秋のときとていふはくくといふは
 の山あらしすといふは秋のときとていふはくく
 といふは秋のときとていふはくくといふは
 堀河百首よ立秋哥よ顯李郷
 朝もつれ秋の涼よいふは秋のときとていふはくく
 同百首母旅戀母仲實朝臣
 まくくといふは秋のときとていふはくくといふは

い哥とそとあつまるふもぬまのくまのまきならぬ奥儀
 抄云好のけりぬれ比尋常とて好とそりてをさそ
 そつとつらあふ然とらてふれハハかりを所て初
 わく鳴れややあふはあつてふれあつてハハの鳴
 とさうんとて尋常れちるる細くそとて尋常れあ
 へ是もそとゆくとハ云也或説ハハこやれらあふ鳴をさ
 けくをたててもは吹く尋常れさうとてハハ或説ハ
 といやれらあふ鳴をさして通て鳴れ吹く鳴とそをさリ 袖中抄 下略
 鳥屋出鷹 とい夏好のわけさるる屋よこめて 飼て羽
 のおそらひらるるを盆に聖具の著と續む
 こりてさうとやしらあふら著鷹鳥と中こつら西
 園寺百首れ注母鷹ハ四月八日鳥屋よ入七
 月廿日はおと也とあり定家三百首の注ハ十四日
 といふとこつら 藻塩草ハ十六日こつら説くあり
 當流用所ハ十八日説くあり

初鳥狩

初鷹鳥とつひくも秋也 流布 或ハ八月鳥屋出ハ
 鷹と初てはふと初鳥狩と初鷹もふと
 萬葉第十九 といふも好むに云のさゆきと始鷹狩とふてや別きん
 小鷹狩 萬葉新点

蝸

蟬 同秋を成鳴ハハハ也 八雲抄抄 蟬与日晚可
 嫌折 新式 声もすくも別なれも根本蟬と同
 類まハハ也順倭名云茅蝸小青蟬也云云蟬依
 じまひくも秋なり初秋乃を此こされと木枯るとん
 けり合つる哥も竹ら堀河百首ハ仲實朝臣
 千載秋又ハ 乙里ハさしけりさるる木枯れ吹夕らま日らハハ

虫

三月
 ころもろ

松虫 一ノ声 羨貞

鈴虫 松虫 鈴虫 絡緯 ハタフリ をきいて

蝥 毛詩八卷曰七月在野八月在宇九月在户十月在牖
蟋蟀入我牀下 宇ハあやうざれの落敷邊と云又順
倭名ニ宇ハ門ノ屏ノ之間也云寒もさハ十月ノ
床比邊へ來て啼也温なる間ハ野ニ居と也

綴ツクリ蝥虫

促織 タラシ 蟠織虫 ハタオリ 鳴聲如急織機故以テ名ク之 順倭名
蟋蟀 シラソツ 悲同物其形似て声ハウレリ蟋蟀ハシラソツ也

蟪蛄

藻住虫音鳴聲

我蛻云虫ハ藻ヨリツキ小貝也水邊ニ

羨虫音鳴聲

なまこてハ秋也他准之えの
虫トハミナハ雜チリ 流布

温故目錄卷第八

葉月

北野祭

四日 北野北天神の御事ハ人々之れ志多事
昔延喜乃

聖北御門右大臣從三位菅原朝臣ミナモトノトクナカ

らせりふ沙又ハ參議從三位是善卿トサキヤウ赤昌

泰四年正月二十日因テ尤カ僕射藤時平之サウ讒言被

貶シ論太宰權帥筑紫イサキ赴イ其外十二人カ於カ一

と二十七日カ左遷シ延喜四年二月廿五日

配所カあしてはわふカ遊カ逝カ也其後天滿天神カ

中カなりて天下カをカりてあカめなる延喜乃沙時

よりカなりて天神北御靈カとてカ中カにおカり

幸とていひてさへけ延喜二十三年四月廿日
 よ宣命を下して贈官贈位あるの事ありき
 昌泰四年此宣命をくやれとてさへけ六十一代
 朱雀院天慶三年七月十六日託右京七條坊婢
 文子欲棲右近馬場其如甚賤不能營撫纔祠
 家側同九年三月近洲比良神官良種見六年七
 歳託日我所居之地必當生松不幾一夜间數千
 株松生北野於是朝日寺沙門寂珍與右京
 婢文子戮力造靈祠次年天曆元年六月九日始
 移北野也天曆六十二代村上天皇元年也天德
 三年右丞相藤師輔改規大慶自爾靈感即新
 せふ乃まらりハ六十六代一除院此御時より
 りられ官幣なきを祇園おれり公事根源
 小定考とて委元亨釋書等よとのせり

司召

十一月定考是也是ハ昔六位以上ハ加階とて
 人しかり藝能行跡格勤とてさへけ榮爵とて
 せりかり上ハ官此東北廊の座まはして事ハ
 ぬ次ハ朝所小就て三献此義あり次ハ宴穩の座
 みはく又をのく三献をかさハ花衣上マ下此冠
 よさハ大臣ハ白菊納言ハ黄菊參議ハつり
 其外ハこれ時のくぬ衣ははかり花はあらず太さハ
 二月此列見ハ同一式兵此兩省より諸司此輩の
 上目と選成さる事此列見とてふそれとてハ
 りて奏すと擬階の奏とてふはとてさへけ
 ささのゆくと定考ハ中ハ也定考と文字ハく
 と考定とさるさゆふとてハ口傳とてハ選叙令
 よりハ事ハのせり其儀式ハ次弟小とてさ
 十二日ハハ小定考とて大弁以下此東廳よ着く

公事根源小考定是非

年中行事哥合

石清水放生會

十五日内裏はしつゝ柳八幡大菩薩と

命内蔵寮公使みりし柳八幡大菩薩と

人王十六代此御門應神天皇乃御事なり

仲哀天皇乃第四代皇子御母ハ神功皇后胎中

天皇共又ハ譽田天皇と名はせたる天下と

ろくめ事四十二年百十一歳此寶篋をたもて

初欽明天皇乃涉代は始て神と祀て筑紫肥

後國菱形池といふ所み跡とてさめし人王十六代

譽田八幡丸也と託宣あり譽田ハもと此御名八幡

ハ宮跡乃号後ハ豊前國宇佐乃宮と云ふ

と由託宣あり仍威儀とてのくじりさう又神

託きて御出京の儀ありさうて彼寺ハ勸請

御時ハ大安寺此僧行教宇佐はありてあり

靈告ありて今の男山石清水よりたりす

後ハ行幸を奉幣を石清水母あり

代ハ一度宇佐へも勸使をさしつゝ二所宗廟

とハ天照太神并ハ八幡大菩薩此御事ハ八幡

大菩薩とハ御託宣ハ得道來不動法性示

ハ正道岳權迹皆得解脫苦衆故号ハ幡大菩薩

正精進正定正惠是を正道と云ふ心ハ正をハ

身口ハのつゝさうり三業ハ邪なくして内外

真なる諸佛出世此本源なる神明乃岳迹とこれ
 是つゝめたりまゝに八方に八色乃幡をたつる事あり
 密教農唱西方阿彌陀乃三昧耶形なり其故もや
 行教和尚は彌陀三尊乃つゝらしてみまはせ給きり
 光明袈裟乃とみまはせ給くせ給くせ給く僧頂戴して
 男山に安置せ給きり神明此本地を以事たり
 つゝらぬもひまはせ給きり大菩薩乃應迹ハ昔より
 あまらうたうらう證據たりまゝにや或ハ又昔靈就鳥山
 して妙法花經を説き或彌勒なりも大自在王
 井なりも託宣し中よりハ正此幡成りて
 八方濃衆生を海度し本誓成りて思入る
 崇敬し奉りて放生會乃つゝらり元正天
 皇乃法宇養老四年九月異國襲來此時大井
 の神力よりて異敵とてちりけりなりて
 のら大菩薩乃託宣し合戦乃ありてなりてのん
 一放生會を移しなかりとありて母よて毎年母
 諸國りてこの事も放生此いしき事寂勝王經
 長者子施水品乃池魚乃事よりおとれるもやまこと
 よいそらぬもつゆらひのりてつゆらひ延久二年
 行幸み准せ給きて六府已下供奉する事よハ
 なる早且よあつたを神輿つゝせ給ふ内ハ行
 幸此儀式して音樂聲雲をよめ衣冠のよを
 ひ目よかやえそれひまはせ給きり還幸此ありてハ神
 人法師亦よつゝらして白杖をよめかつて道り
 とつらなる儀式也朝母紅顔もてせ路よかこれと
 夕母ハ白骨と成て郊原よくらぬとせ乃ありて
 志ありてハ神慮れ程もつらなり
 たつてハ事もつらなり 公事根源

名月 月 月日

こけくさくさく詞秋也但月次の月日
ちのこの日あつて秋にあつてする月

日なりとあつて八月次也 流布

眉 眉書一

月日此影光と秋あり

万葉才六
月あつてさく三日此眉根搔けあつてさく一まふあつても
ちりさけて若月カキえきハハとあつて人の中也ひさびさりあつた
なつてつるさ女乃眉よ三日月此似とつて八雲御抄

弓弦一 非三日月半月也 八雲の
字はつても綺語抄云いさ

ふふ月とをさつてさく一初る身成云又月八日あつて
あつてひく其名ハハきり始ハ三日月七日八日かきあつ

ちり十五日とちり月十六日とバいざうひ十七日とバ
十八日との居待十九日との孫まら廿日とのハハつて
廿二三日とのハハとこれちり下旬とのハハとつてあつた

大つてハ十四五日とちり月此のハハとつては秋のあつたをハ
これとつての月とのあつてとくりくつて廿日此後を

いふとさきちりりとは上弦下弦とて月の半つて其
歌一カキ旁曲一ナラシ直若張ハハ弓弦ハハなつてちりと云下略

劉熙釋名キガあつてさくちり不知夜月不知夜ヨク月
の事袖中抄よ委えさくちり事あつてをハハ不記之又

八雲御抄云望月ハ十四五六其間也但万葉よハ十五日

とかさくさくちり月とよつては藻塩草云此儀心をかり

曆よ望と出さす事十五日よかさうす

十四日十六日よちりあり

晨明 河海云ちりちり曉まて此月をあり明とつて

枕よハ十五日ちり後の月とよつてと云とつて匡房卿

續本朝弥生傳云十五日以後の月をハ稱晨月

云八雲御抄より十五日以後をいふより

朝月日夕月日

月日は各嫌之但朝乃日夕乃日と用之説立之云云朝附日と書之新

式朝附日ゆふづくひなきハ只朝日夕日なり日

五句嫌也月日ハ三句をいふ一但朝づくひなきハ

思なきハ月日五句をいふゆづくひなきハ思

なきハ秋也月日あはれゆづくひなきハ思

秋はあはれ流布朝づくひオホノカ雙岳と云ハ朝日乃出

ひろひ月乃出オホノカ朝月日乃出ハ朝月日乃出ハ

岡あはれ枕詞をいふハ月日ハ二句をいふおもしろ

とふ事なりハ半月と云六日

夕月日も同之ハ船 七日時分をいふ

只桂ハ花と云ハ秋ハ毎言抄 然るを或抄物ニ云

後撰ハ桂ハ花と云ハ秋ハ毎言抄 然るを或抄物ニ云

三五秋と詩より竹葉ハ實をハ秋ハ定サタたもの也但

秋ハ竹葉ハ實をハ秋ハ定サタたもの也但

中云哥をいふハ可隨所好云云尋其義ハ非也只秋也

八雲御抄第三下ニ云つれ花ハ厚ハひらり同抄抄

第四云秋ハ竹葉ハ實をハ秋ハ定サタたもの也但

是ハ月乃ハ竹葉ハ實をハ秋ハ定サタたもの也但

よちと云ハ竹葉ハ實をハ秋ハ定サタたもの也但

説々難決只桂ハ月と玉兔オホノカありし事

乃花ハ秋なりハ月と玉兔オホノカありし事

注云南洲ハ桂樹ありハ生月オホノカ中月満ハ則桂乃生也

同注云月中ハ玉兔ありハ月陰之精成ハ獸兔オホノカなり

と云云ハ奥儀抄 月ハ陰精乃宗也精氣法オホノカなり

て獸乃形と云ハ兔ハ陰乃類也故ハ月ハ異名オホノカなり

玉兔と云也日ハ陽精乃宗也精氣はよりりて會乃
形と稱して日中あり鳥陽乃類也故日乃異
名とハ金鳥と云也陽鳥と云也カラス登天記云日中有
三足鳥赤色今按文選謂之陽鳥日本紀謂之
頭八咫鳥カラス
鼠昔有人於曠野中逐三醉
象死緣藤命入井中
順倭名

藏無有黑白二鼠月齧藤將斷旁有四蛇欲
螫大下有三龍吐火張爪拒之毒其人仰望二象已
臨井上憂惱無託忽有蜂過墮蜜滴入口中
欲是人啗蜜全忘危懼大集經譬喻經もと委
是乃月乃鼠こゝなり月日けゆく幸の
鼠れた乃の草とこきるとこみちなりなり
一切衆生罪ありも罪なきもも无常乃使の晝夜
進たるもも不知日月た力よせまる幸ハ彼草根

道よ落けきて獄卒れ呵責と蒙らんと云夏ハ人と志
れこともも彼蜜滴れとと眼耳鼻舌身意の六根
ととたらず處乃愛欲よ貪着して只今なる苦
惱とりとくとと云喻也

後の毒也祿陀乃柳也成かつとハあならずし月の屬也
月清集後京極殿哥也後頼家集よ
我をれじ草れ移とくし鼠ととらんて月れうらりと云
冬のの草葉よさり日の鼠ととらんて成りりと云
ならんと云本乃土御門哥也

星一夜秋也月と云字は五句をくつへし新式日
よもあらず夜分るとあらず師説星月夜よらりて秋
とは只星乃ありて月れとらんと云り
盃光な
と

月よとせくくハ日よ二句可嫌之と云ハ可為秋新式
是として式乃月と云り事ハ流布

し出塩 月れとらけと塩ハ浦子と同一事なり
月乃物付さす塩と月れハ同一事なり

又月のかさぬとしてハ事ハハ入の字とす
難波^{六指貫之}こさぬとらけハハ入の字とす

月の望とハ云とハ事ハハ入の字とす
日よハ云也故といつ秋ハ雲御物下略

し日晴 秋也月さ
てハ冬也

し友 袖ハ月よ
袖ハ月よ

し鏡 鏡似
鏡似

月なりと二句嫌と云り袖ハ月と云り月なり
と云也聖廟後集日月顔似鏡

無明罪風氣如刀不伐

初塩 吳王臣伍子胥靈作潮每年八月十五日高漲
也方輿勝覽一曰吳王既賜子胥死乃取其屍

盛以鵝夷之革浮之江中子胥因流揚波依
潮來往蕩激隄岸勢不可禦或有見其乘白

馬素車在潮頭者因為之立廟每歲仲秋既
望潮水極大云云仲秋既望十八八月中也子胥死

二廿二告家人曰扶吾目懸東門以觀越兵之
滅吳乃自頸其屍鵝夷トテ皮袋ニ裹テ浙江

へ捨タリ浙江ハ杭州ノ錢塘ニアリ錢塘江潮トモ云
猶史記六十六伍子胥傳委或詩下千里色

中秋月十方軍聲半夜潮八月十五日
の事

も有之 流布

も有之 流布

も有之 流布

擣衣

八月十五夜は始て打也其前ハ不詠冬可詠を
何難欤ナカシ源氏よも八月十日よひきわむるは

こころ十日よひハ十日
余則也 八雲御抄

碓ウヅ擣衣石也字亦
作碓ウヅ順倭名

駒牽

十六日 駒迎ウマムカヒ 幸ハ信濃乃勅旨牧此馬と六
十疋なほしとては十二疋りしとてゆりしとて朱

崔院乃清國忌あわさるに於て十六日よかりたる
牧しり駒ひきくまのと云也天皇南殿は出御
なりて清馬と清後をも上り清馬解ゲ文と奏す次
事として公以下次者よ清馬と給る馬おまゝある
なほとりて清前シロノサキはすしとて一辨シツ寸取のこしれは
とハ別ヒキ分濃使として次おぼはりて院東宮なく然る
まゝ取へしとて 切原駒キリノノ ことらも秋の神 無言抄か
公事根源

てハ秋あかりし時 ことらいつり可隨ツキ所トコロ也
あふ坂乃せられおとあなかりし心まいつるきりりれ物
なほとりては秋の号し

甲斐駒牽

十七日ハ又甲斐國乃穗坂ホノサカ乃御馬とひる
公事 年中行事哥合注ニ三十疋なり云

武藏駒牽

廿日ハ武藏國小野清
る四十疋ひる 公事

信濃望月駒牽

廿三日ハ信濃望月
御馬廿疋公事

武藏立野駒牽

廿五日 拾芬抄 十五疋其外袂タテ又御
馬廿疋毎年よ奉り公事

上野駒牽

廿八日ハ上野御馬五十疋ひる大つこ
昔ハ十づく月日なごさしむる事ハなごて

國クニより御馬數百疋まゐる事として竹書ハハはきこり

と記さる。一かた。今八望月の祈りきより外はたてゆる
ぬよ。年中行事哥合注 委延喜式ニ有

野分 暴風史記書之 順倭名 杜詩云八月秋高風
怒號云云 八月ハ必吹大風也時雨付る事あり

必人のあやまらる事也也此のさういふ可分別事也

龍田姫

秋のち成保出と造化此神の名たり天下此秋と
けうさうさうこれ也三月よまらるる事とよめと秋あり

袖中抄云さゆひめ立回姫春秋おわく多れとまの結

思ひあそ其證萬葉第九梅哥云

吾去ハ七日ハ十行一結回指ゆめいとれと風まちらす那

秋れさゆひめいとれ 仍袖中抄此作者法橋頭昭

萬葉と證哥ありて花乃題よよめ

立回ひめ花のちとせふとりてを名とひらよる事とゆ

け哥判者清輔朝臣云右哥をくくハハハハ

させる詮なきや又春れを成とひる神とハハハハ

といひ秋成をひる神とハ立回姫といふハハハハ

をとり多る事たりま此秋回ひめいとれとゆ

但万葉よまき并よ立回姫とよめ事ゆやうよあ

らふ秋なりゆきハ僻事ハハハハハハハハハハ

かやこれ異事ハハハハハハハハハハハハハハ

きてゆき云云連哥も可推之

秋宮

中宮此事也三月よわる

宇治花園

草花也拾玉集第四よ
昔乃人のなるこや落あらんせ成らり此秋の花

草花

或ハ七月是ハ

草初花也秋

野花

哥乃題也

こ云事ま北部よと始北部よも在之依向神春秋

五七六

十四

此分別す人々但連哥

花野

よハ折まらうせて野花秋

薄

なまらう三月よとてあそふと云説あり但りよ出る事
ハ八雲御抄は秋乃末よわらふと云後撰は薄き
らぬと云り

花すはれ小おやも花をまねてあそふとハ秋をさかしく

秋生

秋也かきふも其時ハ
枯生也仍冬なり

尾花

薄おたり
そのころの

かこと袖中

抄母あり

萩

一殿一戸

秋也萩とくくれさるる名づ
きくろくや清涼殿の北の二すの前

萩と鹿鳴草

幸嫌也

乃りくもそゆと年中行
事并合注なとんてり

蘭

古今集物名よ。ら母とある是也野宮此哥合り
草ひら母又秋と紫蘭一題の極よら
云和名云兼名苑云蘭一名惠開惠二音和名
本草云布知波賀萬新撰萬葉集別用藤

袴二字とあり。又別は藤袴あり。花下野は似
て色紫也。白ひたり。二草一名らと。但詩家
よハ偏は蘭を用ゆ和哥

よハ二草こり小用らあり

三月母りてあそ
うといふり

菖

一花玉真

秋也玉卷
菖ハ夏也

葛

一花玉真

紫花

紫乃色少くはあそ
しつても秋流布

紫莞

古今物名

鬼志許草

こよめり紫菀也綺語抄
奥儀抄云名抄袖中

抄云云々云々云々乃儀あり

穂蓼

蓼花

蓼多錦

蓼紅

新撰六帖衣笠
内大臣哥云

苧のよふ河これちそ知母夕日さひりさ社乃より那
かまひまかり引舟よそあひよま合さる證舟よ引合付合なる

葛

ちりちり色ともあ
ても秋ちり流布

萱

かや軒端秋也秋母あすすこ云一説あきとあは
るもかや流布かや萱も秋也植物よ打越地へ

茅

萱よあすす只茅と云と又説よりやと
云物別あり云云是雜也又茅こころととも

又新撰六帖

も別よあきと

草色付

叢色

叢共

色種

秋種々此草也種乃字と
書くこととありて

守田

植物よ
打越也

田庵

居所よ打越嫌也新式田と守時
さうり作りてさうり此庵なれば

秋なり植物よ

刈田

植物よ打越

田色付

も打越嫌也

嫌へ流布

素山子

驚鹿

僧都

非人倫新式山田此さうり
云幸ハ云賓僧都よりおこれ

宗祇古今注

を此類何も植物よ打越嫌也流布
素山子の僧

都とハ

引板

ハ板よ木成じとひやう引板と
言言抄云ひさねとらうあまに田を

あ扱み委連哥よいさやれ差別不入中の新式よ
扱扱こころり載こころり秋よころり成と心得らば
いさひしころり河とひ柳の岸。顯宗天皇御製也
在日本紀十五卷は舟河傍柳とよめる初也
又六帖み此御製此下句とぬはしこれととの
根絶せとてなとて貫之の哥とたり

稻舟

古今 河のわかれころりいさ舟れいさわなげ舟ころり
顯昭云いさ舟のいさ舟れいさ舟とて舟城ふたり
りり川と出羽國よ寂上郡ありそれ郡よりあり
きこれハそと河こころりわの國の館のまよりあり
との川より郡くころりとのいさ舟れいさ舟とて館よおこ
しきはいさ舟れいさ舟とて郡くれ稻舟とて
きハりりころり事すころりねハりわな下とてはふ
いさ舟れいさ舟とていさ舟とていさ舟とて故三
糸修理太夫の哥よ

ふふれ川田ふふていさ舟れいさ舟とていさ舟とて
とよめる神たり川のわけて舟のころり波のいさ舟と
いさ舟とていさ舟とていさ舟とて和語抄よいさ舟と
いさ舟とていさ舟とていさ舟とて童蒙抄よいさ舟と
いさ舟とていさ舟とていさ舟とて奥儀抄よいさ舟と
古義とひきり袖中抄 取要記よいさ舟と
あけくしていさ舟とていさ舟とて但連
哥よハ顯昭の説と用たり
とハいさ舟のわけていさ舟とて雲の
いさ舟とていさ舟とていさ舟とて

稻葉 稻葉雲

稻干 稻莖

稻垣

稻穉

稻穗波

稲よかころり
草をよとあり

落穂

鴻雁

初一 九月は初雁とある事あり八雲御抄云萬葉よとのり初雁の使とあり初五字

九月とあり九月もなげのりとははる云

考らるる萬葉第八天平十五年秋九月遠江守櫻井王聖武天皇は上の哥

九月は其初雁の使とあり玉葉集九

詞林採葉抄云胡雁ハ八月月中旬旬は來れ事

和漢とのり一 事 舊より但文選日陽鳥翔

以玄陽矣 爾雅曰九月 國語曰陽鳥至干

玄陽鳥 素問四時氣候論曰白露八月節

鴻雁來寒露 九月節 鴻雁來實云云

是は八月の節一 一番の雁本は九月

の節母二番めなり 毛詩鴻雁篇注云大

日鴻小日雁 洪岸二音 和名加利

田面 又頼此將兩説ありとも田此字は七句嫌へ

と云説あり 袖中抄は委ありとも事一あり

略之 一 金寒 九月も八月も云詞

たれば次ては安よ記云秋さびさ云詞ハ八月九月が

なと一と新式抄とてとる所をひきとて云も九

月又ハ八月の哥も 今般 春と云説云の歌

おろくとてり列并よ安 其義 由字あり

かしてハ 一 使 九月は使ハ蘇武事よりとるなり

秋と云云 燕歸 燕巢と去も秋也 燕知社日 辭巢去 菊為車

燕歸 陽鳥兩開 三體詩 社日とハ二月八月此戌日

也 春謂近春分前後 戌日 秋近秋分節前

後 戌日也 五穀乃神と祭日也 是と社日と云

五穀乃神

祭日也

是と社日と云

五穀乃神

祭日也

是と社日と云

とも順うり紀すさる事と今世母定りて只いあかりせ
もと秋来て夜秋の田は鳥とてこれ作れり順
倭名序云水獸有葦鹿之名山鳥有稻負之
號野草之中女即花海苔之景於期菜等
是也云云 袖中抄略記

鶺鴒

鶺鴒 八雲御抄云小長文ていさおせをんたをり
いと云庭うぐれの糸如何ぬりてきハより句
いさあふれ我う門よいなむせをんたをくあよといふ是
いはまのちと心得りて但定家御説可正説の
をんたをく時人の家とぬりて云物成ぬいへ入也仍号
之日本紀母ハはくをんたをく云又とつをくといふと
云是合文丈夫婦是といふてまたいさるゆへたり
云云續千載物名入道前太政大臣
さあ家かていひかたをんたをくてまをくて神をんたを

鶺鴒

是ハ拾遺愚草上下定家哥也丈夫木寂蓮
女郎花わゆる野乃あふれをんたをく事と人よといふ

鶺鴒

三月よりさるるもさるるき物なり
音は鳴声をくてもいひたり

鶺鴒

一、早鞆 俊頼家集云丈夫木氏アハ範光哥云
秋のよ百舌をんたをくいふれはすふたをんたの風
植物也秋也新式 志をくあふてハ夏に
一、草莖 志をくあふてハ夏に

春之在者伯勞草具吉也
頭眼云とせと萬葉集第十春相聞哥也或万

葉抄云りす此草と云ふはあゝの人の云傳く事なり
てすの郭公此香わひてをさるる所多此香手と云ふ
かきりし一母と云ふものなり母れはたのりたる行は
しと云ふやと云ふ事とてより此の草れと云ふは
さるまのりかつるやれ物なと云ふらて草のさる
きと云ふ事とて時鳥のさるまとてかつる事と云ふは
くことと云ふる是と云ふれやと云ふもいりてすれ
と云ふの事の本と云ふれは草れと云ふはさるるも
後頼朝臣伊勢より匠作歌季れり人といまはる哥
と云ふか玉に此葉母と云ふれりすれまをさるる
奥儀抄綺語抄童蒙抄無名抄訶林良哉亦よ
さゆくの説あはれと云ふは悦よと云ふ事なり萬葉
よけて今葉抄又袖中抄よと云ふる乃説とあげて
と云ふれと云ふ事なり伊勢れ草と云ふはさるる事なり

小鳥渡

秋也小鳥と云ふは秋也
あはれと云ふ説あり流布
朝鳥渡 小鳥此事
あり秋也

色鳥

秋也山柴此百韻紹巴色
秋也山柴此百韻紹巴色と云ふは
夏草引と云ふは秋也
堀河百首後頼哥也非秋と云説あり
秋也

小陵

西行家集よりあり拾玉集第四よりあり
たつひつと云ふは秋也
たつひつと云ふは秋也と云ふは

まゝとくもえようく人の心里よこうしびまのち梅乃立枝浅
此外よめる哥ま本よ多えくこり

鶉

拾遺物名乃哥也玉葉才十六寂蓮

山柄のまゝとくもえようく人の心里よこうしびまのち梅乃立枝浅
新撰六帖光後哥也同集二約家

鶉

拾遺物名よよめると續後拾遺母こやまはくこ
物名母よよめると古今集母こくたよちりひはくこ

ちとあさことよめる哥も鶉をかくりとる哥
こいつると三五記よるこり袖中抄も同改

斷木

ちとあさことよめる哥も鶉をかくりとる哥
土二集上二家隆哥也かやれ小名れ名わらる

小鷹

狩 鶉狩 同 事也共は秋也 流布

鶉

こ云句は朝こりよ字入るとも秋也小鷹のこ云詞本か
以て朝鷹かりこりこり勿論春也 流布

兄鶉

秋の巢このり

鶉

鷹よ小鳥とびとひくハ秋たよハ
小多よあるぬ鷹わひの袖 昌琢 此の句秋也

雀鶉

類これ秋也

雀鶉

類これ秋也

鹿

三月よきころいつか其声さすに鳴声等秋の生類
打越嫌さす只ハ云々かここととと五音通ちり
いけりといつこをやすめ字してあはれらぬぞす
かせ兒

八雲 實名也角れを云云云云たるや
かせ兒 子事也 新式抄 雜さく云説わたりたりの受
師説作り

鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも

鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも

鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも

鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも

鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも
鹿と云といつり或ハわらさるとも

社父魚

鮎

澀鮎

落鮎

下鮎

崩梁

下梁

鱸釣

すくさくさくさくハ非秋と云説あり其義非也釣
たててハ秋也秋風思尊鱸云本説あり

秋風よすまは勝むひあてゆれを人りらち
後秋物他家集あり此哥此心も晋張翰と云者古

卿乃鱸魚膾とくりてとちりり事なる一晋張
翰吳人入洛見秋風起思吳中尊

菜羹鱸魚膾云事詳見東文類聚
鵝衣 非動物 新式 法文ありすくやうた衣

此季とて川ゆへ生類は打越嫌下 無言抄 鵝乃

無言抄

無言抄

尾代とて唐子と云者き初とて生類
打越もさへはさる也 新式抄是と可用欵の定
てよる哥もありま本ニ從三位廣範御哥云
今ハ成りてある里み注すて秋とらるる衣とら
忍摺 非植物 新式陸奥信夫郡とて志の草と
可為秋欵可野 新式抄志のふもり
かゝのさへ秋也といり 意言抄

温故日録卷第九

長月

御灯 三日三月の北本と灯とさるる事也 公
事根源 年中行事哥合よ

たひけする星はひら母まうささ峯よめらる秋はり火
こより免り連歌よひひ初めせめくき事り

野宮別 源氏聚木卷よ九月
七日むくりあれはごあり

網代打 新式よありと藻塩草よ九月九日代前よ打
初て宇治代網代人供御よもらとらや又あ
しろハ宇治よかさす田上よとらめり云云内膳司
式云山城國近江國氷魚網代各丁處其氷魚

始九月至十二月三十日供之今案近江國田上
の網代よもれら氷魚と山椒代宇治よもれら

重陽宴

菊花宴 菊盃 比重陽より八九とハ陽敷
易き也公事根源云九

月九日ハ節日しては菊ハ菊花乃宴行は是
と重陽宴とす九月九日ハ月と日と九陽比敷
よ叶ぐゆ人ハ重陽とハハ昔ハ天子南殿よ由御あり
て節會行は上達部涉子よりりて其
道のハハ探韻行り起行りて文臺よすくが
ては十月旬のよあす今日も氷魚よふ例あり
又群臣ハ菊酒をたまはり大くハ五日ハ會よお
なり涉帳左右ハ菜菓乃囊をけ涉前ハ菊
瓶をく又ハ菜菓ハ房を打て頭よさくハ
悪氣成さくハハ本文あり續齋諧記云貴長房

謂汝南桓景九月九日汝家有實災急令家人縫綵
囊盛菜菓係臂上登高飲菊花酒此禍乃消云

とすきん其日よりてをくハ其身ハ
けりたりて家中ハ雞犬羊とく死たりや
く此のゆりふよてをハ山のかり菊酒とくて
菜菓と用り幸といひゆり辛中行事哥合重陽宴哥
菊もらけ氷魚とらそくをなふる此の

寒酒

重陽宴よりあて用り
一条冬良公此涉説よる

菊

ハ九日よかすハ雲御抄よハ菊ハ万葉よ不詠飲
寛平菊合以後名物よはあきりて誠益所見
し着綿 源氏幻此巻なハ九月よ成て九日ハ
菊ハ花と霜よあてと花の色よとて菊ハ

花より好む也云云一条冬良公此傳説は菊より好むこと
すも事つれ此より好むことと云ふは菊より好むこと
と云ふことと云ふこと可守也昔の或る書は菊より好む
ことをあていとして八月より綿と云ふことと云ふこと
は似てく當日よと云ふこと也巴
説也云云是の不正は信用物也

菊と菊草

かこ
ひ

幸連哥は嫌ぬわら

トリ淵

水邊也 流布 拾遺

他准之 五言抄

集元輔哥

我宿の菊の露も多きをよとに衆世にそりて淵と云ふこと
仙宮乃菊の露は此よりして淵と云ふことと云ふこと也
貞儀抄 是の南陽は麗縣といふ所の吾らと云ふこと
羨也其山此との菊水をあれと云ふことと云ふこと
らと云ふこと 朗詠文よ谷水洗花 汲下流而得上壽
者三十餘家とあるも是也其古事は此と云ふこと

宿の菊の露も多きをよとに衆世にそりて淵と云ふこと
のこく淵と云ふこと也此哥よりと云ふこと

淵といふ事と哥連哥よりと云ふこと

殘菊

九月十日より残菊は心秋
也 流布 哥此題は冬よもむせり

例幣

十一日 一日より事よと云ふこと 僧尼重輕服乃
人參内也と是大神事ある也 例幣とは

伊勢太神宮へ御幣を奉りておぼふ毎年の事
をたして例幣といふ也昔神祇官へ行幸か
つとくは事つらる文主中臣忌部ト部を參多
て御幣を請とりていつ使の王御馬 奉りて
常此奉幣乃と云ふ事朱雀院の御時よりと
一多うれ今神風伊勢乃國は御鎮坐あり
事と思ふ事 仁天皇二十五年三月は倭姫命

のをくみよて五十鈴川は神宮とけくらぬさ
て外宮ハ内宮鎮座此後四百八十四年とてく雄
略天皇此御宇跡とてさきさき御公養老五年
九月十一日よとて官幣を奉る公事根源
長月やとて幣ヒラよとてあはれあはれあはれあはれ
年中行事哥合あり拾遺愚草負外上よ
えとてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
をとてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

住吉市

十三日 拾玉集第三三慈鎮ノ哥よ
あはれあはれのあはれあはれあはれあはれあはれ

後名月

二夜の月後の今夜の月
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

桂川御禊

西川乃御禊也源氏柳乃卷よ九月十六
日よ奇官乃西川乃御禊

本也堀乃屋とて中臣御麻と奉る事ありあはれ
明星抄よとてあはれあはれあはれあはれあはれ

是秋拾友抄よハ赤宮御禊晦日とあり可レ哥

撰虫

是ハあはれあはれ式あり事ありあはれ殿上乃逍遙とて
殿上人とてあはれあはれあはれあはれあはれ

よとてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
おろよとて松虫鈴虫とて誰人も内裏よとて又賀
茂社司をて御られてもあはれあはれあはれあはれ
公事根源 年中行事哥合よ

露霜

露時雨 ぬけ二色けとてハ秋也けがずとて一句
乃月よとてあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
但露乃字ありとて君氷の字ありハ冬たり

霰雨 よ冷しきことじ
すしつゝの秋也

時雨 よ暮るをいつき秋此道
具じもひて秋也 流布

霧 よ霜とひもひて
も秋也 流布

露寒 將寒 眈寒、兩説をりゆか可用
也 孟津抄 野分抄同

八月九月ちうちう 新式抄 源氏桐はがよ
野分だらちてかえんはもさしよ云野分八月の物也

秋也夜とさむことわりと入てハ
冬也又寒夜長のかさひき皆冬也

あまけさしり 今
物さしりハ冬也

卷よハ言やちりて花ごろさむことなるはあけはさるること
正月の雨はあつと若菜下よも冬の前よえり春

秋冬共よ云詞とえりこれとも連哥よハ秋なりと昌
程のつら霜寒 惡寒ととも

琴の音れとらむじと夕たれけおもよたらぬすもさむさ
堀川次郎百首 俊頼哥すもろをら五音相通おのん

依物不可為秋之由 雖在二儀 秋之季 大切之時 強
用之 事有例 新式 ねもろきと云事あり

それハ非秋とつら不審也
只ひらりく秋とらふ秋 流布

死鳥鴨 ホ鳥 冷し
とらふ詞ひす

漸寒夜多ひやう方めむる
のしと衆とくへても 同前 涼引暑れ詞と添きハ夏也

長夜 八月九月 正長夜 千聲 万聲
無了時 白氏文集 聞夜砧詩

冬道

待冬

秋過而

秋盡

秋盡 秋を盡して冬に入る也 松風を同じく同前秋よりなりぬらん

准之流布

四季ともふれぬ

山色野色

植物は嫌打越但依句躰也 新式句躰

植物は嫌打越野山は色はけく新なるれは冬より

野山錦

野山紅

山は錦なるは野山紅なる

時雨 深山

深山の時雨は深山の秋也

一筆 深山の時雨は深山の秋也

枯野ノ露

秋也新式 枯野ノ露 氷と

枯野ノ虫

色は秋也露とむしては秋也 流布

裏樹

草葉は裏樹の文字は入る也

草枯

草は枯るは冬也花は枯るは秋也

此色たるは秋也名草は枯るは冬たるは秋也

五段巻

尾花枯 キハナカ 多しとて秋の新式抄 宗牧句よ
乾しの尾花よのキハナカ大發句帳秋の部有

枯薄穂 枯萩穂

薄散 尾花散

蘆穂 芦穂綿 秋 也 芦 まとのあやうは穂あり 葦花 じとひてハ秋也

忍草 シノクサ 肖聞云忘草 忍草ハ一草二名也 爾疑扱 云忍草此草兼載 爾書は穂トて昔より

忍草 忘草 同答 ありさりと草此らとらをいふは てて詮たりと一草二名也は分りて五ペーと

誤りと思ふも 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ ハ一草二名也は分りて五ペーと

頭氏哥也本草 垣衣和名之乃布久佐

龍膽 リウタン 衣夜美久佐 倭名物名より古今物名よ 我宿此花をさくく多し此等ハもをれやとら此

川上よいましとらえん 綱代よハまらりしとらやとらえん 風さしとなく一介の声よりとらえん衣とまらやかと

新勅撰物名 伊勢哥也 但物名此外よりめり 拾遺 愚草 負外上よ

此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ

此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ

此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ

此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ

拾遺愚草上下

思草 オモクサ 乃辺乃尾花 右思草ハ草の名ハあらずと草と

此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ 此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ此れ

古今事考十一
秋のひびく思ふふふと云はれぬものもやあんなあやうきと云ふ
右尾花よりまうと咲花は定家より龍膽のつれだおれ
よのつらと云ふつら以上訶林良哉暮秋の物也 流布

我毛香

いさしき思ふおれははれ 我もかす秋もせとら白ひとせり
うらむとぬと云草也と云説あると道春野藎子おれ別

晚稻

ととふ稻也 八雲 逢稻乃小田も

穰

唐韻云糴音呂 後漢書糴讀於路賀於北俗

比豆知自生稻也

堀河次郎百首 根と用たり

或ハ糴

もいつり

霜

は刈田たてて云て

草駟

夫木燐山よ牽蓮

紅葉

は時雨霜をじとひ

入てハぬひの

川 秋ふと云ハいつり 五言抄

紅葉 是も時雨霜をじとひ

色 枳 也色こ云字

入てハぬひの 川 秋ふと云ハいつり 五言抄

紅葉れけの水よりうつる 秋なるハ秋なるハ 只句

るるも 秋なるハ落葉の事なるハ冬なるハ 只句

秋は随ハと式抄よいつり 但かやの事 連哥は

ハ或ハちるあももおりてよおさず 落葉れん成ふ

くくもあむらりてハ冬よあらずと云り 他准之哥

とハ別也 但是ハひとよ 碎葉也 猶人よと云ハぬ

水 同 且散 秋 色 散 紅葉乃ちり

色 露をじとひ 流布 乱而 小秋 葉雨止降

てハ秋也 流布

古今ニ云亭子院此御屏風此志は川とてんすとす
能く此のちのちる本此のたじみ此のひとてぬとて

後拾遺秋下 秋のたよぬとてささしてやうつる風よとてささりて

後拾遺秋下は月前落葉とて云云

是は冬とてささりて秋句神よとて

秋多とてささりて秋猶可尋之

源氏角総は紅葉此少記とて再此とてりのお

一舟 是は白宮此清座舟也

秋とてささりて秋猶可尋之

秋とてささりて秋猶可尋之

河院兼保年中大井川の行幸は舟此紅葉とて

花鳥 宜朝臣

大井川にける紅葉此花とて此とてぬとや

同集は落葉此哥藤原基輔朝臣

黄葉とて清瀧川とてささりて此とてぬとや

是は紅葉此とてささりて此とてぬとや

改た大臣

大井河風此とてささりて此とてぬとや

是は冬とてささりて此とてぬとや

初 或抄は八月の部は入まら八月

遅 此句よとてささりて此とてぬとや

是言抄は嫌詞とあれと哥よも又先哲

此句よとてささりて此とてぬとや

是とてささりて此とてぬとや

是とてささりて此とてぬとや

秋秋と心くしうとせまきぬ紫

肖柏

山崎一松乃初言をさけり

宗養

りまらぬ奥山が

ちりてて山がそそ記物也又庭なごたあそ山よりと

か後後よるはなちりてりすく花ハ又紅葉ハ

かりりてと山より咲て次才よ山より咲ゆりや

奥山よぬ紫もさけり麻のそす時そ秋もゆり

此哥百人一首れ或抄ハ山山の紅葉ハちりて奥山

乃本れ紫ちりて時分其けをたのてなくともふちり

これハあやまりけけ麻ハ麻の何れ時なりきこいへ

麻のちりてて時何の秋がゆりてりゆりきとふ

事ハ事あをれも其季ハ遅速とすさんあは記之

色葉 是も紅葉ハ事也但句祈よふと一秋可尋之

葉色こいよりて色葉こよる所ハまた万葉第十

云葉色 落葉

よ色とじまふてハ秋なり

朽葉色

木葉色 木葉紅

紅葉ハ木葉紅云句ハ類秋なり

木葉錦

かろめ紅葉ハ錦なり云句ハ類秋なり

色とり

かろめ紅葉ハ錦なり云句ハ類秋なり

時雨染木葉

深て山心や木此初雨

木多色

色くの林ハ木多

と云ふ木多

色くの林ハ木多

も秋也是ハ殊文

色替梢 色取木々

草木黄落

色替梢 色取木々

名木紅葉

万木乃紅葉皆秋也（云々）詠紅葉木
楓檀櫨桐棟柞櫻漆木梅白膠木也推

ハ紅葉（云々）御抄藻塩草（云々）等此説也

雞冠

青（云々）流布（云々）雞冠木是（云々）一本ノ名也
順倭名 萬葉第十四

よこもらふらわらひらそりたり（云々）

檀

色翳収松

流布 松杉（云々）ぬ色（云々）ふ句乃類秋（云々）

の物大略秋（云々）の物大略秋（云々）の物大略秋（云々）

証

色（云々）又別（云々）正木と云木ありと云説（云々）新撰六帖（云々）
あ（云々）宗碩法師と冷泉殿とあり（云々）哥新古今（云々）
古今集第二十（云々）内大歌取（云々）の平（云々）神遊（云々）此哥（云々）注と梁塵愚案鈔（云々）正木（云々）此名也
とあり但新式抄物（云々）云當時連歌（云々）ハ草（云々）此方（云々）用と云云（云々）小大成（云々）本（云々）なり（云々）と云類（云々）ハ草（云々）成（云々）た（云々）去木（云々）篇（云々）此文字（云々）草（云々）とい（云々）ん（云々）も（云々）い（云々）つ（云々）た（云々）証（云々）也
り（云々）ハ木（云々）乃（云々）類（云々）なり（云々）又（云々）あり（云々）と（云々）い（云々）ふ（云々）証（云々）也

といふかたれどもさうなのうらと云時ハ草として然へ
慥成説いふと不出間ハ此定はるべきは尚後世君子と云

木葉且散

可准之これ秋なり 流布
あつちるるもよ秋也 云言扱

拍散

玄仍七百韻は木此間あつちるむらむらなりと云
句ハ秋は用らる也又新式抄物なるとも拍のちる
あつちるるもよ秋也 然るに古今雜

哥上よ

破上あつちるるもよ秋也と云はるるは

此并と宗祇注云拍ハ枯るる葉の枝よはきてまま

て落ぬものなきは独り心とぬ物とてよあつちるる

云云然者よままてゑれ落ぬ物れ但常盤木よハ

あつちるるもよ秋也と云はるるは

此并此注と顯昭云いふと云はるるは

りといふと云はるるは

云云或抄云秋こつちるるは

散ハ夏也新式よ拍ハ雜也とあり袖中抄よと云

本よあつちるるもよ秋也既論語歳寒然後知

松柏之後彫也とあり霜雪ともいふは春まで葉

のあつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

あつちるるもよ秋也と云はるるは

そのいり卅注よ此きて每言抄なるとあるされ
こえてくらりた古哥よ云々ハ唐乃文と正説と用
らるるさりの拍兼名苑云拍下名榭百菊二音玉
和名加開

今按知松栢之後彫とありけ今本朝此哥よよ
ハハと人別秋字書二音栢榭同をくくり順カ倭名

栢榭カ栢各別よあげくり榭カ注云本草云榭ハ音

解之解ハ唐韻云栢ハ音帛和云云栢榭ハ別よあ

和名加之波ハ又唐韻栢と引て榭ハ尺一合せぬれ

栢榭同秋人ぬ訊ハ又古哥よ秋ちくたたりふ

らるる幸ハ人て秋とちく此人の哥よ何あくとよ紅

紫とらるるあくとあるもゆり其證又木第十五

家長朝臣哥云

又又木秋哥中後徳大寺左大臣

ちとこれよこのてかひのち紅紫とゆり秋もゆりさるる

壬二集中下紅葉哥とてよある家隆

七月代何あくとちくたたりてかひも色はさたきり

かぎよよあくと但新千載冬順徳院

吉野川名とくハ初時雨とたのちハと秋もはさく

其外ハ此哥れとく母皆とたの本れりとよあくとあ

つ然者可隨一所好秋但袖中よ万葉代哥と引

てとたの本あくとあまハ栢れちるハ當流

秋よ用とた落著する也尋其義一物也

栢實 惣別乃菓秋也 流布 但

秋也推柴も秋也ひらふたくと云てこのさくあれハ猶

秋ハ非秋と云説不謂くも秋也實ハ勿論秋也 流布

推ハ紅葉也木かれも實故其名とりてあつふ物
なれし推とくも秋也柴も葉も秋也堀河次郎
百首六百番哥合なりと又推柴冬乃題よ出せり
其故しや冬とよ一説あきも連哥よハ秋也

落粟 粟とくも秋也

榎實 秋也榎とくも秋也

榎子 花ハ甚也只梨ハ雜也實ハ秋也 流布 其月くは
これひよきて入他准之西行家集よわりれとよあり

榎實 新撰六帖知家 乃くも秋也

同集ニ信實

柑

思とらとておもてすもたれんも秋也
是ハ拾遺物名よこらとて又西行家集
山つと名よとておもてすもたれんも秋也

胡桃 新撰六帖ハ姬越桃なりともあり
此外の本ハ實よとておもてすもたれんも秋也

霜踏鹿 秋也

殘鴈 秋也歸鴈乃秋也 一向不謂越路ハありて
とておもてすもたれんも秋也 流布 かつりのも鴈といふも春

千鳥 鴈よ結ひくハ秋也 新式又千鳥
よ露ヲ勞ク成じとておもてすもたれんも秋也

木枯渡鷹 秋代末よ來るも事也 三智抄
草これとておもてすもたれんも秋也

衣擲袖霜 ちうとくして
も秋也

衾 よ露とむとひてハ秋也
流布冬と云説不用

一重綿 新撰六帖知家卿
杜林著る巻の衣はひとてひとてを衣を風はむ

温故日録卷第十

神無月

應鐘 此月此律より是より異説ありと紹巴初学抄の
景物より十月此律の名也といまより千五百番

哥合母初冬哥云讚岐

輝とれてあつてはほありひれをれを母とてつる冬は事なり
六条院宣旨家集の序
新撰今身十七
曉ハ初の寺小用とて我よあつるわひささくせん
或發句よ毎ととてくつる後乃ひきき哉

豊山有九鐘霜降而自鳴山海經よいて霜九鐘之別

小春 冬日其暖如春故謂之小
春初学記
嫌詞也
妄言抄

十月、更衣 一日 掃部察夏代御装束を撤して
冬乃よあつてあわふ 公事根源 年中行

事哥合よ

ぬらふを露ものゝぬ衣も依今とてぬすし初時ぬ

始氷 月令

射場始 五日 射場席 年中行事、哥合よあり
公事根源云先世月代三日は左右衛門弓

場代棚とけく天子弓場殿よむをせ給ひく弓と
御覧すし公以下東帯して是とす天子

射席とあれく弓矢と御座代左右代とて
らう是群臣とひくく弓と初給ふうし誠は文

武二つれ道二とかくへうさうら故よ今天子も弓場殿
よかをせ給て武道とたうせあふく口傳よ射場始

かくハ賭弓とさうす賭弓なくハ相撲乃節あうさう
ととくハ明題ニ為給

所垣もはけあつらふうりときかたけまを始をれ
年中行事 哥合よ

名のこつをあれもこの射席と今ハひくしと志見ぬ
同日 群臣詩と作酒とぬまふ

殘菊宴 事 重陽よたの 公事根源

木枯 色とびすしきも冬こそとハ秋と云説もわり也
新式抄さうさうハ秋冬風木枯なり但こ

乃枯れハ川風ももあり野官哥合よ正通冬物
と難して閑口年ハ雲御抄

木枯の枯れ初風吹ぬをなうさうあふうり声せぬ
誠は時雨霜雪とさうりもあふ風と暮秋初冬

の物かたも宗祇と閑乃初風とさう一葉かたといり

哥三集上下

時雨三集上下 かなやまよふる事も 流布

時雨

月よあつらふもあつらふも冬也 流布
三月よあつらふ但十一月まで

泪

志三集上下 時の雨か

こころ類あつらふ
さる事と無言

袖一 川音一

松風一

木紫 各冬

志三集上下

冬也寒雨は風のそひらるるものこるの
そよよは言志三集上下 是少とていふ物

三月よあつらふ霜のさゆらも
冬也初霜のさゆらも同前
古來抄物よりあつらふ事ありて前式講

尺の時可三集上下 共西の家集よ

霜

三月よあつらふ霜のさゆらも
冬也初霜のさゆらも同前
一花 月一 あり

初雪

一消三集上下 富士一 未委可
ても冬也 注三集上下 一現三集上下 昔初雪の

天皇正暦十一年十一月より初雪見参と三集上下 也桓武
らず深雪の時ハ必諸陣見参と三集上下 といひて
終久一又一條院の御時よりこの雪山といふ
こあり清少納言記よ三集上下 所衆三集上下 口
かしく大内よ参三集上下 して藤壺よ雪三集上下 依三集上下 此三集上下 言三集上下 の
不足ある付三集上下 へ此三集上下 淨願寺へ修三集上下 進三集上下 ぬ事三集上下 是三集上下 執三集上下 師三集上下
法師とれと三集上下 あり春雪と三集上下 皆三集上下 此三集上下 鼻三集上下 のわ三集上下 くら

程をいふ所の衆以下必参内して雪山と此れを
公事根源 茲人所衆として廿人あり六位の侍
可然 葦補之と職原
抄あり 禁秘抄よ委

正月 寒 三月 月寒 夜と寒 寒夜

夜寒 寒朝 朝氣寒 今朝寒 冬也

炭竈 炭とるなり 炭賣

埋火 三月よりなる 火桶

櫛 夜分也或ハ十一月の景物入本あれも火爐
の類の次よこよ記之三月よりなる

綿 勿論冬也 流布

被 冬の中は衣をいびきとひくハ秋に但露乃分
してハ冬ともとり 立言抄 師説ハ秋なり

久太羅野 くのくの野ハ冬
野の名也 八雲

枯野 植物よ打越と
嫌へ 流布

名草枯 いろいろ 萩 芦落かりよかあるとびとひて
秋也 流布 只りりハ冬なり

枯生薄 かまこころの落ふ生ころと云也冬也 新生薄ハ
秋也 丈木才九二為家哥よ枯生尾花と

凡さゆの富士たすも野わさりもかきこみは尾記書と云

賜々枯葛葉

おとひて冬也かつ落葉
流布

紅葉散

紅葉散て物を掃る冬也新式是ハ紅葉乃
ちりて松ちとれやの物此上の色くは故事也

紅葉散初也

紅葉散

は月たし成じらひ
ても冬に成

黄葉流

も冬也
流布

紅葉筵

只紅葉れちりて
ころと云藻塩草

後撰羈旅哥

草枕りえらひりるは心とくくりのなまや

かみやとくもみらひりるは冬宵柏

大發白帳は冬乃部はあり

木ノ葉

本此葉の落るは月を成
流布

一衣 一雨

一舟

冬也

落葉

本此葉同
三月よわら

朽葉

色と結ひ
秋は冬迄

名木枯

冬

柳枯

冬の類
冬也

凍柳

冬乃
柳也

網代

一刺 氷魚

十月比乃景物也 八雲御抄
鱒音小今案俗云氷魚是

也初學記冬事少對雖有氷魚霜鶴之文而野其

義非也白小魚名也似鱒魚長下二寸者也 順倭

名網代して冬大和物語

は氷魚乃使と云事もあり

柴漬

積柴於水中一魚得寒入其裏因以薄圍捕取
之順和名 日本紀は柴こりてくや下たり

采あるても只本枝と水子さりけらるる其あ
 たり魚と積て藻塩草 霖亦作椽 爾雅
 漆 倭名 但言抄云少しをふ采面と嫌へ
 日本紀に柴と記く物とあり然ハ抄とも嫌へ
 次十月は此物と記く堀河院の御時百首
 此哥をりきる時初冬心と云りゆき藤原仲
 實朝臣

或ハ十一月此景物といつりす三月よもさるる
 氷はおりくよと合さる

少つてよりのりとと記れはさるる氷一
老の十載

温故目録卷第十一

霜月

狩使 寅日 豊御狩 此ハ五節所ハ狩
たれふわて母とてさるる御使のあり

節の舞姫のとりハ清御原 天皇 吉野の宮
天武天皇也
 ましくて琴と弾く時の心の岫より雲とら
 天女あまのりて琴此曲は應てあまの羽衣此袖
 と五度観ててまひく

天平五年五月はまろく内裏にて五節此舞ハ

ありきりて本朝月令公事根源をたんとし
日教と云ふは此の御狩と云ふの事なり
堀河百首の哥也万代三品見と猶仁哥云

鎮魂祭

中寅日 是れ人の魂魄の二れ玉あり魂を陽

氣魄ハ陰氣也此祭ハ離遊の運魂と云ふ
こゝて身神の中府より功なり寧摩志麻

治命の時より事おさるるより旧事本記をた

りて此祭と如法をたさるるは殊勝の御

行りぬるやと云ふは白川院ハ御脱履の後も院

中より猶行れぬる東宮中宮より七年くお

ろ事天女二年よりわかれぬると真行せられて

貞觀元年十一月神祇官より行り今八年の
の事より公事根源 支木前中納言為並

日陰よりわかれぬるはつらぬるは世をては

新嘗會

中卯日 新嘗祭ハ神今食よたぬる

ひしてのり十二之其外ハあらす是ハ今年

れより稻と神よ奉りせ給ふ家也代り始ハ大嘗

會といふ年とのハ新嘗會と也ト食此令

搦衣日際と着寸用明天皇二年四月より新

嘗の事ハより大なるハ神代より事ハあら

日本紀より天照太神ありなれはこゝに

より公事根源 新嘗言塵 年中行事哥合

いゆる秋おさるるはかたじきりて年ゆるはは

豊明節會

中辰日 是ハ今年の稻と神よま

せ給て今日君よきりり臣下小と

あふれ節會行り新嘗の祭ハ参り上り

相并小忌と云ふよハ諸司の小忌と東帯の人

一代一度此大掌會（イ）の（ニ）もの（ハ）〜
 一条禪向宗祇（イ）は沙傳授此大掌會此説（ニ）云（ハ）小
 忌（イ）といふハ神事此衣服也白き布を張（リ）て山あわと
 のハ草（イ）として摺（キ）本（イ）と摺（キ）る物也大々持衣の（イ）〜云
 五節此舞人此（イ）〜賀茂此臨時の祭又大掌
 會の時用物也巴説（イ）大忌衣（イ）といふ衣も此時（イ）用云
 云神祇 小忌袖 青摺（イ）ハ小忌の事也臨時の祭の
 たり 舞人のハ青摺（イ）名付（イ）大掌會
 のとれと小忌と 山藍袖 山藍衣
 云辨引抄

日吉臨時祭

中申日 是ハ建曆三年十一月十八日より

延曆寺の流後長樂寺にて官兵の〜公事
 誅（イ）らるるか〜の事〜御願あり〜とゆへん

北祭

下酉日 賀茂臨時祭也先兼日ハ試樂調樂

石清水（イ）の社頭（イ）乃義（イ）〜使舞人（イ）の座（イ）を〜
 わり（イ）此儀（イ）は孫（イ）麻（イ）御障子（イ）と〜沙引（イ）衣
 沙草鞋（イ）と〜額（イ）間（イ）より出御（イ）せ〜階（イ）乃
 間（イ）の〜此庭南北二行（イ）座（イ）〜使舞人
 け〜本（イ）柱（イ）乃神樂乃所作人（イ）倍徒（イ）近衛
 召人（イ）〜出（イ）〜公（イ）〜ハ（イ）簀（イ）子（イ）長階（イ）候
 寸階（イ）乃下（イ）頭（イ）已下（イ）〜使舞人（イ）と〜勸（イ）盃（イ）あ
 〜神樂（イ）あり庭（イ）燎（イ）〜朝（イ）倉（イ）其（イ）駒（イ）ま
 て〜庭火（イ）〜哥（イ）あり〜人長（イ）〜
 沙神樂（イ）〜祿（イ）有（イ）此祭（イ）〜ハ宇多御門
 王侍從（イ）と〜奉（イ）〜時（イ）〜賀茂の
 大明神（イ）〜臨時祭と〜へ〜

此は我ハ云々此事知ゆる御門へやと云々
さき終きれし居りありてヤシヨクもひたり
ワ程かしくしておりりやと云々位ははせ終きれ
し寛平元年十一月より臨時祭と云々
其時の使ハ本院乃大臣時平公ヨリ右中ねりて
此とのりたりひきるとのん公事根源調樂ハ千代
宗祇帚木別勅江次第委

日蔭糸

日蔭糸ハ白と糸と総角一として左右八筋或ハ十
二筋と冠乃左右此角よまといひく也

又新式抄ノ日蔭乃糸と賀茂臨時の祭乃時
わどくさくはわくも也天照太神入于天石窟閉般戸
而幽居焉介乃六合常闇晝夜不分群神愁迷
半足周措爰天鈿女命以真辟葛為鬘次
蘿葛為手纏歌舞
形と今よまといひ云

神樂

里一非居所新式大内乃外庭燎

- 神幣
- 杖
- 篠
- 弓
- 劔
- 鋒
- 櫛

- 片折
- 諸奉
- 葛
- 蕪神
- 以上採
- 物哥
- 宮人

木綿志天 難波浮 前張 階香取

井奈野 脇母古 以上大前張也 薦枕 閑野

小管 磯等崎 篠波 燈規 総角

大宮 湊田 蚕 以上小前張也新式ニテ神樂名之蚕准繪但秋季ノハ不

可用之神樂 方と可レ為本 得錢子 木綿作 明星

以上星 歌なり 晝目 湯立 朝藏 其駒

竈殿歌 酒殿歌 神擧 以上雜歌也神樂乃

東遊求子

あり畧寸委梁塵思案抄より拾枚抄よりとあり 神祇也 新式 神樂乃名也 と云ふものあり冬也攝家用白殿なるの賀茂やうりてへ

と云ふ地下乃未人よりと云ふと云ふそれハ非冬と云ふ

冬乃非ハ非冬と云ふと云ふと云ふけずハ冬也 求子 非人倫也 新式抄 或書云神樂乃名と云ふ説あり

まことハ梁塵秘抄なりと云ふと云ふと云ふ常ニ用白殿の賀

茂請ありと云ふと云ふと云ふと云ふ冬と云ふと云ふ夜分ハ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ依之尋其義考

新千載ハ賀哥云前中納言實任 ありと云ふ千代のたりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

雪 一 花 降物也非植 物非正花 沫 一 冬はくくめはくく春の 雪は但万八は十二月

よあはる雪あつとつらり八雲

あはる雪あつとつらり八雲の花さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

あはる雪あつとつらり八雲の雪さくはかめをさして

一ノ隨意

萬葉よ如此くをりそれかまくと云心之但又
同の心一も水とよらると八雲傳抄順日本紀

古今離別哥よ

老うゆゑの心志も孫も言れまはくわん
是ハ季よゆせとく初孫し初孫ハありの心祇注

富士

富士ハ初雪今ハ冬ハ用也中比ふり雪ハ
そと初雪をいふて夏也 毎言抄を年考

乃雪のこゝ富士雪成冬同初雪も冬同消と云
ことらる万葉第三赤人詠不盡山歌云

富士ハ初雪よりのとく雪ハ六月モトの十日モト消ゆを初雪
ハ初と信して中比ハ富士ハ雪ハ雜也消と初雪ハ夏

よすことと宗祇の袖下抄よありまのこもる兼
載式ハ百四十六首ハ中ハ證哥と云され又新筑

波集ハ別句をとりありとこもゆありて當流不用
或人云宗祇宗長ハ時分ハ富士ハ雪と雜よせり

まじりと赤人ハ望不盡山歌

田子ハ浦ハ折かてまじりハ初ハ富士ハ雪ハありて
ことらる萬葉ハ雜哥と新古今ハ冬の部ハ入れ

て定家宗隆ハ時此くハ万葉の哥と不被用と推
量してを代冬ハありてめ定めらるるハ非其義

子細ありて冬ハ用也事ありてハ家ハ不記之
一山 天竺の心の事一とてかく唯雪のありとる心の

事ありハ山類也又源氏朝顔ハ中宮ハおま
よ雪ハ心伝ハたしとハ心類ハありす句伝ハ次才あり

流布 二色ありハハ雪とありとく伝ハるるハ心雪
ろけハ心類也是ハ降物也非山類二ハ天竺ハ雪ハ也句

降物ハ嫌之句神より冬ハ成
月一 月霜

夏の詞入て不可為降物 新式 月の霜霜両方一嫌之とも天象降物共は嬌ふと云心也夏の詞入て非降物月の霜霜と云事と云て本は霜霜不混合故也又目前は月と霜と見ぬは新をらし冬成とも降物成へす只月霜をともしハ天象降物也是と云方は嬌やと云り 流布 新式の可分別物の霜は夏れ季あり不可為降物と筆と加は月れ雪霜は夏れ季あり不可為降物と筆と加らしは霜と云て秋とて同一事也夏秋ハ霜のふらぬ時なれハ月れ霜の霜母似とて霜と云りて降物よなるすといつらあつハ夏秋の句とてあすハたとい月乃霜の霜霜はまうひとてあつハ冬はありて又ふり物は打越嬌つて夏秋の句ありハ降物ハ不嫌霜の字ハ五句雪の字ハ面但月の霜と云るまこと

との言わつハは流布は不及降物又霜ハ秋と云るのなれハ月れ霜ハ霜ふいりて句新より秋の句なれ降物成也月の霜と云りハ冬也 下霜 先可為冬但依句可為春秋 昌程説

下水 同 林 只霜ありてなり哥枕は霜林といふ名所もある句いふは

六花 霜の事といふもさうも不好詞也のせとては事あまとも不好といふ事といふも載之不

此類ありてハ異名とてあつ 流布 昌休は七種をさふといつて花野をあらわすは名をさふは

霰 さいゆん

霰 さいゆん

も冬也

氷

三月よりくる氷さくらるといひても
冬也砂氷も冬なり 流布
月
只さやうなる事也但氷よりり
月の句祈り可為水邊
てと冬 氷
也 流布
ある露 氷
露氷 冬也非
水邊
泪 雪霜
等此

氷非水邊嵐の水

鴈音氷同前 流布

袖 一 一 一 衣

一 一 一 帶

鏡

水乃くこのくまらるる也
藻塩草亦水面鏡也

一 一 一 轄

水同くも 也 八雲

一 一 橋

一 一 枕

鳥鳥 一 一 關

氷 一 一 蠶

支那 負 一 一 嶠
山 有 一 一 氷 一 蠶

以霜雪覆之作絲長一尺織為文錦入水不濡

入火不燒東坡句云氷蠶不識寒火鼠不知暑
是也下學 氷よりひくまらるるの糸 宗祇句の心

ハ氷の糸長く氷とをえく其氷蠶かともくも

氷柱

水邊也

垂氷

凍蝶

冬也無言抄
和漢篇より

水鳥

三月

浮寝鳥

水鳥

浮鳥

りても冬也
無言抄より嫌詞

とあれも今ハこれすく新撰六帖 水鳥の哥云

信實朝臣

うたをたさなるものありあをひなふさくをわらうをせ
新續古今集第十七水鳥と道善法師

定りあをせぬうたをたさくはくあをやすくわらひたり

千鳥

三月よりわつさる月とひき
ひて冬也 新式抄

鴛

一ノ香

香れありは似たる哥枕よ

此池よりわつさる月とひき
一本 此池よりわつさる月とひき
香れありは似たる哥枕よ

鴨

新鬼舟

舟れありは似也 八雲 萬葉第十六よ

おのろ鬼舟と舟れありは似也
や此崎よりわつさる月とひき

あつちけりやれぬとゆる舟れありは似也
夫本第廿三 按察使云通哥也同集卅三 歌枕
哥よ

又鳥と舟ともんる 二哥枕よ藤原親仇
とありは似也 舟れありは似也
舟れありは似也 八雲 萬葉第十六よ

可混合物也

鷓村鳥

列鳥小鴨乃事也 押もりのきりる
也 巴説 冬也りるは社といつり

秋沙

河よわつさる月とひき
八雲 萬葉第十六よ

鷓

一名沈鳥 貌似鴨而小 昔上 有文 順倭名 万鴨
とも書 惠慶法師 家集よ

風俗上野哥 曰
万鴨 萬葉第十六よ

都鳥

水鳥の新式 冬と云云 流布一説
雑と云ふ 其義非也 冬と云也

鷹

三月よ 著
後格遣 鷹の羽

必人のあつちけりやれぬとゆる舟れありは似也
必人のあつちけりやれぬとゆる舟れありは似也

一とらあひて... 仍とら...
 云也但... 不審あ
 一... 綺語抄云
 袖中抄畧記之西園寺百首れ註ハ羽師國より
 出... 種々
 乃謂あり或物... 中略
 て... 其外さゆく
 云也七月乃部... 藻塩草
 よとく... 只惣
 各... 云云
 一歳乃... 云云百首れ注よあけ若
 當年乃... 網よけて取故に但りら...
 若た... 野...

網懸

黄鷹同袖中抄

巢... 當年... 若...
 新... 一説秋八月と也
 其義非也久と也

持

冬

場雉

場鳥

流布

偷起鳥

百首注

藻塩草

慕鳥立

鳥叫

後ハ又... 百首注
 教草
 三智

鳥落草 草取鷹ハ
三百首注

藻塩草 鳥取

追草ハ 草取鷹ハ

のうられ詞悉冬也四季ハ 鳥取鷹ハ

よほさて可知事共ハ百千丈ハ 鳥取鷹ハ

うられ詞四季ハ大綱ハ 鳥取鷹ハ

燧鳥

寒夜ハ鷹鳥と捕て生ハ 三智抄

温故日録卷第十二

師趨

唱佛名

十九日 被綿ハ 廿日ハ 三十日也或

一夜ハ例あり仁ハ 御本ハ 又南北ハ 机ハ

たて佛像塔形ハ 佛前ハ 香花ハ 出居ハ

寂勝講ハ 出居ハ 火ハ 櫃ハ 初夜中夜後

女儒ハ 公ハ 著すハ 是ハ 是ハ

ひろけ綿ハ 衣ハ 御簾ハ 下ハ

これ北ハ 内侍の御簾下ハ

かゝる人沙導師此窟に於て事して各謁
あり所衆沙口まゝにまかなる栢梨此勸益かゝる云
幸とそれハ右近衛府の領に攝津國栢梨庄に
所より御酒と奉りて殿上にて勸益のあり也
栢梨の所領の名としてゆゑや又佛名れ中
の夜あとも大ぬれものあり弓場にてせつれり
右大將たつひ抄ひつるうらなす程あつめとた
えとつるかへ佛名れ沙導師ハ昔ハ書とさつるか
一をまゝ延喜乃沙代たつひハ夜沙殿とて和琴と
り此合強きつらやば仏名とつひハ三世此諸佛此名
号と唱て六根れ罪を滅するん誠ハ佛名經と
うら所此功德ハしつらとさつるか寶龜五年十二月
諸國にて殺生禁断のうら格とてつら三年根源

貞觀此比をよ一萬三千佛とあづよわつて諸國
へつらせつらう國史此記よえ及ひつら今ハ吉
日撰たり

是拾遺愚草貞外上ハ冬夜此哥也つら松ハ佛名の
夜よかさつら申欵可尋之新撰六帖佛名光俊
おつらおつら此世仗のうらとつら今そまゝつらとつら
とあつら三を此仏の中ハふかを栢梨とすめとさせん
六百番哥合ハ顯昭哥之後頼家集佛名と
えよ此の沙名とあつらとつらハ此もやと此のうらとつら
追儼 晦日 ちやらふ声 せふハあやらふまゝは大全人寮
鬼とほつら陰陽寮祭文とつら南殿此邊よ此
さつらよつら以下是とを殿上人とも御座れ方
立て桃乃弓あれ夫とつら仙花門より入て東庭

とつて御口此戸よりつこい御前より灯とありくとも
 十東庭朝餉臺盤所のまへにのこりたるは灯臺
 と隙ちりぬて追儼といふは年中た疫氣をハ
 らふ心也鬼といふは方相氏乃事也四時ありておそり
 する面とて手よりそがら成り又振子とて二十
 人縛の布衣をこりめを碎して内裏の四門を
 まらして慶雲二年十二月よりつづいて年天下は
 百姓おりて疫癘をたやまされぬ故に
 ひる源氏よなやふもしやゆらも儼と追してゆら
 ありをらふて追と云こと案也 年中行事哥合注
 業すに儼ハ疫とといひんふ事也戲のやりまれ
 ぶいゆ一礼して周禮礼記論語よものせこりそ
 色より後世より礼儀志よちりるんこ云事なり
 又後漢志第五よりあり追此字をやらふこといひ也
 儼一字をもをやらふこといひ也源氏幻よあやうん
 とありまふは宣旨
 あらうといふあやうを流しよまといふ人やらうん
 九まれのよりやらふあのとともなふらうけい
 同集隆季御哥也年中行事哥合よ
 今こころ一紙よたりてあは夫のいふことよ年とまらわ
 又後漢志第五よりあり追此字をやらふこといひ也
 儼一字をもをやらふこといひ也源氏幻よあやうん
 とありまふは宣旨
 あらうといふあやうを流しよまといふ人やらうん
 九まれのよりやらふあのとともなふらうけい
 同集隆季御哥也年中行事哥合よ
 今こころ一紙よたりてあは夫のいふことよ年とまらわ

年終玉祭

是ハ後拾遺よ十二月晦日れ夫よとゆら
 和泉式部哥也

玉まつる年れよりりよはまをりたりや
 是ハ詞花集よ歳暮れ哥曾祢好忠詠也清少
 納言枕双紙よゆつりよとまをれほごそりあり
 と記ゆきてな記人のこひ物よとまをりやとありれある

よといつるかた歳乃終の玉まつりし十二月に玉祭よ盆よ
荷葉とちくやうは標とくひ物よちくあふる一報恩
經よ十二月晦日午時來正月一日卯時歸よ
あり此外よし聖靈乃來れ自あり彼經よ委
鳥見ことむれおつあはる思えんと指あつても年とんば
堀河百首よ俊頼朝臣の平の思えとはたハ
とれ毎日の長高き岡よのりて葉とさるさゆハ
きて遥よ我家とんをとあつる年よべき吉内ハカ
事見ゆるとことむとも明年に吉相とゆふ

荷前

撰吉日 先十三日よはつきくと兼てささめ
使ハ公つのも殿上のもる次官とひつり荷前
此使の定乃はわくよ元日れ擧侍従乃ささめあり
是ハ朝賀乃もめハ朝賀を以時を猶よめささめ
しや荷前とハ十陵八墓よ年れとりは幣帛

とせせせせ先十陵の第六天智天皇れゆき山
城國山階よあり昔此御門御馬よめされて山階乃
里よ行幸ありて其すゆゆささささ崩所
とつ共知人なりあゆゆ皆れおらさささ
よゆきまゆそさささささささささ
さ其外ハ白壁天皇れ田原れゆき相武天皇
乃相原のゆきまゆ道天皇八嶋れ御さ仁
明天皇深草れゆきまゆ延喜式祈年乃秘祝詞
及よ公事根源
よ荷前とまてとらゆりあり萬葉第二よ云
輕人之のまゆれゆきまゆ妹さされ無よささ
荷前のまゆと先皇乃山陵へささの幣帛
とささまゆとささの幣帛とつ箱よ年中
行事哥合

内侍所御神樂

一ツかおはるれんとてあつひもしてとれらるるはつはつ
撰吉日 此御神樂ハ一条院代時
行り年々成るなり壽永代乱よりして内侍
所西海は渡御なりて三年とて事なれり都
つと参り時ハ三夜の御神樂なりてありそれ別して
臨時は行りたる大なる神樂はとて天照太神あまの
さしてとてあつひもしてとれらるるハ天鈿目命真
碓葛と髪と羅と午繼はして歌兼庭燎とて
いみじくもあつひもしてとれらるるハ我朝の風俗神代の縁
起也よとてあつひもしてとれらるるハ其儀式かとの委事ハ猶公事
根源はとてあつひもしてとれらるるハ賢所とも云也
古今ハ年々行りてはまゑんをりて
年内立春
いづるハ春は哥は入連哥は冬なり

年木樵

正月のあつひもして
薪とて事也

衣配

冬也雜也といふ説ありとて流布 來正月は料は衣
と師趨よりとて事ハ源氏玉より此巻はあり

曆未

曆卷果 曆卷返 曆右卷 ひとらてれり
共志の子也事也新撰六帖師趨哥知家マ
一年はとて事ハ卷よとて事ハ

年

手記よりとて事ハ心よりとて事ハ

年

惠慶法師歳暮哥也源仲正家集歳暮哥云
行年とて事ハ

春と隣

歳暮也但晦日より
すといふり 藻塩草 春近

待春

守歳

冬也新式聯句乃中よりあり新式抄云年々を
——して抄ぬ事也大晦日此夜あきこ夜分なり

年籠

夫木ニ歳暮ノ年信實朝臣
あひらくよあきこんとあきこりあきこりあきこり

年終

行年 年歸 流年
三冬盡

年滿 歳暮

温故日録卷第十三

非季詞

葉守神

植物ノ類也雜也 流布 大和物語

こもり神ニハ樹神也萬ノ木をまもり神なり

紫式部ニハ神と云然家成卿哥合落葉題藤通憲

基俊判云こもり神ハこもりをわけて木まもり神ハ

あきこり弘仁式ノ三綱栢ノところ母よりくんとてゆき

私云は事此證よかのうこもり神と云ひきりて

樹之為尔菜摘布流

觥月 心二句嫌也心乃月也非秋釋教なり

心月 釋教也非夜分 新式月日七句去也心月輪乃事也同面は秋の月可有之又これより月とある事

胸此月日同前 新式抄各不可為秋但秋とてす

新式増抄 是は秋もあらず可依句同と年とく秋也

雷 穀梁傳云陰陽相薄感而為雷 詳性理大全より

西吹風 枕師吹も雜也袖中抄云

天浮橋 非水邊天 此事也

櫻雲 拾遺愚草中よ 思ふ心こそねひけり一極れものハまれを方

年花 年乃 参差といはづくも申とちりて其金神を

方違 其方ハゆりて先とわたりて其方とたぐて

其心さしとらへゆりて事也拾遺抄よ委源氏帚本

の卷中河乃方た人も内裏より葵上乃帚方よ

天一神よとらて云三光院殿ハ中がととら

中央此神よと中神も云又長神も云也両發天

一神此事也内裏より天一神也（細流）
 金櫃經曰天一立中央為（二將定吉内云云）
 中央の故は号中神天一神地星靈也四方は五
 日四隅は六日巡行すかやうは月と重祓て長
 くあるゆへ長神と云ふ此神乃ち寸寸と塞（子ガリ）す
 巳酉より丑卯角は六日ありし卯より東は五日あり
 庚申より辰巳角は六日あり丙午より南は五日あり
 辛未より未申角は六日あり丁丑より西は五日あり
 壬午より戌刻角は六日あり戌子より北は五日あり
 癸巳より天より十六日あり八方を四十四日巡畢て
 天より行ふ日天一天上と云は日より十六日乃間
 と八方へ行ても障あり此神乃ち功功は凶中（方違
 あらざる）なり抄順倭名云天一神天女化身也
 太白神

ひとあがり共金兼集

きこはへ一あがり此神と云はけあよあふ事の方ありん

作田 雑也 堀田 ありてものことなる事なれは
 まゝと云説あり尋其儀非難

野遊 非春 新式

清水 雑也ひとふと云てハ夏也只水と結ハ難なり新式
 汲といふ分りてて夏ハたすといひり 流布

水烟

波花 水邊可嫌之植物不嫌之 新式 波は花らり
 其心なるは正花也志りるハ春乃季也植物は五
 句嫌也如此受師説也冬乃詞あて入てハ正花より
 あらず春はあらん植物はあらず但句神よりり

花よたるとらちあきつたり
とも正花よわらす春よあき流布

瀧殿 六釣殿之夏之泉よのそとら其也之或物よあり
之昔ハ夏ヨ用申さとも當流非夏云云 猶可尋

桐壺 殿ううらう也 咲花抄 志くけいともひあく
下名淑景舎とのふ在照陽舎北 順倭名清涼

濁法^{ハカ}としてげいも濁也源氏かまに志きいさといり
此字假名よハさとわく朱薙院ともすくわんとす

志げい志やこしひア 辨引抄 桐を庭ようらる
お母桐壺こり也舎をつらとりやたるとハ雜舎か

とりやうふおわうられ中よてハ
ちいさ殿也 年中行事 哥合注

梨壺 照陽舎在温明殿北 順倭名 梨を庭よう

橘都 られちりきくや 年中行事 哥合注

橘都

藤原都 藤原宮 非植物 友原あは氏代事おれ雜也
流布 友原と名也大和サあわらき也

志賀山越 有為春之説然而近來非春 新式 志賀
山越ハ北白川の流りこらうらりのりり

如意嶽 志賀へ出る道也志賀ハ山城ハ志賀
こらうすいつとすも事也但堀川の次郎百首ハ春

の題ハ此れより六百番哥合も春の題よとす
ア堀川ハ百首と例よてらわらハ 詩林良枝 志

まきと連哥よハ雜也其
中ハ袖中抄ハ猶季

中ハ袖中抄ハ猶季

須磨霖雨 おろし夏也但其儀あつす不可為夏 新式龍

萬葉第十九は霖雨 霖雨は兼名苑云霖三日以上雨也

霞雨 雑也かきんハ雨の名のそと

霞谷 古今 草少は霞の若ぬをくしてるは霧をさすやあふ

深草れつとれ沙園忌乃日 詞事あり

柞森 山城 名取

柞山 同山城ハ雲沙抄あり言抄はさくそこの秋はあすこ云説あり可成歎み師説ハ雜可依句

木葉里 越中現存六は後光明峯寺抄改

ちりまふ木葉の里とさうれさすしと秋も秋

木葉沖 近江湖の沖

藤河 羨濃せいの後川あり

泉河 山城

花山 山城名所也句祈よりて可為春咲白ふたも

櫻川 常陸非植物水 邊也他准之

櫻井 山城、名取

櫻山 近江名所方角あり同名丹波あり橋の山

櫻谷 近江又後代詞より頁余より八雲清抄後頼家集より源後重

花多てさくらなとんはゆりあふもあふぬたのをさた
けそハ田上^{タカト}とて八月よりははまなりきつたりきつたり
そいさるはわくよさくらたあまうりきつたり道のきつたり
きれしやとてよめり拾玉集才四よ
あふりやとてなよりあふりあふり花さく定後代網代文

月林 山、名取

月輪 同上、後拾遺第十八よ

月輪の果るは宿成りしはよき月はよきさあり
月輪の果るは宿成りしはよき月はよきさあり
けそハ同集釋教部より月輪觀とあり月輪不入名取

星月夜 堀河次郎百首よ

有明浦 越後丈木よ

有明山 信州或、越前

月山 出雲丈木

照月山 未勘尋、枕あり

五月山 栲澤一説佐伯山乃字入てと
よりの哥あり但句あり夏あり

月里 山城
八雲

月讀里 近江支木
よりの哥あり

月讀杜 伊勢 月讀宮 同八
雲 月讀神

よりの男と 月弓尊月夜見尊月讀尊 一祈三名紹
巴乃説也

雪山 不可為山類 新式 天生大雪山乃事也

谷うらら此衣は力をたしうはせ流るゆふ乃やう人
かゝるあり 流布 新撰六帖光俊哥也 雜也 句祈は
依て冬也 天生小常は雪とて山

雪消澤 大和堀川百首よ

春日雪を雪け此はは神されてさるふとこせらと改
但馬

雪白濱 八雲

雪高濱 佐渡哥枕

雪氣山 未勘哥枕よりあり

右者花月君よ付て一やうなるありくこりか
す事と少く載之あまのくそのまゝ志事る物ハ不入又
よのけの此名所よまゝさう事あまとも際限た記
は大綱をあらう地自余准之名所ハ悉雜あり
野緑 山乃緑ホと植物は何と打越と嫌也 流布
野乃緑 山の緑ハ非秋青色とあり此をあらと
野山よむとひくも秋小ありす

蘿 苔代類也雜也蘿乃鬚曼同系ハ冬也順倭
名云日本紀私記云爲鬚曼以蘿

花紅葉 此は冬も勿論正花也四乃内なり如此あり
四季をくけく物ハいつても雜也但物より

てそのはよりくまひりてその季よなる事おか
一流布花紅葉此句ハらるるすくち今見る
ハハすくす若現在ハ紅葉と双て見ら心乃りなる
秋の花草花なりとして正花よありす秋成へ

松落葉

竹落葉 雜也夏といふ説
あゝゝ流布

柏 兒乎柏といひくも雜也安加良柏ハ
秋也といふ説不謂也是も雜也流布

指鹿云馬 史記曰趙高欲爲亂恐群馬不聽乃先設
驗持鹿獻於二世曰馬也二世笑曰係相誤

耶謂鹿爲馬問左右左右以默或言馬以阿順趙
高或言鹿高曰陰中諸言鹿者以法秦始皇本
紀拾遺ハおぼろりてるといふ人ありきればな

猪

瓶 夜分
なり

兔 かなれ事ハおぼろり幸されし
先例乃目錄をこれあらざる

鯿 夜分也獸
也流布

月毛駒

尾花蘆毛駒

新撰六帖知家

熊月輪

新撰六帖衣笠内大臣

奥山よとひおとほれ月影によめをいそぐるる

鶴巢

同子

鳥示同浮巢

鷗

巢示ても雜也 新式抄

放鷹

人の代ふ惣務此事也但ともれ務不入事也
哥よハおわりより務とくも雜也夏と云非也

野鷹

流布

鷗

鳩

箱鳥

箱鳥各萬葉

深山よあそむる源氏若菜よよ太

鳥カ此異名と云云白鳥ハ巢此一名也

深山木よよらるる箱鳥のあそむる事とこそ
雄略天皇代御時義作國つらとつふ相見
びん云人の婦子と負て山中と行きて就鳥よ
まことハこやこころ死ニ死ニ故ニと名ハハハハ
こころハこやこころ心ハ中畧也 河海抄 早來鳥

こすこいつり但八雲御抄よりなるハ定家でも不知之
只うつらうさ名ことあきしものあつすとも其分
くく一良名此異名にありたにすて或連哥の
書よ春と云云仍尋其義雜といひ

鳥音統ホトリ 雜也春と
つら非也

蝸牛

蜻蛉カチ 雜也 新式 かけられりゆりとしん春に虫れと云
わしてハ秋たうとさかといひ 五言抄 夕よ軒を

ハ乱花物シ夕と襖よいのらうけうと一は是草と
云といつるハ異説也
今又小宮うらやもつをられも春月とありゆ

八雲御抄 畧記之 是ハ陽燄也
と云ハ虫ハありす

けりふれと云ものハあつともなれと云ふハ神をぬきと云
けりふれと云ものハあつともなれと云ふハ神をぬきと云
くいつると云云又うをられ事哥よも詩よもさゆ
よいつり一とらぬん新撰六帖此哥れ公又様神ハ
出たものやにえとら 藻塩草 畧記之

篠籬 日本ニ呼ニ蜘蛛
蛛曰一ト

蟻

詞花 非春 新式 ありつらう春よもあつと一といひま
あつハ植物よ打越し句よよりて正花といひ詞
のくれやあつと云心也 新式抄 詞乃花れと云
春也正花よ成し只詞花れと云ハ春よあつと
正花よあつと云心乃花詞花何らつらあり

て嫌や別あるも答云人れども去はうさ立やふ
も心の花は心花をなす詞の花は心并古く人の
常は心かやふとてりてよふとていふ花はあつる
無言抄云詞の花春はあつるといふも今京都は春は
用二雨は心花とありて又二雨は詞の花似せ物の系
非正花春はあつす然共式乃花は面と嫌也自然正
花は用は仕立も雑也ころをり前後相遠より
新式は去小あつとてこあまハ何れ穿鑿は不可及
非降物非冬新式
鏡雪 同 髪雪 土佐
日記

頭雪 述懷也自髮此事也
鬢會降添雪 頂雪 髪霜

眉霜 述懷也非
降物非冬
鬢會霜

藤原氏

橘氏

催馬樂

れは物に雜也但青柳は梅はさふ
亦ハ春也流布 催馬樂ハ昔諸國より傳真
物と大差者一納一時氏此口すまは謡をり歌な
まはさりと名つる馬を催とてをりハ傳つた物也
此をとり催とて 梁塵愚案抄 袖中抄云催馬樂ハ
譜一条左大臣此時よあつて律呂并を定りれり

籬遊

篝火

夏はあつす只雜とて流布 篝は
火とてとりも夏はあつるハ新每心なり

予一日訪杉村民友春賢士出公自所
撰溫故日錄而見示仍賦小詩以贈
書編數帙逞精神意味深長語轉新染國
詞音猶未絕歡看文質共彬彬

真珠菴州

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Red square seal]

[Red rectangular seal]

[Red mark or seal]

